

この街と  
人を愛す

横井 秀治

## はじめに

ドイツ南部の小さな街テュービンゲンに移り住んだのは、私が三十八歳の時だった（一九八六年）。その翌年から、日本にいる友人や知人たちに向けて、テュービンゲン便りという小さな冊子を定期的に送るようになった。

それから十数年して、その便りが一冊のドイツ語版にまとめられ、それを読んだあるドイツ人のジャーナリストが、「日本人の目で見た、ドイツの日常生活」という見出しではじまる記事を地元新聞に載せた。その内容は、次のようなものだった。

横井秀治氏は、日本に住む友人や知人にテュービンゲン便りなるものを、ここ十数年に亘って発行している。それは、おそらくテュービンゲン市の定期刊行物の中で最も小さなものだろう。

日本の読者は、A4版で十ページ前後に書かれた、その便りの何に魅せられているのだろうか。

それは編集者であり、唯一の著者でもある横井氏がテュービンゲン市に住み、彼の目に留まったこと、それが伝える価値があると思われることを分析しながら書いているからだろう。また、彼は手紙の交換などによって、独自の方法で自分の考えをのべ伝えてもしている。

横井氏は東京の大学を卒業して、日本の知的ハンディのある人たちが住む施設で暫く働いていた。しかし、ドイツではその仕事に従事していない。それというのも、夫妻には重いハンディのある息子がいて、その子の介護をしているからである。彼は主夫となり、夫人は駅のミッショナーとして、テュービンゲン駅構内で働いている。

彼は絶えず自己を省みながら、便りを書いている。例えば、主夫は退屈かとの題の中で、「家での炊事や洗濯、それに子供の世話や買物などは、家族との社会的関係のなかで行われ、それが家族によって認められ、相手のパートナーからも支援されれば、主夫の仕事は変化もあるし、よろこびもある」と、綴っている。事実、横井氏は彼の人間的、感性的な経験を通じて、様々な盛りたくさんのテーマを扱っていて、それらが毎日の生活の中で、他の人たちと結ばれながら暮らしているのを証している。

大きな謙譲的表現で書かれた彼の文は、非凡な率直性（開放性）と社会的関心性とを含んだ内容とも言えるだろう。例えば、街での息子と一緒に買い物や、その子が迷子になった出来事、また、息子が自立を目指して近くのパン屋へ行く話など。その他にも、ホームレスの人との路上での数回にもおよぶ会話や、難民のスリランカ人への滞在許可の心配などなど。それらすべてが生活の場を通して、一つの小宇宙を創り出している。それを愛情溢れるタッチで記述しているのである。

便りの記事の幾つかは、二年前にテュービンゲン大学のオットー・プッツ氏によって翻訳されて一九八頁の冊子にまとめられた。それというのも、彼と一緒に住んでいる義母が、その便りを読むことができるようにと願ったからだだった。その義母は、その冊子の中で、寛容と精神に目覚めた豊かな生活体験者として登場する。

横井氏は、意識して主観的に捉えてものを書きたいと語る。しかし、同時に彼の文は部分的には入念な調査をした上で書いている。例えば、ドイツの学校制度と日本の学校制度との比較や、教会の役割と教会から脱会している人が増えてきている現状、それにナチ時

代のハンデイある人への殺害とユダヤ教会堂を燃やした水晶の夜など。それらは、日本の読者に数字と事実でより真実味をもたらしている。最近では、生命倫理についてよく書いている。知的ハンデイのある息子をもつ父親として、忍び寄る経済的視点から、この新しい生命価値に憂いと警告で訴えているのである。

彼の便りを読む人たちは、社会福祉の仕事に携わっている人たちが多く、ドイツの社会福祉問題に関心をもっている。そのようなこともあって、介護保険についてもいろいろ調べたり、高齢者ホームで一泊したりして、その体験談も載せている。

ドイツにおける女性への暴力問題は、日本ではまだまだ私的なこととして扱われ、ドイツのように公に討論されたり、資金も公からは出てないとも語った。また、女性のためのシェルターや女性性器切除の反対運動をしている女性グループにも訪れ、その話なども載せている。

次に書きたいのは、「テュービンゲンで、初めて女性市長が誕生したので、そのことを読者に知らせたい」と語った。

横井氏は青年になった息子をできるだけ、普通の生活ができるようにと願い、二人でしばしば電車などに乗っての買い物や遠足などもしている。また、数年前には父と子で、息子の生まれた日本に行き、友人の家やユースホステル、それに老人ホームで泊ったりしての旅行もした。

髪の毛を後ろで結んだ日本人の父親と、その息子は、一般的なカップルには見えないし、テュービンゲン市及びその周辺の街ではよく知られている。

横井氏は年のわりには若い姿勢を保ち、仕事と生活の意味について、彼の活動的で予測もつかない把握力を通じて、多くの人とコンタクトを持っている。また、社会的奉仕活動、例えば、重病人の訪問奉仕もしている。

彼の社会的生活は、他から絶えず学ぶことにあるようだ。目立たぬ地味な日常生活から、感嘆に値するような発見をして、そこから小さなよるこびを得て、想像さえもしないようなエネルギーを導き出す。例えば、庭に咲く一輪の花から、窓から見えるアカシアの木から、新鮮な朝の空気からなどの記事から、それがうかがえる。

彼は、「自分の生活態度は恐らく仏教から強い影響を受け、最近ではキリスト教からも多くを教えられている」と語った。

この記事から十数年経った今も、私は便りを書き続けている。ここに載せた一つひとつは、題名である「この街と人を愛す」に合うよう、選び出したものばかりである。尚、読み易くするために、手直しをした箇所が幾つかある。

## このような街

- ・石畳を歩く
- ・まさか、テュービンゲンが
- ・古いものに囲まれて
- ・勿体ない
- ・こんには、ヨコイさん
- ・木々との挨拶
- ・家庭で祝うクリスマス
- ・ネッカー川の畔

## 自分との対話

- ・関係の中で
- ・主夫の自覚
- ・パートナーシップ(1)
- ・「仕事も家庭も」の時代
- ・パートナーシップ(2)
- ・足るを知る
- ・自分自身を発見する行為
- ・早朝の素晴らしさ
- ・学ぶ集会
- ・あるがままの彼ら
- ・自分の存在

## 家族と共に

- ・ありがとう、ヒデジ
- ・義母とゲームで遊ぶ
- ・親族の集い
- ・母と娘のうた
- ・義母との昼食
- ・日曜日はタンDEMで
- ・台所に立つ、男ふたり
- ・自立へ向けて
- ・三十歳の誕生日
- ・目に見えない自立

## 周りの人たち

- ・「もうダメなんだ」(1)
- ・「もうダメなんだ」(2)
- ・一分間の握手
- ・情感豊かな人
- ・ベラおばさん
- ・まごころ
- ・百歳の秘訣
- ・何が大切か
- ・駅ミッシェンの人たち
- ・ベルニングさん
- ・再会
- ・ロマの子供たち

## 地域の連帯性

- ・分離しないように
- ・クレープの香り
- ・弱くなっている
- ・学び続ける性
- ・女性を守るシエルター
- ・一枚の写真
- ・命をかけて
- ・語り継ぐため
- ・広島からのメッセージ
- ・届け、この願い

## 共生

- ・一日がはじまる
- ・正門の木
- ・裏門の木
- ・周りの人と協力しながら
- ・世界は一家族
- ・Tさんからの手紙
- ・人はどこへ帰るのでしょうか
- ・共感する社会へ
- ・共に、そして感謝

## このような街

### 石畳を歩く

テュービンゲンを初めて訪れたのは、大学三年生の時だった（一九六九年）。世界をこの目で見たいという好奇心に駆られて、寝袋をリュックに詰め込んで登山靴を履き、ヨーロッパ、アメリカへ渡ったのだ。

ドイツでは、半年間ほどアルバイトをして、その際に貯めたお金でスイスやチロルの山々を歩き廻り、そのついでにテュービンゲンに立ち寄ったのだ。一泊の予定だったが、四泊にもなってしまうのを思い出す。それだけ、この街に魅せられてしまったのだ。

この街の美しさは、当時も今も変わってはいない。違いがあるといえば、最近では観光客をよく目にするようになったことだ。年間二百万の人が訪れてくる。

彼らの多くは、手にカメラを持って、旧市街の高台に立つ城からマルクト広場を抜け、ネッカー橋の約一キロの石畳道をよく歩いている。どこを撮っても、絵になる光景だからだろう。日本から友人や知人たちが来ると、私もこの道を案内することになっている。

まず、私の家の裏門を出ると、目の前には、一六〇六年に造られたテュービンゲン城の石門が威風堂々と立っている。その門を潜り、石畳の坂道をゆつくりと上ると、展望のよい高台に出る。

前景には旧市街が一面に広がり、遠方には濃い緑でおおわれた低い山々が、緩やかな曲線でつながっているのを望めることができる。この地形から、大昔はここら一帯が海底だったのを知ることができる。

テュービンゲン城内を暫くのんびりと歩き廻ってから、先ほど潜った城門を出ると、この街最古の家々が建ち並ぶ曲がりくねった小路となる。ある家柱には、一四九一年の文字が刻まれている。さらに薄暗い狭い路地を下ると、急に前面が明るくなる。マルクト広場である。

広場の周囲には、中世に造られた木組みの五階建ての家々が、肩を組んだようにして建ち並び、窓辺には色鮮やかな花が植えられている。その中でも、ひと際目立つ大きな建物が、十五世紀に建てられたルネッサンス様式の市庁舎だ。

この広場で月・水・金曜日の午前中は、新鮮な野菜と果物、それにチーズ、ハム、パン、鱈などを買うことができる。並んでいる人参などは、農家の人が直接店を出しているので土がついたままだが、かじると甘い。

この朝市は老若男女の人たちでいつも賑わい、至るところで立ち話をしている。その情景を目にすれば、ここが市民の社交の場ともなっているのを知るだろう。また、街の祭りやジャズコンサートなども、この広場でよく催される。それに、夏になると、若者や観光客たちが日の沈む十時過ぎまで、石畳の上に座ってビールを飲みながら夕涼みをしている。この付近一帯は車の乗り入れが禁止されているので、車の騒音をまったく耳にしないのがいい。

ここをあとにして、石畳の道を踏んで行くと、バイオリンなどを弾いているストリート・ミュージシャンによく出会う。彼らが奏でる軽やかな音色を耳にしなから、さらに進むと、高く聳え立つ、後期ゴシック造りの教会の塔が目飛び込んでくる。

その塔に登り、下を望むと、赤みかかったオレンジ色の小さな屋根がマッチ箱のように可愛らしく並び、模型のように映るその様に感嘆の声を上げない人はいないだろう。ここで暫く東西南北を眺めたあと、らせん状の階段を降りると、ヘルマン・ヘッセが四年間見習い店員として働き、今も営まれている書店前が出る。

そこを通り過ぎて右に折れると、変化に富んだしゃれたショーウインドーが並ぶ坂道となる。さらに下って行くと、イタリアのアイスクリーム店に出る。暑い日には、この店の前はいつも長蛇の列となっている。辺りを見回すと、老いも若きもアイスクリームを手に持ちながら、大きな舌で包むようにして食べている姿ばかりである。

この買い物通りで目につくことは、男性たちが乳母車を押している姿だろう。立ち話をしている男性たちも、乳母車を揺らしながら会話を楽しんでいる。

アイス店からさらに行くくと、ネッカー橋の上に立つ。百メートル近くもある橋の欄干には、赤・黄・白・紫色などの花が咲き、甘い香りが一面に漂っている。底から目線を下に向けて、大河ラインの支流であるネッカー川の水が緩やかに流れ、川面には鴨や白鳥が遊び、尺ほどの鱒がスイスイと泳いでいるのが見える。

ここからの眺めが、美景なのである。川沿いには、中世に建てられた家々が色とりどりに並び、川面には一本の竿で操られながら小船がゆつくりと揺れ、川べりのしだれ柳の細い枝が水面に触れている風景に、目を見張らない人はいないだろう。それらをバックに、観光客たちはよく写真を撮っている。テュービンゲンの顔とも言われているところである。

この橋の中央付近に中洲へ通じる階段がある。そこを降りると、樹齢二百年にも及ぶプラタナスの大樹が百本ほど並ぶ土道となる。そこをさらに行くと、ローレライの歌を作曲したジルヒャーの大きな銅像に出合う。川面に目を移すと、古風な造りの家並みが、揺れ動いているの見える。特に、日が傾き、朱い陽がさざめき輝いている風光は、メルヘンの世界とも言えるだろう。

約一キロも続くこの中洲には、リスたちが住んでいて、時々彼らがすばしっこい速さで、木に登る姿を見かけることもある。耳を澄ますと、小鳥たちの鳴く声がどこからともなく聞こえ、キツツキが幹をたたく音も耳に入ってくる。それがいつそう静けさを呼ぶのである。四季折々、自然の変化を体で知ることができる並木道だ。

その他にも、市内にはいくつもの景勝地がある。例えば、学生や子供や市民が憩う緑の公園や、ピカソやセザンヌなどの絵を展示する美術館もある。それに、十二ヘクタールの大学植物園内には、日本庭園もあって、花が一斉に咲く五月、この植物園を訪れると、春のよるこびを体で感じるができるだろう。花好きな人にとっては、飽きない園だ。

見学するところはまだ幾つもあるが、何といっても戦災に遭っていないこの街を、自分の足で廻れば、中世の時代を肌で感じ、歩いているのがより楽しくなってくるだろう。

## まさか、テュービンゲンが

どこの書店・キオスクに行っても、月刊誌フォーカスを買うことができない。すべて売り切れになっていたので。それでも何とか手に入れようとして、街の図書館に足を運んだのだが、棚にはなかった。仕方なく、車で十分ほど走った隣の街で、やっと購入するこ

とができた。

「ドイツ国内の五四三の市町村のうち、市民生活のもっとも高い街はどこか」

との調査記事が、新聞に載ったのは昨日のことだった。驚いたことに、人口八万人のテュービンゲン市が第一位に選ばれたのである。それを知った市民がキオスクに殺到したのだった。

その調査はミュンヘンのある研究グループが十八カ月に亘って、三万個のデータをもとに、次のような六つの分野の総合点でランキングリストを決めるものだった。

経済分野……所得額・失業率・社会扶助金需要者率・土地の価格など

環境分野……空気の汚れ・水の鮮明度・森や林などの緑の面積・交通の便など

文化分野……公園・劇場・図書館・映画館・美術館などの数

安全分野……交通事故・犯罪などの件数

健康分野……癌・呼吸器・循環器の病気で亡くなる比率など

福祉分野……幼稚園・高齢者ホーム・診療所・病院などの数

その結果、テュービンゲン市が一位になったのである。二位はボン、七位はミュンヘン、一五位はハイデルベルグ、五五位はベルリン、六八位に初めて東部ドイツ（旧東ドイツ）のローストック市、最後の方はほとんどが旧東ドイツの街々だった。

この記事を読んで、財政難に悩ませられていたテュービンゲンの市長は、一時それを忘れ、よろこんだことだろう。また、ある市民は、土地や住宅の価格が上昇するだろうとよろこんだかもしれない。反対に、家賃が高くなることを懸念した市民もいたかもしれない。しかし、総じてみな街のイメージがよくなったとよろこんだことだろう。

人口八万人が住むテュービンゲンは、大学街ということもあつてか、コンサートや芸術関係の展示が頻繁に催され、映画館も多い。また、街全体が森に囲まれているといった感じなので、至るところで緑を目にする。

観光客が年々増え続け、それにホームレスの人たちも、ここに集まってくるのである。居心地がよいからだろう。

ただ、石畳の坂道が多いので、お年寄りや車椅子に乗った人は不便を感じるかもしれない。特に、冬は路面が凍るので、気をつけなければならぬ。それをのぞけば、この街は実に美しい。ドイツ国内で、市民生活のもっとも高い街に選ばれたのも肯ける。

先日、この街の女性市長が買い物かごを持って、通りを歩いていたのを見かけた。

「こんにちは、市長さん」

その声をかけたくなるような雰囲気、ここにはある。

## 古いものに囲まれて

テレビを観ていたら、画像が急に消えてしまった。十八年前に製造された画面の大きいこのテレビ、妻の叔母から譲りうけたもの。今まで一回の故障もなく、よく映っていたのに。

さて、どうしようかと思ひ、

「もうだいぶ古くなったから、新しいのを買おうか」



と、妻のゲルトルートに訊くと、

「修理に出せば、まだ観ることができないのではないの？」

と答えたので、街にある三件の電気屋に電話で問い合わせることにした。

最初の店では、「直しても、ほかの部分が故障すると思うので、新しいのに替えたらどうですか」と勧められ、次の店ではじめからその気はなく、「もうムリでしょう」との返事。

三番目の店に電話すると、「画像がまだよく映るなら、修理しますよ」と言ってくれたので、そこに持って行くことにした。

そのテレビ、以前と同様に今でも色合いもよく映っている。テレビもそうだが、私はなんと多くの古いものに囲まれながら暮らしているのだろう、と思う時がしばしばある。

住んでいる家は、四百年前に造られた五階建ての建物。ここに四家族が暮らし、私たち家族は三階の八十平方メートルの広さに住んでいる。

この家には、時代を告げるように、黒ずんだ大きな石で囲まれた地下室がある。そこはまるで洞窟みたいで、夏は涼しいが、冬は肌を刺すような冷たさとなる。ワインやリンゴなどを貯蔵することができ、ジャガイモなどは一年以上置いていても腐らない。日本から訪れた人を、その地下室に案内すると、「へえー、すごいところね」と皆驚きの声を上げる。

中世に建てられた家には古めかしいものが合うようで、居間には妻の祖母が使用していたゼンマイ仕掛けの時計が壁に掛かっている。その時計、部屋の壁が垂直ではないので工夫して取り付けられてあって、今も一メートルほどの振り子を左右に動かしながら、一時間ごとに「ポーン、ポーン」と時を告げている。

家具も古く、テーブルや椅子、それに食器棚などは五十年以上も前に造られたものばかりだ。が、どれも固い梨の木でできているせい、傷みはほとんどない。三年前、ゲルトルートと壁紙の張り替えをした際、それらの重い家具を移動するのに、ひと苦労したことを感じ出す。

妻は、祖母が使用していたソファや椅子などの布地が傷んでくると、小さなリヤカーの上に乗せて、家具を製造しているところに持って行く。それにかかる費用は、新しい椅子やソファを買うよりも高くなるが、修繕するだけの価値はあるようで、日本から来た家具職人が、居間にある時代のついた椅子を目にして、「これは、一脚八〜九万円はするでしょう」と言ったことがあった。

居間の床は細長い木の板が重なっていて、その上を歩くと、「ギシイ、ギシイ」と音がする。昔の木造校舎の板敷きを歩くようなものだ。また、階段も木で造られているので、長い年月を経た今は、足の踏み跡でいくらか窪んでいる。が、よく磨かれているので古さを感じない。

木といえば、息子のミヒヤエルが小さい頃によく遊んだ積み木は、長短のシンプルな棒だが、自分で工夫しながら遊ぶことができる。義母が子供の時分に使っていたものだ。

毎日の食事に使っているナイフとフォークは、妻の両親が使用していたもので、スプーンは大きく、やっと口に入るくらいなのに最初は驚いたものだった。また、コーヒール用の小さなスプーンは、銀で作られているせい、少し力を入れると、容易に曲がってしまう。それに銅製の鍋や湯たんぼなども古いものだ。

細長い浴槽は半世紀前に造られたもの。数年前までは薪を焚いて湯を出していたが、大家がとうとうボイラーを取りつけてくれたので、簡単に浴槽に浸かることができるようになった。ただ、残念なことは、湯の水が硬くなってしまったことだ。

周りを見回すと、最近何を購入したのだろうかと考えてしまう。二年前に買った、洗濯機が浮かぶ。脱水は別の機械です。妻が言うには、「脱水も一緒にする洗濯機は、長持ちがしない」と。この洗濯機も十年、二十年と使い続けていけるだろう。

時代がかかったものを大切にしながら維持するには、それなりに努力を要する。特に、経済的には厳しさがあるのを知る。

例えば、家から一歩外に出ると、約四百年前に建てられた、この地方独特の木組みの家々を縫うように歩くことになる。それらの外壁は、約三十年に一度の割で塗り替えられる。それにかかる費用は約二百万円である。屋根瓦は、五十年に一度は取り替えられる。建物を所有している人たちは、大変なことだ。

通りの美観がよいのも、そのような並々ならぬ努力がなされているからだ。街が住民の心を映し出す鏡となっているのを知る。

また、家の中でも時間ごとに聞こえてくる教会の鐘の音は、数百年前から鳴り響いているし、これからも数百年と鳴り続けていくだろう。そのように思うのも、家の斜め前に建つ木組みの大きな学生寮（百二十名）が、一年前に二億円かけて修理された時、妻が、「四百年前と同じ姿になったのだから、それと同じ四百年間は建ち続けていくわ」と言ったからだ。

歴史が時と共に引き継がれているのを感じながら、私はこの街で暮らしている。

## 勿体ない

次のような手紙を、或る女性からもらった。

「東京湾では、ハエが大発生したそうです。ゴミが増えたことが原因です。テュービンゲンがそれほど美しい街なのは、一人ひとりがそれぞれ気を使っているからなのでしょうね。日本では買物をする時、何重にも袋に入れたり、包んだりして過剰包装です。ビンも色々な形が様々です。チョコレート一つでも、美しく丈夫な箱に入っているのです。それがみんなゴミになります。私は生協に加入しているので、段ボール、ビン、広告ちらし、牛乳パック、新聞紙、化粧箱など、細かく区分けして廃品回収に出します。これも、業者にはあまりお金にならないので、引き取り手が少ないのです。ドイツのゴミ事情はどうか、と興味があります」

主夫をしている私にとって、このゴミ処理は毎日身近に触れている問題でもある。家庭から出る廃棄物は、「混ぜればゴミ、分ければ資源」といわれているように、私の家でも分別している。

例えば、ヨーグルトカップ、ビニール袋、缶、アルミニウムなどは、各家庭に配られた透きとおる大きなビニール袋に洗って入れ、家の前に出す。それらは、二週間ごとに回収車がきて、街外にあるゴミ分類工場（私企業）に運ばれ、再生資源となる。

生ゴミは、以前は知人宅に設置してあるコンポスト箱まで運んでいたが、今は高さ一メ

トールもある緑の生ゴミ用の容器に入れ、家の前に出すようになった。冬は二週間、夏は一週間の間隔で撤収される。

ちり紙や小さなゴミは、高さ五十センチの黒い容器に詰めて外に出しておく、二週間ごとに回収される。また、ビンは近くの鉄製コンテナまで持ち運び、白・緑・茶色に区分けされた鉄器内に投げ入れる。

その他に、新聞紙、木、衣類、靴、危険物などは、決められた日に家の前に出しておけば、トラックなどで運ばれていく。

ゴミを分別していた最初の頃、どこに入れたらよいのかと迷ったものだ。そのために、各家庭に配られたゴミのABC表を台所の壁に張っていた。が、暫くすると、それを見なくても済むようになった。そのようなことを通じて、ゴミ問題への関心も高まり、次のような心がけをするようになった。

パン屋に行く時は、前に包んでくれた紙袋を持ち、それに入れてもらう。買い物かごは必ず持って出かける。店に用意されている大きなビニール袋は決して使わない。また、牛乳や飲料水の容器は、リサイクルができるビンを買う。

ゴミをしつかりと分別すると同時に、ゴミを出さないようにもしている。この街では、自動販売機は通りにほとんどないことも、それに一役かっている。あったとしても、煙草用の小さなものか、トイレなどにおいてあるコンドーム用のものだ。スーパーマーケットなどでは、缶入り飲料水売っていない。

また、家でいらなくなった家具類や電気器具類の大きな物を回収する日が年に一回ある。その日は、家の前に置かれたものを、多くの人が懐中電灯を持って探している姿を至るところで目にする。それも若い女性や紳士、それに主婦や学生や外国人などさまざまだ。先日、私も一脚の椅子を見つけ、家の居間に運んだことがあった。

その他にも、年に二回ほど、落とし物の競売の日があって、そこで三百円の腕時計を買ったことがあった。この日は、街のすべての落とし物が即売され、多くの市民が参加する。この競売、ユーモア溢れるなかで行われ、その会話のやり取りがとてもおもしろいのだ。とにかく、使用できるものは他の人の手に渡る。

そのような中で暮らしていると、物を大切に使い、物を簡単に捨てない「勿体ない」の意識が自然と身についてくる。

## こんには、ヨコイさん

市庁舎から歩いて一分もしないところに、ネッカーハルデ通りがある。ネッカーは川の名、ハルデは坂の意味、文字のごとく川に沿った坂道である。ここに、私は住んでいる。

この通りに建つどの家々からも、眼下に流れるネッカー川がよく望める。昔は、大学教授が好んで暮らしていたところでもあった。しかし、今は一番地のパン屋から、三百メートル先のゆるやかな坂道の下まで、ホテル、学生寮、レコード店、ギリシャレストラン、政党事務所、牧師館、幼稚園、難民集会所、郷土博物館などが並んでいる。それらの建物は、約四百年前に造られたものばかりである。

この通りには、ドイツ人以外にも多くの外国人が住んでいる。私のほかにもギリシヤ人、

イギリス人、フランス人、ガーナ人、トルコ人、イラン人、それに学生寮に住む外国人を加えたら、数え切れないほどとなる。

彼らと通りで行き逢うと、お互い挨拶を交わす。特に、知り合いのドイツ人は、

「こんにちは、ヨコイさん」

と、こちらの名前を必ずつけて呼ぶ。それに応えて、私も、

「こんにちは」

と言うが、相手の名前は知っているにもかかわらず、「こんにちは、〇〇さん」との言葉がなかなか出てこない。そのような時、自分は日本人だなど思ったりする。多分その原因となっているのは、次のようなことがあるからだろう。

こちらの人は、個としての存在の自分を表現しながら暮らし、相手との境界線をはっきりと見つめる。そのことを、自分が生きていくうえで大切なこととしている。そのようなわけで、挨拶の際も、自分の存在とは異なる相手の名前を言う。

その点、私は相手との境界線をそう強く意識するわけではないので、挨拶を交わす際も相手の名前をつけない。しかし、時が経つにつれて、これでいいのかと思うようになった。というのも、通りで逢う人が、「こんにちは、ヨコイさん」とこちらの名前を言ってくると、その人に親密感を覚え、立ち止まって会話をするようになったからである。

それならば、私も相手の名前を呼びながら挨拶を交わそうと心がけた。が、口から相手の名前がすらすらと出てこない。まあそれでも、これでよしとしている今の自分でもある。

三十八年間、日本で培われた慣習は、そう容易に変わらないものだ。

## 木々との挨拶

テュービンゲンの街は、緑の大きな公園内に在るといった感じなので、家から一歩外へ出ると、様々な樹木に出合う。

高い木もあれば、低い木もある。枝が上へ突き上げている木もあれば、横に伸びている木もある。花が咲いて実のなる木もあれば、葉を一年中つけている木もある。それら一本一本を眺めていると、その個性ある姿に、つい心が奪われてしまう。

街の中を散歩したり、買物をしながら、よく立ち止まって前に立つ木を眺め、時には樹皮に触れて、「あなたは立派だね」と語りかける。木との挨拶である。すると、心が自然と膨らんでくるのである。

しばしば触れるのはプラタナスの木だ。排気ガスや寒さやほこりに強いこの木は、街の公園や墓地、それに街路樹として至るところに立っている。特に、ネッカー川の中洲に百本立ち並ぶ樹齢二百年にも及ぶプラタナスの木には、よく手をあてる。灰緑色のまだらな木肌がとても滑らかで、感触がいいからである。

これらのプラタナスの巨木をよく観察すると、老いてきた枝は丈夫な枝に支えられるように針金がかかり、倒れそうになった木は隣の力強く立つ木とロープでしっかりと結ばれている。また、幹が大きく割れたところには、ニスのようなものが塗られ、一本一本がよく手入れされているのがわかる。

夏の夜は、この木の下でジャズコンサートやワインの夕べが催される。そうすると、人

ばかりでなく、手の形をした大きな葉と二センチ球状の実が鈴のようにユラユラと揺れ、一緒に酔い踊るのである。その木々の下には、幾つも木のベンチが並び、若いカップルが何も語らずに、静かな時間を共有している姿をよく見かける。濃い緑色の葉から発散する甘い香りが、ロマンチックな気分させるのだろう。

この中洲の川辺には、濃く繁った榛（ハン）の木々が立ち並び、枝垂れ柳の細長い葉が水面に垂れている模様に、風情を感じない人はいないだろう。観光客がよくカメラに納めるところでもある。

さらにプラタナウスの道を進むと、今までとは違った風景が展開しはじめてくる。背丈三十メートルほどの楓の木々が、お互い競うかのように上へ上へと亭々と伸び、地には木から落ちた種が芽を出して密生している。また、下草やつたも多い。時々リスが素早く木に登っている姿を見つめる。それに小鳥たちの鳴き声が聞こえ、キツツキが幹を叩く音も耳に入ってくる。

ここから眺める五月初旬の光景が素晴らしいのだ。向こう岸に建つ大きな学生寮の庭には、リンゴやナシやチェリー、それにプラムの薄紅色の花が並んだように咲き、それが川面に揺れているのである。春の訪れをより感じるところだ。

以前その庭で、日本から来た学生たちと一緒にビールやワインを飲み、語り明かした日々もあった。皆数年ここで学問にいそしんでから帰国するが、いつか自由な時間ができたら、ここを訪れてくるだろう。そうしたら、以前とほとんど変わっていないこの街は、彼らを心から歓迎するだろう。もちろん、私も会ってみたい。

全長約一キロにも及ぶこの並木道、四季折々、楽しめるところだ。さらにチュービンゲン駅へ向かって歩いて行くと、鴨や白鳥が遊んでいる大きな池に出る。その近くには、六本の大きな西洋栗の木（マロニエ）が立ち並んでいる。

あれは、四年前の初冬のある日のことだった。そのマロニエの下を通った時、驚いたことがあった。上に伸びる太い幹と多くの枝がちよん切られ、六本の大木が丸坊主のようになっただけからだ。

それを見て、ここまで人間の手を入れないでもよいのではないかと、寒々とした気持ちになった。木がかわいそうでならなかった。

それから四年が経った今、それらの木々に咲く花は確かに前よりもふさふさとなって、木全体に大きな葉を付けるようにはなった。が、それでも思ってしまう。木が人と共に暮らしていく中で、これも仕方がないのだろうか。

このマロニエの横に、一本の若い桜の木がある。六本のマロニエの見事な花と較べると、桜の木の花は、今は優雅さにおいては負けてしまう。でも、年々成長し、あの淡色の花が木全体を覆うようになったら、西洋栗に見劣りはしないだろう。その桜の木に、話しかけた。

「日本人のわたしは、あなたの美しさを知っていますよ。咲き誇ってください」

「ありがとう。見続けてください」

桜の木は背いて、微笑んでいるような。

ネッカー橋に再び戻ってから二百メートル先に行くと、市民が憩う公園（旧植物園）に出る。その一角に、子供たちが遊ぶ場がある。ミヒヤエルが小さい頃、よくブランコや滑り台をしたところである。その脇に、樹齢二百年のブナの大木が堂々と立っている。

真夏のある日、その木の広い樹冠の下にいと、とても涼しかった。また、急に雨が降った際に、そこにいと、濡れないで済んだものだった。

ブナは、この地では「森の母」と呼ばれ、樹皮に触れると、母のようなあたたかさとしさを感じ、私たちを守ってくれる木だ。

この広い公園の敷地内は芝生で覆われ、暖かい日は若者たちがシャツを脱ぎ、上半身裸で寝そべったり、曲芸をしたりしている。外国人の家族も、よく来るところでもある。

あれは、十年以上も前のことだった。テュービンゲンに住んでいる日本人家族十数名が公園に集まって、モクレンの花が咲く木の下でゴザを敷き、巻き鮎や稲荷すしなどを持ち寄ったことがあった。華やかな心弾んだひと時だった。

公園には、銀杏の木も立っている。ある日、その下を通ると、幾つかの黄色い実が地に落ちていた。ということは、どこかに異性の木が立っているはずだと思い、辺りを見回すと、十五メートル離れたところに、やや大きめの銀杏の木が見えた。

目の前の木に話しかけた。

「黄色い実がよくなくなっていますね」

「ここに植えられたのが百年前。やっと小さな実がなるようになったわ。でも、ここに住む人たち、それに鳥たちもわたしの実を食べてくれないわ」

「あなたたちイチョウの木は、樹木のなかでも最も古く、二億年以上前からこの地上に自生していましたよね。そのあなたたちが、日本や中国からヨーロッパへ移植されたのがわずか三百年前のこと。この地では、まだエキゾチックな木と見られているのですよ。でも、そのうち、あなたの実がおいしいのを知るでしょう」

「そうしたら、この人たちは競ってわたしの実の種を食べるでしょうね。私たちの寿命は千年ほど。これから向こうに立つパートナーと、大きな実がなるように仲良く暮らしていくわ」

「そのときは、わたしも食べてみたい。だけど、私たち人間の寿命は長くて百年なので、それができるかどうか。それに較べると、あなたたちは大したものですね」

この公園から三百メートル離れたところに、大きな墓地がある。広い敷地内は様々な木々で覆われ、小鳥の囀る声がどこからともなく聞こえてくるところだ。ここに私たち家族は、月に二回ほど訪れ、マルクト広場で購入した根の付いた花を、約二平方メートルの墓に植える。

妻の先祖代々が眠っているその墓には、赤い軟らかい実のついたイチイの木が枝を広げている。このイチイの木、別名アララギは、妻が、「長生きを象徴する木なのよ」と言ったことがあった。墓地や教会の庭でよく目にする木だ。

私の両親が眠る墓は東京の浅草にあつて、周りはコンクリートの高い建物で囲まれ、木々はなく、小鳥の鳴く声のかわりに車の騒音が聞こえるだけ。それに、狭い敷地内には、墓石がびっしりと並び、散歩するような気分には到底なれないところだ。しかし、テュービンゲンの墓地は、木と土の織りなす匂いの中で、花を植えたりしながら、ゆっくりと時を過ごすことができるのである。

この静かな墓地の裏門を出たところに、一本の菩提樹（リンデン）が立っている。この樹ほど、ドイツ詩に多く詠まれたものはないだろう。ドイツ人が最も愛している木で、東洋の銀杏と同様に、長生きする木でもある。八百年から千二百年は生き続けるだろう。市

内で何本も目にする木だ。

その中でも、街外れのレストランの庭に立つ樹齢八百年のリンデンは見事である。

百名以上座れるビアガーデンの真ん中に、その木はデンとして樹冠を思い切り広げ、威風堂々と立っている。その下で、日本から来た人とよくワインやビールを飲み、この地方の料理を食べたりする。特に、六月の夕暮れの時刻になると、無数の薄いクリーム色の小花の甘い香りが漂い出し、私たちの会話がより弾んでくるのである。

高台に建つこのレストランからの眺めが、また、美景なのである。緑の盆地が夕陽に照らされて、刻々と赤く染まっていく様は、光が醸し出すスペクタクルのようなものだ。田園詩的風景を醸し出しているこの一帯は、排気ガスや高乾燥に弱い菩提樹がよるこんでいられるところでもある。

このレストランの裏は森となっている。歩くことが好きな私は、しばしば一人でそこを散歩する。と、時々幼稚園の子供たちが先生に連れられて歌を唄ったり、大きなカシワの木の下に落ちていている三センチほどのどんぐりの実や松ぼっくりを拾ったりしている姿を見かける。

彼らの声で森全体が賑やかとなるが、いなくなると、再び静寂となる。木々の梢に止まって囀っている小鳥の声、それに自分の足音だけが聞こえるだけである。

私は、時々立ち止まっては、周りに立っているマツやブナ、それに楓やカシワの木々を仰ぎ見ながら、

「あなたたちは立派ですね。四季折々あるがままの姿で暮らして」

と、話しかける。そうすると、彼らから勇気をもらって慰められ、元気になってくるのである。

## 家庭で祝うクリスマス

寒さを感じ出す十一月中旬、こちらの人たちは、毎月の給料以外に約一か月分のクリスマス手当を得る。この頃から、商店街のウィンドウにはクリスマス用の商品が並びはじめ、通りにも少しずつ飾り付けがされていく。ただし、日本のようなきらびやかさはなく、音楽は街角に一切流れない。

各家庭それに教会では、克蘭ツ（輪）に立っている四本のローソクのうちの一本に、明かりが灯り、クリスマスが近づきつつあるのを人々は肌で感じはじめる。また、教会やホールなどでは、バッハやモーツアルトの曲などが盛んに演奏されて、どここのコンサートに出かけようかと迷うほどとなる。

私たちの家でも、音楽好きなミヒヤエルがクリスマス曲のカセットテープをかけて、メロディーに合わせてながら体を動かして楽しそうにしている。

寒さが一層深まってくると、どの街でもクリスマス市が立ち、チュービンゲンでもマルクト広場や通りに屋台が出て、大勢の人で三日間賑やかとなってくる。ハンデイのある人たちのグループも店を出し、自分たちの作ったものを売ったりもしている。以前、木のおもちゃを作っていた私も、家で作ったクリスマス用飾りを、そのグループに提供したことがあった。とにかく、街をあげての市となるのである。

厳しい寒さの中、吐く息が白く見え、熱いワインを飲みながらの屋台見学は独特だ。この日ばかりは人と人の肩がぶつかり、身動きができないほどとなる。

子供たちにとってもうれしいことがあるのだ。それは十二月六日聖ニコラウスといって、サンタクロースにあたる人が手にムチを持って、大きな袋を抱え、幼稚園や学校・家庭などに現われて贈り物をするからだ。

日曜日になるたびに、居間にある克蘭ツのローソクに二本、三本と明かりが灯り、友人たちからのクリスマスカードと贈り物が家に届くようになる。

いよいよ二十四日となる。午前中は、数日前にマルクト広場で購入した高さ二メートルほどの生のトウヒ（樅木の一種）を居間に運び、横に伸びた枝に、妻がワラで作った星や私が作った木の飾り、それに市で買ったローソクなどをミヒヤエルと一緒に飾り付ける。彼にとって、待ち遠しかった時間なのだろう、終始ニコニコ顔だ。

午後四時になると、家族と一緒に近くの教会に行き、座る席もないほどの教会堂内で、出席者全員で共によるこびの声を上げるのだ。その礼拝も一時間で終わり、帰宅して、妻が作ったジャガイモのサラダと湯気の立ったソーセージを囲んでの夕餉となる。

それが済むと、ツリーの枝に立っているローソクに火を灯し、日本から、ドイツから届いた贈り物を皆で開ける。包装紙の紐をほどくたびに、私たちは歓声を上げ、クリスマスの歌を唄い出す。と、その声がローソクに届くのか、炎が時々揺れるのである。

二十五日と二十六日は、友人や親戚の人たちと共に鳥料理などを食べ、ゲームをしたりして過ごす。

この三日間、街の通りには人の影はなく、ひっそりとしている。それぞれの家庭で、クリスマスを手静かに祝っているからだ。

## ネッカー川の畔

テュービンゲンの街を貫流しているネッカー川。

いつもは水が穏やかに流れ、水面には鴨や白鳥が遊び、小船が揺れているが、ひとたび強い雨になると、水位が上がリ、水は土色となって渦を巻きながら狂ったように走っている。いつか、この川の水が最初に湧き出るところを見たいと思っていた。その機会が訪れた。

早春の雨が何日も続き、木々の新芽や蕾が噴き出し、新緑が眩しいくらいになりかけた五月上旬のある日、ひとり車に乗って、目的地の黒い森地方へ向かった。

澄み切った青空の下、ゆっくりとした速度で田舎道を走った。車窓からは、黄色く咲いている菜の花と、実の詰まっていない淡緑の背の低い麦穂が、交互に縞模様を呈しながら延々と続いているのが見える。それを囲むように、りんご、梨、プラム、チェリーの花が、やわらかい太陽の光を浴びながら輝くように咲いている。まるで白い服を身に着けた花嫁が、恥じらいながら微笑んでいるかのようにもあつた。心は自然と躍り、これから出合う源流に思いを馳せた。

一時間半で、目指すシュバイニンゲン市郊外の林に到着する。車から降りて、人気のないうっそうとした道を歩き続けていると、一つの掲示板を目にする。



「ここがネッカー川の源泉。この百ヘクタールの湿原地帯の水がネッカー川とドナウ川へ走っている」

それを読み、「エッ」と私は驚きの声を上げた。あの美しき青きドナウ川とネッカー川とが繋がっているとは、想像さえもしなかったからだ。

少し行くと、目の前に沼のような湿原地が見え出した。遠くが見えないほどの広い円を描いている。まず、その沼の周辺を歩くことにした。

自然保護地域となっているせいだろうか、小鳥の囀る声が至るところから聞こえてくる。湿地上に繋ぎ合わせた板道を踏んでいると、ギィギィと音がする。尾瀬の丸太で作られた木道がふと浮かんでくる。辺りには、瑞々しい薄緑の葉を付けた白樺の木々が立ち並んでいる。春の訪れを肌で感じながら、ゆっくりと歩き続けた。

池の周囲を一時間かけて回ったが、この湿地帯の淀んだ水が本当にネッカー川の源泉なのだろうか疑問を抱いた。真偽を確かめようとして、向こうから犬を連れてくる人がいたので、訊ねることにした。

「掲示板には、ここがネッカー川の源泉と書かれていましたが、そうなのですか。川らしきものは、どこにも見あたりませんでした」

「一般の地図には、ここが源泉と記されていますが、そうはつきり断定できないでしょうね」

「では、まだどこかに源泉といわれているところがあるのですか」

「ここから一キロ離れたところに、市の公園があって、そこにネッカー川の泉と証されているところがありますよ。そこへは、もう行ってみましたか」

「いや、まだです」

そう言ったあと、その人にまた、訊ねた。

「この湿原の水は、ドナウ川へと流れているのですか」

「数キロ先にドナウ川の支流があって、そこへこの水は走っているのです、そう言われていますよ」

それを聴き、ネッカー川に行くことにした。

公園は直ぐ見つかり、泉が湧き出ているところに立つと、ポンプから吸い上げられた水が、水道の蛇口から絶え間なく流れていた。水は澄んでおらず、これが泉の水だろうかと思った。手も顔も洗う気になれないほどだ。

蛇口上の銅板には、「一五八一年に、この州の公爵によって、ここがネッカー川の泉とされた」と記されていた。流れ出た水は小さな溜池へ流れ、周りには川らしきものはどこにも見あたらない。

ベンチに腰かけて、濁った溜め池の水を眺めながら、朝握ってきたおむすびを食べ出した。どうも釈然としない。これは地元の人に訊ねるのが一番だと思っていると、買い物籠を持った女性が前を通ったので声をかけた。

「ネッカー川へ流れ出す最初の一滴を見たくて、テュービンゲンからやって来たのですが、この蛇口から出ている水が、本当にネッカー川へ最初に流れ出る水なのでしょうか」

「この噴泉水は、歴史的に言い伝えられたもので、源流を自分の目で見たかったら、ここから二キロ離れたところへ行くといいわ」

その女性から教わった場所に行くと、土手に囲まれるようにして、一メートル幅の小川

が走っていた。

土手に立って、川床をのぞくと、透き通った流れにそって三十センチほどの水草がユラユラと揺れているのがくつきりと見えた。さらに、五十メートルほど歩いて行くと、人工で造られた出水溝から水がほとぼしるようになっていた。地下から溢れた水が集まり、最初の一筋の流れとなって外に現われたところだ。その水に触れた。ヒヤッとするような冷たさである。

標高七百メートルの黒い森地方から湧き出たこの水が、ネッカー川（全長三百六十七キロ）の畔にあるテュービンゲン、ハイデルベルグへと流れ、大河ラインへ走り、さらに北海へと注ぐのである。そのあと、その水がいつか雲となってここに運ばれ、雨となって地下にもぐり、再びネッカー川の水となるのだ。

流れに、手触れた。新生の水は清い。

## 自分との対話

### 関係の中で

日本からテュービンゲンに移り住むようになったのは、一九八六年のことだった。それ以来、私は家事と子供の養育をするようになった。そのようなある日、日本人の女性から、「横井さん、主夫は退屈ではありませんか」

と、訊かれたことがあった。その時、次のように答えたのを憶えている。

「この地で何かをするときは、男女の対で行動することが多い。例えば、男同士、女同士で旅行をすることはまれで、レストランなどへは、一人では入りづらく、どのテーブルも男女の対で座っている。それと同様なことが自分にもいえる。妻が外で働き、わたしが家事と子育てをしているが、それも妻が何かと手助けしてくれるから、続けられているように思う。もし彼女の協力がなければ、やり続けていられるかどうか」

ここで言いたかったのは、相手との繋がりの関係があって、自分は存在するということだった。

それから暫くして、「私は日本で専業主婦をしています。自分の人生はこれでいいのかと、ふと考える時があるのです」との封書をもたらったことがあった。

どうも主婦の中には、家庭での活動によるこびをなかなか見出せずに、もやもやしなから暮らしている人が少ないながらもいるように思えた。特に、夫が夜遅く帰宅し、夫婦や家族で話し合う時間がなかったり、家事や育児を妻だけに任せる夫だったりしたら、ましてそのような生活が毎日続いたら、その主婦は自分の生に疑問を抱きはじめるのではないだろうか。

もし私の妻が毎晩遅く帰宅し、家事や育児を手伝ってくれなかったりしたら、主夫としての自分は、今ごろ悲鳴を上げていたことだろう。

確かに、家事や育児は毎日同じ繰り返しだが、自分でやろうと思えば、いろいろ変化をつくり出すこともできる。そう単調な時間ばかりではない。料理を作って、「おいしい」との声を聞くと、うれしくなって、「よし、もう一つ工夫しよう」という気持ちにもなる。それに料理している時は、食べる人を思い浮かべて作るので、自然と気合も入り、よろこびも生じてくる。

掃除でも、窓ガラスをきれいに磨いたり、家具を丁寧に拭いたりすると、仕事から帰宅した妻が、直ぐに気がついてくれる。また、洗い立ての白いベッドシートに身を包んだミヒヤエルが、匂いをかぎながら明るい笑顔を浮かべると、自然とこちらの顔もほころんでくる。

とにかく、自分の場合、主夫の活動は家族との関係の中で続け、それを一層深めていくと心がけている。

## 主夫の自覚

私が毎日読んでいる新聞に、

「レンジの前に立つ、自覚をもった男性たち」という見出しではじまる記事が載った。そこには、次のようなことが書かれてあった。

「家で炊事や洗濯などをしている主夫は、家事だけではなく、自然保護や環境問題、それに本や音楽や政治にも関心を寄せている。彼らは家事をしない男性よりも、はるかに多方面に興味を持ち、特に、社会的問題により強い関心を示している。

ある調査によると、ドイツの成人男性のうち、約五百万人（統計的には一六・五%の男性）が家の中で家事をしているとの数字が出ている。しかし、そのすべてが専業主夫ではなく、半分以上が外で仕事をし、家でも家事をしている男性である。それに、年金生活者（二九%）や失業者（一〇%）もいるので、専業主夫は約二%前後くらいだろう。

レンジと洗濯機の前に立つ彼らは、出世や社会的昇進、それに経済的豊かさに価値を見出してなく、より多くの寛容を保ちながら、外国人及び信仰の異なる人たちとコンタクトをとろうとしている。また、困窮している人たちを援助することも重要だとしている」

これを読み終え、専業主夫をしている自分にも、そのようなことがいえるだろうかと自問した。

毎日、料理や洗濯や子育てをしていると、ゴミや食物や健康の問題、それに環境、自然問題に関心を抱くようになってきたことは確かだ。家での活動は、人間が生きていくうえで、根本的な活動だと思うようなものもなかった。

そこには、新聞記事のように、出世とか社会的昇進とか金銭的に豊かになろうとかの欲望はない。また、家事以外に一日の中で数時間の自由な時間もある。その時間を自分で判断して選択したこと、例えば、ものを書いたり、市民運動に参加したりして、社会的問題にも取り組むこともできる。

そのような中で、社会および地域と結びついた自分を発見し、新たな意識を抱きつつ、自分の生を追求しているともいえる。

この記事を読み、主夫としての役割と責任、それに加え目標をしっかりと持ちつつ、そ

れらをさらに高めていこうと意を強くした。

## パートナーシップ(1)

私が交際しているドイツ人の中には、離婚した人やパートナーシップに問題を抱えた人もいる。自分にも妻がいるし、主夫と暮らしていると、このパートナーシップについてはよく考える。

どこの社会でも、男性と女性がお互いに選択し合って、まず家族なるものが形成される。昔ならパートナーを選ぶことは、個人の自己決定であると、必ずしも言えなかったが、現在は二人の自由な愛によって結ばれてきている。

そこには現代文化の個人化に伴い、結婚も個人化され、パートナー同志の問題でも、以前とは少し違う対応策が必要になってきているだろう。特に、現代のように、愛が傷つきやすくなってきた傾向の中では、夫婦の対話がより重要な役割を果たすようになってきているとも言えるだろう。

どこの国でも、男性は沈黙する傾向があるようで、ここドイツでも日本ほどではないが、お互いじっくり話し合う時間がないままに毎日を過ごし、別れてしまうカップルが増えてきている。特に、若夫婦は話し合うことが少なくなると、もちろん中年夫婦にもいえることだが、どのように語るかわからないと聞く。

では、なぜお互いが語り合わないのだろうか。それには、夫婦に応じて様々な要因があるだろう。

自分の感情を出し、胸を開いて話すことによって、自分が傷つくのを嫌がる完全主義的な人もいるだろう。また、昔から今日まで、男(夫)は外で仕事をし、女(妻)は家事・子供の養育をするという性別による役割分担の考えが一般的にあつて、それを基準に行動している人もいるだろう。まして、男性は家庭内のことを、知的、合理的に考えようとして、自分の感情をなるべく前面に出さないようにする。その反対に家事をしている女性は、自分の感情と一緒に暮らしているところが強いともいえるだろう。

そのような二人が対話をしようとしても、できないのかもしれない。しかし、お互い語り合わないで耐え忍び、沈黙していくと、それはあとになればなるほど、大きな問題に発展していくことにもなるだろう。

こちらの新聞に、

「私たちの関係はこれでよいのか。まだ続けていけるのかと思ひながら、ベッドに入り、パートナーを批判的にみている」

という記事を読んだことがある。さらに、

「子供が育ち、自立していくと、家庭の責任を果たしたと思ひ、今度は自分の興味と仕事に力を注ぎ、今までのパートナーシップを止めてしまふ中年女性が増えてきている。一方、中年男性は仕事場で重要な地位について、それにエネルギーを注ぎ、家庭をおろそかにする傾向にもある。この時点で二人が語り合おうとしても、どのような話をしていいかわからず、手遅れになるケースも多い。そのようなにならないためにも、夫婦は語り合え。話し合うのは、仕事から疲れて帰って来た週日より週末、又は散歩してリラックスして

いる時がいいだろう」  
と、書かれてあった。

それを読み、肯きもした。手入れをしないパートナースhipは問題も生じ、それはあとあとまで残るだろう。たとえ手入れをしても、まったく同じ考えを持つ人はいないし、その二人が面と向かって暮らしているの、問題はそう容易に解決はしない。が、お互い思っていることを、勇気を持って語り合うのは大切だ。そうしないと、自分が今を本当に生きていくかとの問題にもなるからだ。

相手がいてこそ、自分を見つめることができるのだから。

## 「仕事も家庭も」の時代

日本の新聞を読むために、テュービンゲン大学の日本語学科の建物に出かけた。

ある数字を知ろうとして目を紙面に追ったのだが、その数字はどこにも載っていない。仕方なく、衆議院選挙に当選した人たちから、女性議員の割合を計算してみたら、約四・六%と出た。これはあまりに低すぎるのではないか、果たして民主主義が機能しているのかと疑ってしまった。

日本と同様に、ここドイツも男性主導の濃い国で、家事と子育ては伝統的に女性の役割だった。しかし、少しずつ変化が生じて、特に、選挙をするたびに国会での女性議員が増え続け、今は二六%までになってきた。緑の党などは男女半々である。

女性議員が多くなることよって、市民は政治を身近に感じるようになり、政治自体が豊かな緊張を持って、より人間的になってきたといえるだろう。ただ、依然として技術や研究分野、それに指導層に占める女性の数は少なく、多くは販売や事務分野で働いている。また、給料は男性と較べると、四分の三と低い。

それをなくそうと、各分野で女性の幹部層を増やし、職業教育を充実させ、研修を多くして、女性が社会の中で果たす役割を大きくしようとしている。と同時に、男性の役割変化と意識の変化を期待しているドイツである。

スウェーデンの社会では、国会議員の女性の割合は約四一%となつて、閣僚の半分は女性が占めている。そのような中で、家族政策は整えられて決まる。驚くことに、子どもの女性は八八%が外で仕事をして、その労働率は世界一である。また、出生率が年々減少していたのだが、一九八三年からは増え続け、子供が多い家庭の母親ほど、外で仕事をしながら出世・成功している。彼女たちは、経済的基盤に支えられて、家庭と仕事の両方をこなしているのである。

また、スウェーデン男性の四分の一以上が、出産・育児休暇（十五か月）を取る。父親の果たす家庭での教育的役割は、大きいものがあるに違いない。それに因るのだろうか、男性は情緒的感情が豊かで、より人間的な関係能力を持っていると言われている。

それに、私生活（家庭）の中で、自分の真の姿を見出すことが、社会での出世・成功と同様な価値とみているようで、これは今までにない男性の生活価値観の変化ともいえるだろう。他の北欧諸国も、似たような状況と聞く。

では、四・六%と女性議員の割合が低い日本では、男女平等への道はどのようになって

いるのだろうか。特に、女性の雇用政策と家族政策は整えられているのだろうか。また、家庭での女性がおかれてる立場はどうなっているのだろうか。

日本を離れて十数年が経っているのです、その状況は私にはよくわからないが、女性の社会進出にもなっていて、仕事と家庭での女性意識変革は推し進められていると想像する。それに比例して、男性の意識変革がどの程度進んでいるのだろうか。

この地で主夫として暮らしているせいかな、家庭での生活を豊かにするのは、女性だけでなく、男性の課題でもあると思う。なぜなら、「仕事も、家庭も」の言葉を、男性が口にする時代となっているからだ。

## パートナーシップ(2)

日本に住んでいた頃、妻は私のことを「おとうさん」と呼んでいた。多分、その言葉を周りの母親たちから耳にしていたからだろう。しかし、ドイツに移り住んでからは、「おとうさん」とは言わず、私の名前「ひでじ」で呼ぶようになった。ここに、日本とドイツの家族関係のあり方の違いを私は見るのだ。

日本では、どうも夫婦関係よりも親子関係に、反対にドイツでは、親子関係よりも夫婦関係に力を注いでいるように思える。日本の家族の場合、夫婦のパートナーシップのあり方よりも、親としての役割により力を注いでいるといえるだろう。特に、女性にその傾向が強いように映る。それだけ、男性側にパートナーとしての自覚が薄いからではないだろうか。

私の実母のことを振り返ると、「四人の子供を育てるのが生きが이었다」としばしば聞いたことがあった。もちろん、子供たちが自立したあととも父と二人で暮らしていたが、その期間は短いものだった。

寿命が今よりも短かった時代は、子供の自立後の夫婦の生活は短かっただろう。しかし今は、子供が少ない少子化時代。それに子供がいらない夫婦も以前より多く、何よりも人生が長くなって、子供が自立したあととも夫婦は長く一緒に暮らすことにもなってきた。と同時に、パートナーシップに変化が生じてきたと思うのだ。そのパートナー関係を意識して、暮らしていくことが、今、問われているのではないだろうか。特に、日本ではその傾向が強いように思う。

それというのも、数か月前、日本に数週間滞在していた時、数名の人たちとパートナー関係について話をしたことがあった。その中で、中年の夫婦・家族のあり方に話が集中し、そのことがまさに問われているように思えたからだ。

例えば、セックスレスの人が増え、中年の離婚がひんぱんに生じ、夫婦同士の会話もない精神的離婚者が生じているなど。また、パートナーとのセックスによるこびが見出せず、パートナー関係がうまくいかず、子供に過剰な力を注ぎ込む母親など。どうも私には、パートナーシップとそれと関連する性をしっかり考え、捉えていないように思えたのだ。

もちろん、ドイツでもその傾向はあるが、この地でよいと思うのは、性(セックス)が日本と比べて、タブーテーマとなっていないことだ。テレビ番組などでも、皆真剣に自分の

問題として討論しているのである。それも性と生きる生とを結びつけながらの話し合いが多い。

パートナーを持つ私も、この性については時々考えさせられる。それというのも、性がパートナーシップと関わっているところもあるからだ。自分の、また、相手の性を考えることは、特に中高年のパートナーシップに程度の差はあれ、影響を及ぼすと思うのだ。

私自身、四〇を過ぎた頃から、パートナーとして自分、それに相手のパートナーについて多く考えるようになった。この地で主夫として暮らしている私なので、パートナーシップについては、より考えるようになったことも確かだ。また、「おとうさん」よりも「ひでじ」と妻が呼ぶように、家族関係の中でも、パートナーとしての役割が重要な位置を占めているドイツなので、真剣に考えざるを得なかった。

そのような中で、自分の、相手の性を知るように心がけ、お互いがそれについても語り合うようになった。ここで言う性とは、勿論、セックスも入るが、そのセックスとは下半身だけのものではなく、手を握ったり、見つめあったりの性的触れ合いを通じての情緒的な絆のことも含めた性のことである。まして、年を取ってくると、悲しみや寂しさも増し、そのような中で情緒的絆を伴ってのセックスでなければ、お互いに真によるこびあえなくなってきた。

なぜなら、セックスには相手がいることだし、相手がどう思い、感じているかを推し量るし、相手とよろこびを共に分かち合わなければ、それは一方通行の暴力にも匹敵することにもなりかねない。セックスは性器と性器との関係だけではなく、相手と自分との関係でもあるからだ。

そのことを、年とともに少しずつ学んできているように思う。それは今も続いている。

こちらの通りで、カップルが手を握り合いながら歩いている姿をよく目にする。それも若い人たちだけではなく、高齢者も多い。彼らは共によるこび、悲しみ、苦しみを経験して、一つ一つの難関を乗り越えてきた人たちだ。その姿に、男と女、人と人との絆を感じ取ったりする。

それはあるがままの今のあなたを、お互いが受け入れ合っている姿だ。

## 足るを知る

日本に住んでいた頃、私は知的ハンデのある人たちが住む施設に勤めていたこともあって、彼らを連れてしばしば街へ外出していた。また、今はダウン症である息子のミヒヤエルとよく外に出かける。そうすると、通りで多くの人たちとすれ違う。ハンデのない人たちは、そこで彼らの存在を知る。

ミヒヤエルが歩いていると、子供たちがよく彼を見つめる。独特の顔つきをしているからだろう。しかし、彼はそれにおかまひなく歩いて行く。そればかりではなく、時々ストリート・ミュージシャンが奏でるメロディーに合わせて、気持ちよさそうに身体を動かして踊り出す場合もある。

そうすると、周りの人たち、それにミュージシャンも感情を素直に出しているミヒヤエルを見て微笑んだ表情を浮かべる。彼が、人に安らぎを与えたともいえるだろう。しかし、

反対に、その情景を嫌う人もいるかもしれない。そのような人はハンデイのある人を身近に見慣れてないので、彼らの存在に気づいていないのだ。

私などは、彼らの存在に気づけばきづくほど、関わり合えばあうほど、社会の中で自分がどのように生きるべきかを学んだりする。特に、彼らのある人の生きる力強さに、畏敬の念を抱く場合がしばしばある。

それはハンデイのある中で、自分にでき得る限りの可能性を積極的に追求し、よろこびと幸せを見つけ、そこに生きる意味を見出している姿だ。

ある知人が、

「障がいがあるが、自分の生きる源泉だ」

と、語ったことがあった。

その姿から、成績や能力や競争などの目に見える価値に重きを置く現代社会で、目に見えない、その人固有の生きる意味を、自分のこととして考えさせられたのである。

特に、現代は自己の欲望、欲求を果てしなく無限に追い求める結果、他者との交わりの中で、自分を制するコントロール力が弱くなってきたともいえるだろう。そのような時、彼らとの出会いは大きな意味がある。

先日チュービンゲン駅で、次のような光景を目撃した。

車椅子に乗った両足のない人が、電車から降りようとしていた。それを目にして、自分に言い聞かせた。彼は足のハンデイと共存して、ありのままの姿で己をコントロールしながら生きているのだ。彼からすると、私たちこそ、ハンデイを持っていると映っているのではないだろうか。なぜなら、自分の欲望や自己中心的な己を強く持つ私たちは、それに振り回されているからだ。

今の生活の中で、「足るを知る」ことがより重要なを知るのだった。

## 自分自身を発見する行為

日本に住む知人から、かなり深刻な手紙を受けとった。そこには、現在日本で多発しているいじめや登校拒否のことが、それもその人の子供がまさにいじめの対象となっていることが詳しく書かれてあった。子供は勿論、親も大変な状況におかれているのを知った。

この方に直ぐに手紙を書き出したのだが、何をどう綴ってよいのかわからず、ただ絵葉書を出しただけに終わってしまった。胸が痛んだ。

それと同様のことを、先日ある集会で経験した。ドイツ人と日本人半々の計五十名ほどの人が、「ドイツと日本の学校教育、よい市民とは？」というテーマでの話し合いがあった。その中で、日本の学校に勤めていた元教師が自分の実践体験を語った。

それを聴き、日本の受験競争の学校教育がいかに歪んでいるかを再認識し、胸が締めつけられてしまった。その話の内容がどのようなものだったかは、日本の学校教育の状況を知っている人は想像できるだろう。

そのあと、参加者同士で、ドイツと日本の学校教育の違いについての討論がされていた。特に、ドイツでは個に重点がおかれ、日本では集団が重視され、それは教育にも当てはまるといったことなどの話が出た。それを聴きながら、絶えず考え続けたことがあった。



それは、「教育、もつと広く言う」と教養とは何か」と、いうことだった。

このことを深く捉えることが大切で、日本とドイツの文化、社会、歴史の異なる中で、両国の学校教育を比較し、教育の方法論を考えたところで、それは根本の教育・教養を考えたことにならないと思っただけだった。まして、それがよい市民をつくり出していくとは思えなかった。

教育つまり教養とは何かを思考し続けると、

「自分自身を発見する行為だ」

との答えを、私は見出すのだ。

よく汝自身を知れ、ということが言われている。それは毎日の生活の中で、どのように生きていくかとの問題と、深く関わっているからだろう。しかし、この汝自身を知るほど難しいことはない。自分で、自分自身を知ることとはほとんど不可能に近い。でも、相手がいれば、自分を知ることが可能だ。なぜなら、自分の思い通りにいかないことで、悩み、自分のエゴを知るからだ。

主夫をしながら、そのことを頭において、周囲の人と共に暮らし、その中でよろこびと悲しみを味わおうとしている。よい市民とは、もしかしたら、そのことに気づいた人たちのことを言うのかもしれない。

## 早朝の素晴らしさ

学校が休みの日は、息子のミヒヤエルは買物かごを持って七時過ぎに、百五十メートル先のパン屋へ行く。

朝一番に訪れる客は彼のように、パン屋の娘さんとも馴染みになって、その娘さんから時々パン一つおまけに貰う時がある。

十分して家に戻り、いきよよく「買って来たよ」と晴れやかな顔で言う。それも、誇らしそうに。その時の彼の顔は、何か新鮮で清々しく、自分への確かさを感じているようにも、私には見えます。とにかく、彼は早朝のパン買いに喜びを感じ取っているように見える。

それと同じようなことが私にもいえた。

学校へ通う日は、パン屋へ行く時間がない彼なので、私が行くことになる。真冬の朝七時はまだ暗いが、三月に入るといくらか明るくなってくる。その頃のパン買いは、私は好きだ。

パン屋までの往復の十分間、小鳥の囀りを聞き、ひんやりとした大気に触れていると、何か新鮮で、清しい気持ちになるのである。それと同様なことが私にはある。

例えば、私の学生時代、夏山へ行き、暗い三時に起き出し、太陽が昇り出す五時頃に歩きはじめるときに感じた時。また、少年の時分に新聞配達をして、薄暗い早朝に走りながら新聞を配り、配り終えた時に感じた時。そのどちらも、朝の爽やかさを感じたものだった。

その二つにいえることは、過ぎ去る夜の暗さから、新しく生じる朝の明るさの中で、自分の身体が大自然の波長に合わされ、活動をはじめ、身体が自然とよるこんでいるからだろう。とにかく、一日の終わりの夜が過ぎ去り、新しい一日のはじまる朝は何か新鮮で清々

しきがある。ミヒヤエルもパン買いの行為で同じようなことを味わっているに違いない。しかし、朝早くにもかかわらず家の中で活動していると、そのような気持ちになることはほとんどない。どうも家の中にいると、意識しながら活動しているせいかな、大自然の波長に自分が合っていないようにも思う。でも、家においても早朝のこの清々しい気持ちと幾分似たような気持ちになることがある。それは次のようなときだ。

本を読んでいて、素晴らしい文句に出会い、「そうだ、これだ！」と思つた時に生じるよろこびだ。それも頑の中ではなく、身体でわかつたように感じた場合は特別だ。まして、いつの日か何らかの機会で、パツとその文句が浮かんだ時の爽快さは、さらに大きいものがある。

読書をしていかねばとつくづく思う。

## 学ぶ集会

主夫をしている私は、外で仕事をしている人よりも社会的コンタクトが少なくなりがちだ。それを避けるために、地域の中に存在する様々な活動に参加するようになった。

その一つに、「哲学的対話時間」という集会がある。哲学的といつても、抽象的なことを勉強するのではなく、私たちの日常生活の中で生じてくる出来事、例えば、苦しみ、不安、ストレス、暴力、教育、解放、悲しみなどを、どのように受けとめ、どのように対処したら、より充実した暮らしとなっていくのかを話し合うのである。

月に数回行われ、参加者は主婦や学生や年金生活者など二十〜七十代の世代の異なる人たち八、九名が集まる。

三年前からはじまったこの集会は、日本人の哲学者であるOさんが催したものだ。毎回テーマを替え、二時間近く一つのテーブルを囲んで、各自の体験をもとにして、思っていることを自由に語り合うのである。

参加者は、ほとんどがドイツ人、それも地元の人が多いので方言がよく飛び交って聴きづらい場合もあるが、顔と顔を合わせての対話形式なのでとてもわかり易い。

この集会で、ある時、道元が著した「正法眼蔵」の一部を読もうとの声が出た。勿論、一回の話し合いで済むはずはなく、続けて話し合うことになった。

回を重ねるごとに、これはもう私たちの限界を越えているとの声も出はじめて、尻切れにトンボに終わってしまった。ただ、私自身、学生の頃、鶴見の総持寺へ泊まりがけで行ったことがあったし、時間を見つけては座禅をした体験があったので、この話し合いの中で新たな自分を見つめ、勉強にもなった。それは、次のようなことだった。

山歩きが好きな私だったので、自然の中をよく歩く。と、自分がその自然に包み込まれ、添えられている瞬間をあげることがある。そうすると、生かされていることへのよろこびに震え、「ありがたい」との言葉が口から漏れるのだった。

それはまさに道元の名言である、「仏道をならうというは、自己をならうなり。自己をならうというは、自己を忘るるなり。自己を忘るるといふは、宇宙と一つになることなり」を思い起こすのだった。

では、日常生活の中で、それをどのように体得したらいいのだろうか。そうすると、こ

の哲学的対話時間で話し合っている人たちと街の通りでバッタリ逢い、立ち話をして、お互いの様子などを聞き知り、彼らを家に招いたり、彼らの家に呼ばれたりしての交流にこそ、共にという心になって生かされていることを知るのだった。

今日もマルクト広場で、通りで知り合いの人たちと逢えば、握手をして立ち話をする。人との交流はいいものだ。自分を見つめる大きなチャンスがあるのだから。

この集会の他に、テュービンゲン大学の日本館で催されている、月に一回ほどの読書会にも出席している。一冊の本を読み、それを十名前後の参加者と日本語でディスカッションをするのである。他の人の言うことを聴くことは、学ぶことでもあり、自分と対話することでもあるのだ。

## あるがままの彼ら

ミヒヤエルと妻を車に乗せ、目的地のフィルダーシュタットへ走った。

三十分ほどで着き、独特の形をした建物内に入ると、受付で五十歳ぐらいの人が私たち五名を待っていてくれた。

その人から、この建物についての簡単な説明を聴いたのち、二百五十名ほどの知的ハンデイのある人たちが働いている授産施設を見学することになった。

十四種類のどの作業室もあたたかい雰囲気が漂う中で、彼らは働いていた。その見学も一時間ほどで終わり、三百席近くはあるだろう椅子に私たちは座り、これからはじまろうとするイベントを待つことになった。ここに来た目的は、それを見るためであった。

ホールの壁には、人智学の創設者であるルドルフ・シュタイナーの顔写真がかかっている。ここは、アンソロポゾフィーの思想で運営されている作業所なのである。

今日の仕事を終らせた約二百五十名の人たちと一緒に、私たちは舞台上に視線を向けていた。と、幕が上がったと同時に、勢いのあるメロディーが流れ出した。

それが一分も続いていると、椅子から立ち上がって体を前後に横に動かしたり、飛び上がったたり、手を強くたたいたり、音に合わせて自分の体を動かす人たちが出てくる。

二曲、三曲とテンポの速いポピュラーソングが流れ続けた。大半の人が椅子に座ってはいない。個性のあるアクションで自分を表現し出した。

舞台では、ドラムやキーボード、アコーディオン、エレキギター、バグパイプなどの楽器をもった十三名の人たちが力強い音を出して演奏をしている。

マイクからは張りのある歌声も聞こえてくる。彼ら十三名のうち、十名は知的ハンデイのある人たちである。その中には、ダウン症の青年も三人いる。彼らに混じって、ジーパンをはいた牧師と高等学校の校長、それにTシャツ姿の養護学校の先生もいる。

演奏をしている人も、聞いている人も本当に楽しそう。これほどまでも、ありのままの自分を出している人たちはいないだろう。常に、ホンネのままで生きている彼らの姿だ。

以前、知的ハンデイのある人たちが住む施設で働いていた私だったので、この雰囲気とこの人たちと一緒にいると、過去の経験が一気に蘇ってきて、目が自然と潤んでくるのだった。

「ここには真の触れ合いがある。真の触れ合いがある」

心の中でそう呟きながら、ビートの利いた音に合わせて、私も手をたたき出した。

観客の多くは立ち上がっている。リズムに合わせて手足を動かしたり、ダンスをしたりするカップルも出てくる。すばらしい情景だ。私自身ディスコで踊ったことはないが、ここにいる人たちは今それをして、体でよろこびを表現しているのである。

ここはドイツ国、ポップスの曲の合間に、モーツアルトそれにベートーベンの第九も歌われ、それに合わせての体の動きである。一時間の予定が、「アンコール、アンコール」の声に押されて、何曲も演奏されていた。

ここにいる人たち一人ひとりを知っていたら、さぞ楽しさも増しただろう。私たちを案内してくれた人が、手をたたきながら横に座っている。この人が羨ましい。

忘却していた過去の時間、胸は熱くなってくる。時は昔に戻らないが、以前経験したことが新たな感動をもたらしてくれるのである。これが自分の原点だと思った。

ミヒヤエルも立って体を動かしている。最高の時間をもらったと思しながら、私も立ち上がって手を打ち続けた。

## 自分の存在

家で昼食を摂ったあと、妻と一緒にテュービンゲンから電車とバスに四回ほど乗り換え、三時間ほどでやっと目的の地である黒い森地方のケーニツヒフェルに到着。

人口千数名のこの村は、針葉樹である樅の木に囲まれた、とても静かな地である。ここに、あの二十世紀のヒューマニストと呼ばれたアルベルト・シュバイツァーが、奥さんと一人娘であるレーナと住んでいたのだった。住んでいたと言っても、彼はアフリカで医療活動をして、ヨーロッパに戻ると講演などをしていたので、常時ここで暮らしてはいなかった。その家は、今は国内外の人たちが見学に来るシュバイツァー館となっていた。

シュバイツァーは一八七五年に生まれた。二十歳から神学と哲学をドイツとフランスで学びはじめ、両方の博士号を取得したあと、次は三十歳の時に医学を学び、三十八歳の時に医学博士となった。その翌年、看護婦の奥さんのヘレナとアフリカ直下にある国ガボンのランドレネに行き、医療活動をするようになったのだ。

当時の彼の活動は、私たちが訪れたシュバイツァー館に展示されていて、妻と一緒にそれらを読んだり、写真を見たりしていた。と、彼の一つのことを遣り通していく行動に、私の心は深く打たれ、感動が体全体に走った。

自分の前に置かれた選択肢の中で、自分の意志で決断して、それがどんなに苦しくても、自分の生き方に確信を持ちながら、生き抜いた人なのだと思います。

彼が残した言葉の中で、

「あなたの運動がどうなるかはわからないが、一つだけわかっていることがある。あなた方のなかで幸せになれるのは、どうしたら人類に奉仕できるかを模索し、ついにそれを発見した人々だけである」

とあった。献身的な医療活動をした人から出た言葉だ。

また、神学・哲学の博士でもある彼は、『生命の畏敬』に強く関心を寄せていた。

それは彼の言った、  
「私たちは生きようとする生命に囲まれた、生きようとする生命である」からも窺えることができるのである。それが意味することは、人は結合をなすことよって生きていられるのだ。人は社会的存在なのだ。

館内を歩いていると、オルガニストでもあった彼が弾いたバッハの曲が流れ、それを耳にしていると、彼の言葉である「人生の惨めさから抜け出す唯一の方法は、音楽と動物だ」が浮かんでくるのだった。

奥さんは軽い結核に罹り、常時彼と一緒に活動はできなかったが、夫を支え、この家に住んでいたのである。

彼は晩年に書いている。

「私がケーニツヒフェルトにいた時分のことを思い出すと、私の人生のなかで一番美しいときだった。そこでは、静かに仕事ができ、オルガンが家のなかにあつて、近くの森へ散歩に出かけ、多くの友人たちがいた。よろこびに満ちた日々だった」と。

奥さんは五十七歳で亡くなり、その後、彼は一九五二年にノーベル平和賞を受賞し、平和運動、原爆反対をヨーロッパ・アメリカなどでも訴え続け、反戦を唱え、最期はアフリカのランベルで九十歳の生涯を閉じたのだった。

ランベルの病院は、彼の死後もさらに大きくなって現在に至っている。彼の思いは継がれているのだ。

この館を出てからも、私は彼の生は無限の意味を持っていると思いつつテュービンゲンに戻った。

## 家族と一緒に

### ありがとう、ヒビエ

ミヒヤエルと義母がいつものように、居間で絵合わせのゲームをして遊んでいた。それに私が参加しようとする、彼が「邪魔しないで」と手を横に振った。大好きなおばあさんと二人だけで、ゲームをしたいのだ。

ミヒヤエルがテュービンゲンに移り住むようになったのは、八歳の時だった。それ以来、彼はおばあさんと一緒に暮らし、おばあさんのいない生活は考えられなくなっていた。と同様に、それは私にも言えた。

日本での暮らしから、テュービンゲンに移り住もうと決めたのは、七十五歳の義母が一人でここテュービンゲンに住んでいたことも一つの理由だった。

彼女と住みはじめた頃、三世代同居の生活の難しさに、果たしてやっていけるだろうかとの考えにしばしば襲われた。しかし、時が経つにつれて、私に寄せる義母の配慮、それに彼女の生き方を見ているうちに、この人と一緒に暮らせることに感謝の念さえ持つよう

にもなった。

義母は皆から「リンゴのおばさん」と呼ばれ、笑うと、薄赤い頬がいつそう紅くなる。それを目にするると、周りにいる人も穏やかな気持ちになってくるのである。今まで義母の怒った顔を、見たことがない。また、人と会う時はいつもニコニコして、彼女との会話の中で、ありがとうの語を聞かない日はない。義母から「ありがとう」と言われると、こちらもありがとうの気持ちになるから不思議だ。

例えば、主夫の私が昼食と夕食を作っているのだが、お皿に盛ったものは必ずきれいに食べてくれる。今まで慣れ親しんできたドイツ料理の味ではなく、醤油味となるが、すべてを食べてくれるのである。

また、夕食後は私たちと一緒にテレビを観たり、ゲームをしたりして過ごす。それが終わり、階下の自分の部屋へ戻る際には、必ず、

「ありがとう、ヒデジ」

と、言うのである。その時など、こちらこそお義母さんと食事をして、夕方の団欒と一緒に過ごさせてくれて、ありがとうという気持ちになるのである。

義母の父、それに夫も牧師だった。その職は忙しく、家には常にお手伝いさんがいて、食事などはその人が作り、義母は料理をしなかったようだ。そのようなことで、私は義母の料理をあまり口にしたことがない。しかし、彼女は自分の衣類は自分の手で洗い、私たちの洗濯物を中庭に干してくれる。そればかりでなく、ワイシャツやズボンなども、アイロンをかけてくれるのである。そのきれいに仕上がった服を着ると、感謝を覚えるのだった。

八十三歳の義母の身体は少しずつ弱くなって、外出する際は杖を必要とするようになってきたが、頭と精神の活動は今も活発で、本をよく読むし、時事問題にも関心を向けている。それに人との会話の中で、機知に富んだ話をよく口にするので、周りにいる人は次に彼女が何を語るのかと耳を傾けるのである。また、親戚や知人などが集まると、昔のことをよく憶えているので詳しく話してくれる。その内容に、しばしば感心させられることが多い。

手紙はよく書くし、電話での交流も多い。私たちの電話代の二、三倍は払っているだろう。それに、地域の婦人会にもよく出かけている。その義母と暮らすだけでも、ありがたうと思う日々である。

## 義母とゲームで遊ぶ

シャワーを浴び、ひげを剃り、アイロンのかかった白いワイシャツを身につけたミヒヤエル。これから仲間と一緒にディスコへ出かけるところである。帰ってくるのは、夜中の十二時過ぎだろう。

彼が再びディスコに行ったので、この時間を有効に使おうとして、私と妻は何をしようかと話し合った。

土曜日の夜なので、市内ではコンサートや演劇などが催されていたが、映画を観ることになった。ヘルマン・ヘッセ作の『シッダールタ（釈迦の幼名）』が上映されていたからだった。

私たちが館内に入ると、先客が二名いるだけだった。妻がそのうちの一人に、「こんばんは」と声をかけ、「こんなに人が少ないと、ゆっくり挨拶を交わせるからいいわね」と言いながら椅子に腰かけた。

十名ほどの人がインドを舞台にしたフィルムを観ていた。二時間があつという間に過ぎていった。

映画館を出てから家へ帰る途中、私は妻に語り出した。

「このフィルムがどれほど正確にシッタールタを画いたかわからないが、キリスト教に基づく文化と歴史の中で育ったヘッセが、仏教をこれほどまでに深く掘り下げたことに、驚きと畏敬の念を抱いたよ。特に、最後のシーンで、年老いた主人公のシッタールタが、同じように、年老いて正しい道（真理）を求め歩き続けている友人に再び会い、『正しい道を、常に外に捜し求めるのでなく、自分の内にすでに棲んでいる中から、それを見出すことが大切だ』との言葉が耳に残ったね」

彼女は、仏教という見知らぬ内容を含んだ作品でもあったせいか、黙って聴いていた。「共存しながら、生きている私たちだ。そのなかで自分の内面を見つめ、自己を探求することは大切なことだ。そんなことを考えさせてくれた映画だったよ」

そう言いながら、私たちは肩を並べながら歩き続けた。

家に着くと、今度は義母を含めて三人でルミーというゲームをすることになった。マージャンによく似たこの遊び、頭を使うこともあって、義母の脳の活動にはよく、私たちが好んで遊ぶゲームだった。だんだんと熱が入ってくる私たち三人。と、先ほど観た映画の最後の会話シーンが、ふと浮かんでくる。「共に」の中での調和だと思った。

一時間が過ぎると、義母が欠伸をし出したので、「もう、休んだ方がいいですよ」と言う、休んだ方がいいですよ

と言うと、彼女は背いて自分の部屋に戻った。

ミヒヤエルが家に戻ってきたのは、十二時過ぎ。まだ興奮覚めやらぬ顔で体を動かしていた彼だったが、二十分ほどしてから、満足したような顔つきで、ベッドに潜り込んだ。私もよい時間を過ごせたことに感謝して、妻と共に床に就いた。

## 親族の集い

妻が少し変わった催し物を思い立ったのは、半年前のことだった。それ以後、彼女は会場を探したり、招待状を書いたりして、熱心にその日に向けて準備をしていた。それも自分で楽しみながら、「ケーキはだれが持つてくるの？ 夕食はどうしましょう？ だれがスピーチをするの？ 音楽演奏は？」と親戚の人たちと電話で話をしていった。

いよいよその日になった。会場はチュービンゲンの教会集会所内の小さなホール。義母の両親が結婚して今年で百年目にあたるので、それを祝おうとするものだった。

妻がこのプランをたてた時、核家族になつている現代で、特に、三世代同居をほとんど見かけないドイツで、この集いに来る人はそう多くはないだろうと思った。が、集まった人は何と約六〇名にも及んだ。義母の四人の兄弟たちは他界していたが、その子供たちと孫たちが寄り集まったのである。半分以上は、私がまだ会ったことのない親戚の人たちだ

った。

ドイツでは、誕生日などを祝う会は家庭で頻繁に行われているが、このように広範囲の親族が、葬式でもないのに出席するとは思っても寄らぬことだった。驚いたことに、六十名のうち二十歳前後の青年が九名も来たことである。彼らはこのような集まりに興味を持たないだろう、と想像したのだったが、違っていた。ホールの飾り付けや、後片付けをお互いに協力してきばぎと行い、ドイツ青年の意外な面を知った思いとなった。

午後二時から始まり、ケーキを食べながら、一人ひとりがスピーチをのべていった。六十名のドイツ人が集まれば、楽器を鳴らす人は数名はいるもの。その人たちがバイオリンとオーボエとホルンで合奏し、皆で歌を唄い、簡単なゲーム遊びなどが催されていた。

そのような中で、今までそう話し合うこともなかった従兄弟同志とか、叔父、叔母、甥、姪などがお互いに知り合う機会となっていた。もちろん、親族の中で最年長の義母は、今は亡き両親ときようだいのことを語った。マイクロホンのない小さなホールなので、声をいくらか高くして、頬を紅潮させて話す義母。その話に、親族の人たちは耳を傾けていた。

その情景を目にしながら、思った。彼女が今ここにいるのも、過去の数知れぬ親族との交流のうえに成り立ち、今のこの行為が未来を創り上げていくのだろうと。

最後に、義母が、

「このような会が開かれ、皆がお互いに話し合われたことは、ありがたいことです」と言うと、皆から拍手が湧き起こった。

解散の時刻となった。多くの人が妻と握手しながら、「ありがとう」と声を出していたのが、私には爽やかに聴こえた。というのも、このような集いをしながら、親族関係の絆を保ち、深めるのだらうと思ったからである。

妻と私は、体が弱ってきた義母を両脇から支えるようにして外に出た。と、辺り一面が初夏の夕陽に照らされて、眩しいくらいに茜色に染まっていた。義母を支えていた私の手に力が入った。

## 母と娘のうた

テュービンゲンから車で三〇分走ったところに、ハイガーロッホという街がある。人口わずか千九百名だが、宿泊するホテルはいくつもあって、国内外から年に少なくとも二万人が訪れて来る。

六月上旬のよく晴れ上がった午後、私たち家族四人は車でそこへ向かった。

青く澄み切った広々とした空には、白い雲がポカリポカリと浮き、淡緑の麦畑とむせるような黄の菜の花が縞模様を呈しながら続いている。この地方一帯の田園風景である。

街に着くと、教会の鐘の音がちょうど三時を告げた。妻がまずコーヒーを飲んでから歩こうと提案したので、小高いところに建っている喫茶店に行くことになった。

バルコニーの椅子に座ると、目の前に素晴らしい景色が目に見え込んでくる。眼下には小川が流れ、それに沿って古い木組の家々が建ち並び、六百年前に造られたお城と大きな



教会が望め、まるで絵本に出てくるような街並みである。しかし、多くの人がここを訪れるのは、その美観のためではなく、教会の下にある洞穴が目的なのだった。

そこは、かつてはビールの地下蔵だったが、一九四四年にベルリンの空襲を恐れたドイツの物理学者たちがその洞窟に集まり、戦争が終結するまで、そこで原子爆弾の研究をしたところでもあった。それが今は原子地下室の博物館となっていたからだだった。

コーヒーを飲み終えると、妻が母に言った。

「ユダヤ人のお墓へ行って見ない？」

義母は肯いた。それを見た私は、妻に、

「ここにユダヤ人が、住んでいたのだろうか」

と訊くと、彼女は、

「もちろんよ。この街には、多くのユダヤ人が暮らしていたわ」

と声を出してから、この地方の歴史を話し出した。

一時間ほどしてから、私たちは店を出て、曲がりくねった坂道を三〇〇メートル下って行った。と、道路の脇に一つの記念碑が目に入った。そこには、

「この街には、約四〇〇年以上も前から大勢のユダヤ人が住んでいた。多い時は三〇〇名が暮らし、ナチ時代にも二〇〇名近くが生活をして、ここから一九二名のユダヤ人が強制収容所へ連行され、生き残った人はわずか一名だけだった」

と、記されてあった。それを読み、このような美しい街にも、ナチの傷跡が残っているのだと思うと、ため息が出た。さらに歩いて行くと、古い石壁で囲まれた墓地が目に入ってくる。

ユダヤ人墓地というのは、一種独特のものがある。以前プラハのユダヤ人墓地を訪れた際もそうだったが、ここに足を踏み入れると、厳粛な気持ちにさせられてしまうのである。どの墓石も、質素な石板一枚の上にヘブライ語とドイツ語が刻まれ、すべてが東を向いて整然と規則正しく並べられ、花は飾ってなく、ドイツの墓地のように、散歩するような雰囲気ではない。死者の威厳を感じるのである。祖先を大事にしている民族なのを知った。

私たちは大きな石板の前に立った。ナチ時代に強制収容所へ連行された人たちが眠っているところである。その墓石の上には、いくつもの小石が並べられてあった。ここに訪れたユダヤ人たちが置いていったのだろう。妻と義母は、数分間その墓石前でこうべを垂れていた。ナチ政府時代にドイツ人がした行為を、自分の心の中で見つめているかのように私には映った。

私たちは、再び車でテュービンゲンへ走った。

家に戻り、夕食の準備をしていた時のことである。妻がジャガイモを剥きながら、キリスト教信仰に関する詩を突然歌い出した。と、義母もにんじんを切りながら、娘と声を合わせはじめた。今まで聞いたことのない句であった。

高齢の義母は、昨今の短期記憶は極端に忘れるようになってしまったが、昔憶えた文句は口からすらすらと出てくる。二人がリズムをとりながら、いつもより声を高くして、祈りの詩を歌っているのである。三々四分は続いただろうか。それを終えると、二人とも、顔を見合わせた。母と子の重なった顔である。

それを目にして、思った。信仰の篤い二人は、キリスト教の歴史を背景として生きていくのだと。

## 義母との昼食

杖をついて歩くようになってしまった義母と二人だけで昼食を摂るようになってから、もう数年が経つ。妻は職場へ、ミヒヤエルは学校へ。そうなると、私が昼食を作るようになった。

世代の異なる、育った文化と食生活が違う二人が顔を合わせて食事をするのに、最初の頃は戸惑いがあった。それに献立を考え、何を話題にするかに頭を痛めたものだった。しかし、ありがたいことに、義母は私の作ったものは何でも口に入れてくれた。今まで、お皿に盛ったものを残したことはない。

二人の会話でも、方言的なドイツ語で話す義母の内容もわかってきて、最初の頃のぎこちないやり取りではなくなった。また、話す内容も、自然と私の口から出てくるようになっていた。しかし、このところ気になることがあった。

それは八十六歳になる義母の食べる量は変わらないのだが、以前のように自分から話し出すことがなくなつて、静かに黙々と食べるようになってしまったからである。こちらから話しかけないと、会話は始まらなくなつてしまった。話しかけるといっても、短期的な記憶は忘れかけている義母なので、昔の出来事を聞き出すことになる。遠い記憶はよく覚えていたので、少し間をおいてから話をしてくれる。

確かに、会話は途絶えがちになつてきたが、それでいて窮屈さはまったく感じない、静かな昼食の時間でもあった。開け放した窓からは、外で鳴く小鳥の声や、家の前の通りを歩いている人の声も聞こえてくるのだった。

そのような中で、義母と一緒に過ごす時間が特に多い私なので、心がけていることがあった。それは体が衰えてきたとはいえ、精神の働きまでも弱つてこないようにしなければならぬということだった。しかし、そうは心がけても、ソファーに横たわる時間が多くなつてきた義母を前にして、何をしたらよいのかと考え込んでしまい、何もできずにいる。せめて、昼食の時間に、義母から昔の記憶を引き出すことくらいとなつてしまった。

そのようなになった義母だが、彼女の素晴らしいところは、自分で心がけて朝食用の自分のパンを、以前のように毎日ではないが、三日に一回の割りで、杖をつきながらゆっくりとパン屋まで買いに行くことである。また、私たちよりも前に新聞を読み、その内容を娘に語つたりもする。

本を読む時間は減つたが、単語によるクロス・パズルなどは辞書を引いたりして、自分でも意識しながら脳の訓練をしている。また、夕食後は、私たちと一緒にゲームをする。それに、週一回の聖書を読む会には必ず出席している。ただ、手紙を書いたり、受け取ったりする回数が極端に減つてしまった。が、義母はそれでよしとしているようでもあった。

義母の毎日の姿を目にしていると、人は年を取っても自分から積極的に生き、学び続けることが大切で、そのことによって精神及び記憶力の働きを保ち、脳の働きを活動せしめていると知るのだった。

義母は私との静かな昼食を終えると、いつもにこやかな顔と優しい声で、

「おいしかったわ。ありがとう、ヒデジ」

と、言う。その言葉を聴くたびに、私はよろこび、感謝するのだった。

## 日曜日はタンデムで

「さあ、ミヒヤエル、走るぞ！」

「ヤアー、パパ」

それを聞き、彼と一緒に漕ぎ出した。

通りで知り合いの人が、「ハロー」と手を上げる。それに応えてベルを鳴らす。子供たちの、「あつ、タンデムだ！」との声を耳にする。

二人乗り用のタンデム自転車を妻の知人から安い値で買ったのは、夏がはじまる前だった。それ以来、週末は街郊外やネッカー川に沿って設けられてある自転車道を走るようになった。

平坦な道の両側には、は麦畑が延々と続き、所々に咲いている身丈二メートルほどの大きなヒマワリの花たちが、笑っているかのように私たちを歓迎してくれる。それらを眺めながらの走行である。

大人と子供用に作られたタンデムなので、脚力が異なる二人にはピッタリだ。「もつと、漕げ！」と促すと、「ヤアー」と声を上げて力強くペダルを踏むミヒヤエル。

走りながらの会話もでき、何よりも周囲に映る景色を二人で共有できるのである。それに、後ろで漕いでいる彼の息づかいが伝わってきて、まさに共にといった感じとなる。

二人で乗りはじめた頃、家から十キロメートル離れた郊外の起伏のないところを走り回っていた。が、少しずつ慣れてくるにしたがい、遠出するようにもなった。時には、電車に自転車を乗せ、丘陵地で降り、そこから走り出すこともあった。限りなく続く緑の草原に、たわわになっている赤いリンゴの実を目にしたがらの走行である。ゆったりとした気分となって、心が自然と躍ってくるのである。

かなり上向き道となると、後ろで漕いでいるミヒヤエルに、  
「もつと力を入れて！」

と声を高くして言い、背を丸めながら、私たちは汗を出して登る。その時は、周囲の景色を楽しむ余裕はない。が、下り坂となると、風を切ったの走りとなる。その心地良さは、言葉では表現できない。

「ヒュー、ヒュー」

ミヒヤエルは声を発してよろこぶ。景色が飛んで行く。これを体験したらもう止められない。

ある時、急に空が暗くなり、風雨に打たれながら走ったこともあった。また、ある時はギラギラと照りつける太陽の下、休みなしで二時間も走り続け、咽がカラカラとなって、村の食堂でジュースを飲んだこともあった。あの味を、今も想い出すことはできる。このようなことを、二十歳を越えた息子と一緒に体験できるとは思いも寄らぬことだった。

一人では自転車に乗れないミヒヤエルにとって、このタンデムは気に入ったようで、日曜日になると、自分のヘルメットを持ち出して、

「さあ、走ろうよ」

と、催促してくる。

「漕げ！」

「ヤアー」

後ろから、ママの「気をつけて！」の声が飛んでくる。

## 台所に立つ、男ふたり

ミヒヤエルの部屋から、また、うめくような声が聞こえてくる。腕時計をのぞくと、真夜中の二時過ぎである。何とかしなければ。しかし、どのようにして。

医者に訪れ、検査してもらった。その結果、ミルクアレルギーとのこと判明した。が、治療方法はなく、医師からは、「食べ物に気をつけるしかありませんね」と告げられただけだった。

それ以来、彼がバターやチーズ、ミルクなどを食べないように、家では注意するようになった。が、彼が働いている作業所まで、親の目が届くわけではない。ましてこの地での昼食は、バターを多く使う料理が多い。そのような中で、指導員たちに、「ミヒヤエルはミルクアレルギーなので、気をつけてください」とお願いしても、徹底して守られることは難しい。

現に、ミヒヤエルが作業所から便のついたパンツを持って帰る日は、月に二、三回はある。下痢のため、我慢できなくて漏らしてしまうのだ。目の前にあるものは、何でも食べてしまう彼である。その日の夜は、大抵うめきにも似た寝言を無意識のうちに発し、それを聞いた際に、ミヒヤエルの心理的抑圧がこちらに伝わってくるのである。

私もミルクアレルギーで、チーズやヨーグルトなどを食べると、直ぐに下痢をしてしまう。ミヒヤエルの下痢が遺伝なのは確かで、弱く敏感なところは父に似てしまい、母の消化器官を継げば、少しのバイキンでもびくともしないのだが。

今まで彼に下痢止めの薬をいくら飲ませても、一向によくはならなかった。ただ、日本から送ってもらったビオフェルミンを服したら、一時は効いていた。が、そのうち効果がなくなってしまった。

彼の下痢を目にするたびに、自分のことのように思ってしまうのである。そのようなある日、一人の若い女性の行為を目にして感嘆したことがあった。

日本人たちが集まって話し合う会が、テュービンゲン市郊外で開かれた。休憩時間となったので、私は建物から出て、新鮮な空気を吸おうとして外に出た。と、一歳一か月になるハナちゃんがよちよちと芝生の上を一人で歩いているのが目に入った。

ハナちゃんに近寄ると、一匹の蜂が甘いミルクの匂うハナちゃんの口の周りをブンブンと飛び回っているのが見えた。ハナちゃんが刺されたりしたら大変だと思い、手で蜂を追い払おうとしたのだが、蜂はなかなか飛び去ろうとはしなかった。ハナちゃんは何事もないかのような顔で、こちらの手の動きを三十秒近く見ていた。蜂よ、あっちへ去ってくれと願っていた時だった。十五メートル先で、幼児たちをベビーシッターしていた若い女性が、こちらに近づいて来て、ハナちゃんを抱き上げた。そのあと、ハナちゃんの顔を体全体で覆うようにしながら、「もう、蜂は飛び去りましたか」と声を上げた。

この女性の行為に、私の心が動いた。彼女は自分の身をもってハナちゃんを抱き、蜂からハナちゃんを守ったのだ。手で長い間蜂を追い払い、こちらが刺されないようにしていた自分とは違っていた。私にはできなかった行為だった。

それから、二日後のことだった。作業所から帰ってきたミヒヤエルと一緒に、いつものように夕食の買物に出かけ、一時間して家に帰り、私はキッチンに立った。その時、「よし、やってみよう」と思い立ち、自分の部屋でカセットテープに耳を傾けていたミヒヤエルに、

「今日は、パパと一緒に夕食を作ろう」と、声をかけた。

最初はやる気を見せなかった彼だったが、再度誘うと、肯いて台所に立った。

「まず、お米を研いでほしい」

掌で米を握るようにして洗うやり方を示した。彼は何回も水を替えて研ぎ、そのあと炊飯器にスイッチを入れた。

「冷蔵庫から卵を二つ取り出して、割ってほしい」

生卵を割ったことのないミヒヤエルだったので、力加減がわからず、恐るおそるの手つきであった。

「そのなかに、砂糖を入れてかき混ぜてほしい」

「ヤアー、パパ」

「フライパンが熱くなったので、その卵を入れて」

愉快そうな表情で、卵を少しずつ落としていく。

「固くなったね。今後は包丁で、それを切ってほしい」

まな板の上で、不器用な手つきをしながら切り出した。

「次はキュウリだ。卵と同じくらいの大きさに切って」

「ヤアー」

「次はアボガドだ。これはパパが切るから、それを皿に並べてほしい」

丁寧の一つひとつ盛っていくミヒヤエル。

「さあ、炊き上がったご飯に、酢と砂糖と塩の合わせたものを混ぜておわりだ」

三十分ほどすると、仕事先から妻が戻ってきて、テーブルを囲んで三人での夕餉となった。目の前には、ミヒヤエルが切ったものが大きな皿の上に並んであった。

私たちは掌にノリをのせ、その上に酢の匂いのするご飯とアボガドと薫製のシヤケ、それにキュウリをそえて包むように巻き、わさびの入った醤油につけて口の中に入れた。好物の手巻き鮓である。

妻がミヒヤエルの顔を見ながら、

「今日のお鮓は、特に、おいしいわ」

と言うと、彼はにっこりした。

この日以来、夕食作りはミヒヤエルと一緒にするようになった。男ふたりが台所に立つようになったのである。だからといって、彼の下痢とうめくような寝言の回数は減りはしないが、以前よりも笑顔が多くなってきたのは確かだ。

父親として、今できることを身をもってしなければならぬ。

## 自立へ向けて

夕食を済ませてからソファーに腰かけると、ミヒヤエルがテレビのスイッチを入れて、私の観たいニュース番組を回した。そのあと、彼はテーブルに置かれてあったお皿などを台所に運び、自分の部屋へ戻った。好きな歌のテープを聞くためである。

夕食後、私たち家族はよくゲームをして遊んでいたが、このところしなくなってしまう。果たしてこれでよいのだろうかと思うようになった。

そのようなある日、一通の封書が家に届いた。ミヒヤエルが月に数回、通っている福祉センターからで、知的ハンデイのある人たちが自立を目指すグループホームをデビューンゲン市内につくる計画なので、関心があるようなら連絡してほしいとの知らせだった。

五年前から、ハンデイのある人たち九名が街の中で暮らせるようにとのプロジェクトがあるとは聞いてはいた。しかし、ミヒヤエルはまだその年齢ではないと思っていた。が、最近の彼の行動を目にしていると、そろそろ親から離れる時期がきたようにも思えるのだった。

昨秋、福祉センターが企画した一つのプログラムがあった。それにミヒヤエルは参加した。ハンデイのある人たちが大学生の学生寮に住み、約一か月の間、親から離れて、自立するための生活訓練をしたのである。

「ミヒヤエルは、結構楽しんでいましたよ」  
指導してくれた人があとで話をしてくれた。ただ、自分で何を着たらよいのかわからない、髭剃りができない、トイレのマナーが十分ではない、自由時間に何をしたらよいのかわからないなどの問題点も幾つかあったが、初めての経験にしては上出来との言葉をもらった。

その実習を終えてからというものの、ミヒヤエルの行動に変化が見られるようになった。そのような時に、センターから届いた手紙だった。妻と話し合い、説明会に行くことにした。ミヒヤエルも一緒である。

センターまで行く途中、妻が、「この説明会に、どのくらいの人があるのかしら？」と訊いたが、そのことよりも、ミヒヤエルがいなくなった生活を思うと、風船に針が刺さって、空気が次第に抜けていくような自分を感じはじめたので、返事をしなかった。

夕方の八時過ぎ、センターの小ホールに入ると、七十名ほどの人がすでに座っていた。私たちが椅子に腰かけると同時に、説明会が始まった。

まず、このプロジェクトを推し進めているセンターの責任者が、今までの経緯を話し出し、来年の秋にグループホームをオープンするので、それまでに親と専門指導者とが話し合っ、よりよいものをつくっていききたいと抱負を語った。街の議員と行政官も出席していた。

センター側と親との質疑応答となった。勿論、私たち親は幾つかの要望を出した。妻は地域の人たちと共に仲よく暮らしていけるような、そんなグループホームにしてほしいとのべた。

二時間の話し合いの中で、私を感じ入ったことがあった。それは、七十歳のある母親が三十八歳の娘について語った内容だった。

その娘は五年前に、隣の街のグループホームで月曜から金曜日まで暮らすようになった。最初の一年間は、土曜に自宅に帰り、日曜の夕方にホームに戻るのを娘は嫌がっていた。しかし、父親が病身なのを見て、自分はホームで暮らさねばならないとわかった。母親は語った。

「娘は今ではホームに戻るときは、また、来るねと私たち親に笑顔で言うようになりました。これも娘の自立の一つなのです。娘が自立するようになれば、親も自立します。三十八歳の娘がミニロックをはきたいと希望すれば、以前のように、そんなものを着てとは言わずに、それを受け入れる親に、今はなっています」

正直に思っていることを話しているこの母親から、私は勇気と希望をもらったようになった。ミヒヤエルが親から離れて、そろそろ自立をする時期なのだ。

二十七年間、息子と一緒に暮らしてきた私たち家族。ミヒヤエルがいなくなったら、私と妻との生活が今後どのようなになるのかは、今はわからない。でも、ミヒヤエルは週末には家に戻って来ることだし、親としての新たな役割があるに違いない。子を持つ親の心に変わりはないし、息子との関係が続いていくことは確かだ。それをありがたく受け入れよう。

## 三十歳の誕生日

この国では、誕生日をとて大切にしている。特に、二十、三十、四十歳などの区切りの年は、皆で大いに祝う。それはミヒヤエルの場合でも、変わりはない。

二十歳の誕生日は、叔父や叔母やいとこなどを家に招いての賑やかなひと時だった。勿論、主役のミヒヤエルは人一倍よろこんでいた。それから十年経っての三十歳の誕生日である。

彼は一年前からグループホームで暮らしていたので、そのホームの仲間たち八名と世話をしている人たち八名を招くことになった。そうすると、家に全員を招くことは難しいので、もっと広いところであることになった。

マルクト広場に面した教会のゲマイデハウスの小ホールで、私と妻とミヒヤエルとで準備に取りかかり、招待した人たちが寄り集まってきたのは、日が暮れかけた六時過ぎだった。

夕食の支度は、妻が二日前からこの地方の郷土料理であるマウルタアシユを家で作っていたので、それを暖めるだけでよかった。サラダと食後のケーキは、参加者が持つてくることになっていた。

総数三十七人が揃ったところで、妻がミヒヤエルの叔父や叔母や従兄弟、それにグループホームの一人ひとりを紹介した。続いて、ホームの職員たちの自己紹介となった。

そのあと、妻と私は壁に映し出されたスライドの画像を見ながら、ミヒヤエルが生まれた浜松や六年間暮らした土浦の日々、それに彼が十八歳の時に、私と二人で十八日間日本を旅したことや、毎夏アルプスの山々に登っていることなどを語った。ミヒヤエルが山道を一日十キロメートルは歩き、それも一週間続けていたと話すと、皆驚きの声を上げた。

夕食の時間となった。妻が作った料理と、何人かが持ってきたサラダを食べながら、グ

グループホームで世話をしている人がビデオで撮った、ここ一年間のミヒヤエルの生活ぶりのフィルムを観ての時間となった。

それが終わると、今度は皆で歌を唄ったり、ゲームをしたりしての時間となった。ミヒヤエルは、終始ニコニコ顔で各テーブルを回り、誇らしそうに、皆からもらった贈り物を披露していた。

九時過ぎ、ミヒヤエルたちがホームに戻る時刻になった。最後は全員で、彼のために歌を唄い、それもアンコールになった。ミヒヤエルは両手を上げて、「やった！」とのポーズ。

皆が帰り、私たち夫婦、それに知り合いの女性一名が残ったの後片付けとなった。

それも終わり、家に戻ったのは、夜も更けた十二時。ミヒヤエルはグループホームへ帰ったので、家の中は私と妻の二人だけである。

「このような誕生日会が終わって、ここにミヒヤエルがいないのは少し寂しいな」

妻にそう言った時、娘の結婚式で、育てた子が嫁いで行く際に抱く父親の気持ちは、このようなものではないのだろうかと思った。暫くすると、彼女が、

「ミヒヤエルは少しずつ自立しているわね」と、言った。

## 目に見えない自立

浜松で生まれたミヒヤエルは、一歳を過ぎてから茨城県の土浦で暮らすようになった。当時、私はその土浦で、ハンディのある幼児用のおもちゃを作っていた。と同時に、それらのおもちゃで遊ばせるライブラリーも開いていた。

その土浦の地は、私が大学卒業後、知的ハンディのある児童施設の職員として働いたところでもあった。その施設に久しぶりに訪れた。その時、その理事長から、

「横井さん、息子さんが暮らしているグループホームについて、職員の前で話してくれませんか」

と頼まれていたので、約五十名近くの職員の前で話すことになった。その内容は次のようなものだった。

ミヒヤエルはグループホームで月曜から金曜日まで暮らし、土曜日の昼に家に帰り、日曜の夕方になると、家から歩いて十五分のホームに戻る日々となった。

グループホームで暮らしはじめた頃の一年間は、日曜の夕方、ホームが近くになると、彼の足は止まり、前へ進まないことが何度もあった。しかし、二年半が経った今は、足取りも軽く、よりテンポが速くなってニコニコしながら、うれしそうに行くようになった。その姿を目にしていると、グループホームでより楽しく暮らしているのを知った。一体、何がそうさせるようになったのだろうかと思った。

ミヒヤエルは、はじめの一年間は一緒に住む同僚の名前と、世話をしている人の名前をめたに口に出さなかった。が、今はしばしば言うようになった。その時の彼の顔は、いかにもうれしそうだった。その姿を見て、また、ひとつ学んだと思った。

一般に自立というと、身辺自立、経済的自立、職業的自立、家を出ての自立となるが、



目に見えない自立もあることに気づいたのだった。

ミヒヤエルの住居には、あと二人の同居人がいる。三人の知的能力はさまざまで、年齢も六十歳、三十二歳、二十五歳と異なっている。その三人が一緒に暮らす姿に、「共生」という語が当てはまると思った。

ハンディの程度が違う三人が共に暮らすには、彼らなりの寛容を必要とするだろう。そのような中で、ミヒヤエルは同居人と世話をしている人に主体的に働きかけて、関係を築いていたのだった。そのことが、目に見えない自立なのだ。他者との関係をもつことができる人こそが自立をしている人なのだ。

ミヒヤエルの場合、身辺自立や目に見える自立は未だにできていない。しかし、この目に見えない自立である、他者との関係を持ったからこそ、今では家よりもグループホームでの暮らしに、彼はよろこびを得たのだった。

六十歳を過ぎた親に、その目に見えない自立を知らせてくれたミヒヤエルに感謝さえするようになった。三十二歳の息子から学んだことだった。

以上のようなことを、職員の前で話をした。

その他にも、このグループホームの財源がガラス張りとなっていることや、街の中央にホームが建っているの、地域のひととの触れ合いをどのようにしているかなどについても語った。と同時に、ホームが存在できる前提に、ドイツの社会保障や家族とパートナーシップを基にして社会が成り立っていることにも触れた。

聴いている人たちは、異なったような社会に捉えたかもしれないが、共通するところも見出してくれたに違いない。

最後に、今も常に思っている自分なりのモットーについても語った。それは、短い言葉でいえば、「小さなよろこび、大きな幸せ」だった。また、ハンディという語があるが、それはその人の個性であって、その個性を感じる感性を、私はミヒヤエルを通して磨かれ、それが大きな幸せになることをも談じた。それで一時間半の話は終わりとなった。

以上のようなことを話したことによって、聴いている人から、また、一つ学んだようにもなった。ありがたい時間だった。

## 周りの人たち

### 「もうダメなんだ」(1)

ホームレスの人と知り合いになったのは、次のようなことがあったからだ。

ミヒヤエルと一緒に教会前広場を歩いていると、いつも石畳の上に座っている人が手招きをしたので、何だろうと行って近寄ると、

「きょうは暑いな。これで、彼にアイスクリームを買ってあげな」

と声を出しながら、ミヒヤエルに二マルクをあげようとした。

「息子だろう？ 何という名前だ？ それ」

にこやかな顔で、彼はミヒヤエルにコインを手渡した。私は驚き、どうしようかと一瞬迷った。が、せつかくの厚意を無下にしてはいけないと思い、そのお金を受け取り、イタリア店に行つてミヒヤエルにアイスを買ったのだ。

いつも通行人にお金を乞うている人から、まさかお金をもらうとは思つてもみないことだった。それ以来、その人を見かけると、話をするようになった。

いつも片手にビールを持ち、服はアルコールが浸みつき、幾本も抜けた歯から出るドイツ方言は聴き取りづらかった。が、言っていることは理解できた。時々アルコールを飲み過ぎて、通行人に大声を出すときもあったが、ミヒヤエルと一緒にいる私には、いつも穏やかな声で話をするトーマスだった。

そのトーマスが十年近くの路上生活に終止符を打つて、街の高齢者ホームで暮らすようになった。そのことを、私は心からよろこんだ。

それから五か月たったある日のことだった。通りを歩いていると、向こう百メートル先にトーマスらしき人が路上に座っているのが目に入った。まさかと思いつながら近づくと、彼だった。驚き、直ぐに駆け寄つた。

彼は寝袋の上で壁に寄りかかつて、眠っていた。傍には、飲みかけのワイン瓶が置いてあつた。

「トーマス」

と呼びかけると、目を開けてこちらを見た。五十四歳なのだが、十歳以上は老いた顔である。

「どうしたのですか。もう夕方ですし、高齢者ホームへ帰らないのですか」

「もう今のホームでは、暮らしていけない。周りの人と合わないのだ。もうダメなのだ」

「一体、どうして？」  
「もうダメなのだ」

絶望的な表情で、彼は何回も繰り返すだけだった。

二十分ほど話をしてから、トーマスと別れ、通りを歩いていると、私の胸は少しずつ塞がって悲しくなってくるのだった。これから高齢者ホームで暮らすと、あれほど明るい顔で語ってくれた彼が、再び路上生活のホームレスの人となつてしまったからだ。

大きなショックを受けた私は、ホームレスになつた原因やアルコール依存症の人がアルコールを止める難しさ、それに人と人との関係などを考え続けた。

再び、路上で歩行者に喚き散らすようになってしまったトーマス。でも、私とミヒヤエルが傍に近寄ると、優しい表情となつて静かな声で話す彼。路上に座っているトーマスの姿を目にするのが辛く、その姿を見たくないと思ふようになってしまった私。「一体、自分はどうしたのかな」と考える日々となつた。

そのようなある日、一人で街外れの森へ出かけた。土と木の匂い、風の音を耳にしながら森の中を歩いていると、自分が森全体の清らかな空気に、吸い込まれたようになっていった。その時、ふと思つた。トーマスがこうあつて欲しいというこちらの見方だけに固守して、その願いが叶えられないから、彼の姿を目にしたくないとは、あまりにも自我が強く働き過ぎているからではないだろうか。

木と土の匂いや風の音など、森全体を包む澄んだ空気がまずそのままあつて、自然の素

晴らしさが伝わってくるのであって、私が在って、森の素晴らしさがあるのでない。それはトーマスのことに関しても言えて、自分の自我的な立場から降りたところで、今の彼と接することが大切なのだと思つた。お互い傍に居るだけでいいのだと思つた。

それからというものは、路上に座っているトーマスを見たくないという気持ちがなくなり、今の彼と顔と顔を合せて話をするのが、前より以上に楽しくなってきたのである。これは不思議なことだった。

## 「もうダメなんだ」(2)

紅葉していた葉が散って、初雪が降り出したある日、街の通りを歩いていると、トーマスとしばしば一緒にいたホームレスの人が声をかけてきた。

「元気でいるかい。きょうは、せがれがいないが」

「ミヒヤエルは家にいますよ。ところで、ここのところトーマスの姿を通りで見かけないのですが、どうしているか知っていますか」

「彼なら、一か月前に高齢者ホームに戻っていったな。そこで、再び熱いスープを飲んでいるだろうよ」

それを聴き、直ぐ家に戻り、台所で料理をしていた妻に、トーマスが再び前の高齢者ホームに戻ったことを伝えた。

「それはよかったね。わたしもこのところ彼を見かけなかったもので、気にはなっていたわ。そう、それはよかったわ。これから寒くなっていくことだし」

彼女は、よろこんだ声を上げた。私たちは、トーマスが路上生活を止めて、再びホームに帰ったことをよろこんだ。

その時に思った。トーマスは戻るどころへ戻ったのだ。周囲の人たちが、彼のような人をほったらかしにしなかったのだ。ああ、人って素晴らしいな。人は自分一人では生きられないものでなく、他の人と網の目のように結ばれながら、共に生きているのだ。一つの結びの糸が切れても、他の周りの糸が支えてくれるのだ。そこには、相手を思いやる心があつたからこそだろう。

路上で会って話をするたびに、トーマスは、

「もうダメなのだ。もうダメなのだ」

と、よく言っていた。無意識のうちに自己を愛するが故に、そのことばが自然と口から出ていたのだろう。そのことを知っている周囲の人たちが、とくに以前住んでいたホームの同居人と職員の人たちが、何とかしてトーマスを再びホームに戻そうとしたに違いない。

このことから、幾つかのことを学んだ。特に、彼の「もうダメなのだ」と言う言葉に、深く考えさせられた。嘆きを言うことは、人に助けを求めているのではないだろうか。嘆きを聴く耳を持ちたい。また嘆きを口に出す自分にもなりたい。なぜなら、そこに己の弱さ、不完全さを知り、そこから次の一歩がはじまると思つたからだ。

確かに、トーマスは路上でアルコールを飲み、喚き散らす場合もあった。人に嫌な印象を与えることもあった。しかし、「もうダメなのだ」という嘆きの言葉があつたからこそ、高齢者ホームに戻つたと思えてならない。

## 一分間の握手

こちらで人と会い、別れる際は必ず握手をする。相手が男であろうが、女であろうが握手を交わす。柔らかい手やごつい手、乾いた手や湿った手、力を込める手や軽く触れる手などいろいろだ。

握手をして、もう会話がはじまっている。それは、過去・現在・未来における二人の出会いの気持ちを表現しているようなものだ。

握手は一瞬にするが、最近、一分間続けてしたことが二回ほどあった。

一つは、ホームレスだったトーマスとの握手だった。街の通りを歩いていると、彼の姿を見つけた。以前のように酔ってなく、しっかりした足取りであった。早足で歩み寄り、握手しながら、

「今日、再びあなたに会えてうれしい。ホームの暮らしはどうですか」

と訊ねると、穏やかな目でこちらを見て、

「再びホームに戻って、今はいいぞ。息子のミヒヤエルはどうしている？ 元気でいるか」と、訊き返してきた。その彼と暫く話をしてから、再び乾いた柔らかい手を握って別れた。通りで、再び会うことができるだろう。ミヒヤエルとも握手をしてくれるだろう。そう思うと、心が自然と弾んでくるのだった。

もう一つは、スリランカから政治亡命してきた人との握手だった。

街の郊外に住んでいる彼の家族と、私たちの家族は、お互い料理を作ったの交流が続いていた。しかし、ここ二年ほど、通りで彼らの姿を見かけなくなったので、どうしているかと思っていた矢先だった。

マルクト広場で、買い物をしていた彼を見つけたので、駆け寄り、

「最近は、どのような暮らしをしているの？」

と訊くと、彼は沈んだような声で、

「現在のように失業者が多いと、外国人、それも難民のボクには、仕事はなかなかまわってこない。今も職業安定所からの通知を待っているところだ。昨年的一年間は、隣町にあるコンピューター関係の学校へ通い、資格は取得したが、どこも雇ってくれない。四十を過ぎている自分は、宙に浮いているようなものだ」

と、肩を落としながら語った。以前はこちらの目を見ながら話をしたのだが、今は見ないで話をする。暫く立ち話をしてから、別れる際に彼の手を強く握ると、今度は私の目を正視して、強く握り返してきた。そうすると、彼の気持ちはこちらに伝わってくるのがわかり、柔らかい手を離れたくない気持ちになった。この時、別れの握手は再び会おうとする意思表示だと思った。

握手をすることは、自分の気持ちと相手の気持ち、光のように交差する瞬間だ。

人との出会いの中で、握手をしたり、頬と頬を寄せ合ったり、身体を抱いたりのコンタクトは感情がともない、いいものだ。

## 情感豊かな人

夕食を摂っていると、妻が兄嫁のことを話し出した。

「一週間したら、クリスタの六十歳の誕生日ね。何を贈ろうかしら？」

「例年のように、本にしたらどうだろう」

「そうね。でも、二週間したら、手術でしょ。読む気力があるかしら？」

彼女は思案顔で、隣にいたミヒヤエルにも訊いた。

「ハナ、ハナ」

「そうね。あなたの好きなおばさんに花もいいけど、難しいわね」

それを聴いた私は、妻に言った。

「三日前の電話では、腎臓機能が5%近くになってしまったと話してくれたね。気分もすぐれないようだし、果たして自分の誕生日会をすることが出来るのだろうか」

「彼女は、あなたも知つてのとおりエネルギーシユな人だし、ごく身近な人たちを招いて、誕生日を祝いたいのでしょ」

「そうとは思うけど……」

私もプレゼントを何にしようかと考え続けた。が、よい案がなかなか浮かんでこなかった。暫くすると、妻が声を出した。

「クリスタに直接連絡して、何かほしいものがあるかを訊こうかしら。それが一番いいわ。夕食の後片付けをしてから、あなたから電話をしてくれる？」

「ああ、いいよ」

片付けが終わり、クリスタに電話を掛けると、いつものバイタリティーのある声が聞こえてくる。一か月半前に会った時は、顔と手がむくんで、病に罹っていると一目でわかったが、声だけを聞いていると、健康な人のように思えてしまう。その彼女に望みを訊いた。

「プレゼントは要らないわ。でも、是非というなら、飢餓で苦しんでいる子供たちに寄付して」

思っても寄らない言葉だったので、直ぐに返事ができずにいた。が、少しして、「そうするよ」と言つて受話器を置いた。そのことを妻に伝えると、「クリスタらしいわね」と肯定的に言った。

ソファアに腰を下ろしてから、クリスタのことを想った。

ウィーン生まれの彼女と初めて会ったのは、私が妻とチュービンゲン市庁舎で結婚式を挙げる三日前だった。背丈が高く、気品の溢れた顔立ちをして、ブロンドの髪に薄ブルーの瞳で握手された時は、目の置きどころに戸惑ったものだった。その日、クリスタと、彼女の三人の子供たちと森の中を歩いていたら、彼女が何かに躓いて転んでしまった。と、右足が長いスカートから、飛び出してきたのである。

義姉は幼児の時、戦車に撥ねられて、右足は付け根からないと妻から聞いてはいたが、驚いた。しかも、その義足で毎夏休み、三人の男の子を連れて、オーストリアのチロルの山に行き、一日平均五キロのワンデリングをすると聞いた時は、感嘆したものだった。

その彼女と親密に交流をはじめたのは、チュービンゲンに住み出してからだだった。私たち家族は、義母と一緒に車で三十分離れた義兄宅へよく行くようになった。

皆とテーブルを囲んでの食事になると、クリスタは必ず私にライスをつけてくれた。彼

女の料理はいつも美味しく、それを口にするたびに、彼女の温かい心を感じたものだった。かなり前のことだった。クリスタと子供の育て方について話し合ったことがあった。

「男の子三人を育てるのは、大変でしょうね」

「そうね。彼らが思春期だった頃は、何かと考えさせられたわね。でも、それも過ぎ、今長男は兵役義務に服し、下の二人は高校生でしょ。まだ子育ては済んでいないけれど、少しは楽になったわ」

「彼ら三人とも伸びのびと育っているように見えるのだけれど、何か特別な教育方針でもあるの？」

「特に、これといったものはないわ。でも、私たち親が願っていることは、彼らが自分は何を欲し、何をしたいかを知ることができるとなれば、それでいいわ。そうすれば、自分の幸せを見つけ出せるのだから」

彼女は、そう言うてから、

「私たち親の考え方は、彼らに少しずつ伝わっていると思うわ。あとは彼らが、自分でどのように展開するかだわね」

と語り、私のほうに青い瞳を向けて微笑んだ。母親としての自信に満ちた顔だった。家庭での育て方がより大切なよ、と語っているように思えた。

その青年たちは、今は建築技師、写真家、作業療法士として自立した生活をしている。時々三人に会うと、若い彼らのエネルギーをもらったようになって、つつい話し込んでしまう。

三人とも親の教育のせい、住まいにはテレビがない。それに今でも、「おじさん、おじさん」と親しみを込めて呼び、私の誕生日には、必ず祝いの連絡をしてくる。

その三人を育てたクリスタは、こちらの人にしては珍しく、人の話をよく聴いてくれる人でもあった。そのようなこともあって、義母と住みはじめた頃、三世同居の暮らしに難しさを覚え、自分の胸の内を彼女に打ち開けたことがあった。この人なら、こちらの身になって悩みを考え、共有してくれると思ったからだ。

クリスタは耳を傾けながら聴いてくれた。この時、自分の悩みと苦しみを言葉で表現することが、いかに難しいかを知った。しかし、だからこそ、悩みを話すことによって、自分の悩みが何であるのかをはっきりと知ることができた。また、その悩みを外側から眺めることによって、苦悩の深さが軽くなった。なまじその人の意見をのべたり、安易な同情的言葉で言ってくれたりするよりも、じっくりと何も語らずに、悩みを聴いてくれる人が、よっぽどありがたかった。

クリスタは、何かを忠告しなかったに違いない。しかし、それをしないで、ひたすら耳を傾けてくれたのである。うれしかった。心の対話ともいえるようなものだった。聴くことは受動的なことではなく、能動的なことだと知った。

それ以来、私と義母の関係が少しずつよくなっていった。おそらく、クリスタは仲の良い義母と、このことについて話し合ったに違いない。そのようなことを通して、私はクリスタに近づき、彼女に支えられていることに、よろこびを抱くようになった。

その彼女が目下、腎臓病に罹り、それも腎臓機能があとわずかとなってしまった。二週間後には、透析療法となるための手術を受けなければならぬ身である。

それから一週間が過ぎて、クリスタの六十歳の誕生日となった。私たち家族は車で三十

分走らせて、義兄宅へ向かった。

玄関でベルを鳴らすと、笑顔を浮かべながらクリスタが出てくる。いつものように頬を合わせての挨拶となった。最初にこれをされた時は、戸惑いを感じたが、今では頬を合わせ際に彼女の唇からチュと発する音を、戸惑いもなく聞けるようになった。その音が、今日はいやに耳に響く。

広い居間に入ると、すでに義兄と三人の息子たち、それに彼らの恋人たちとクリスタの母親と兄、それと妻のもう一人の兄の家族が椅子に座っていた。これから、彼女が焼いたケーキを皆で食べるところだった。

私の隣には、クリスタが座っている。十六名もいると、何と賑やかなことか。訛りのある方言が飛び交い、私が理解できなくなると、クリスタはテーブルの上に置いた私の手の甲に、自分の手を重ね、「ヒデ、こういうことなのよ」と声を出して、わかり易く説明してくれる。このような時は、妻よりも彼女のほうがよく気を配ってくれる。

ウィーン作りのリンゴパイと苺ケーキを食べながらの歓談となった。それも終り、今度は皆で、家から車で二十分のところで開かれているクリスタの絵の個展会場へ行くことになった。

彼女は三人の子を育てながら、趣味で水彩画を描いていた。子育てを終えたあとは、それが本格的になって、コンテストに応募して賞を得たり、フランスのある市から客員画家として招かれ、義兄と一緒に三か月間フランスに滞在したりしたこともあった。そのほかにも、五年前から彼女のアトリエで、先生として大人に絵の指導をするようになった。

彼女は年に展示会を二回ほど催し、今回の個展も地方紙に大きく載り、会場は多くの人たちで溢れていた。

ある時、クリスタが私に語ったことがあった。

「子供と夫がおいしく食べてくれるように、毎日料理を作り、彼らと一緒にテーブルを囲んで過ごすことが、わたしのよろこびだったわ。その子供たちが大きくなり、家を離れて自分たちで暮らすようになったでしょ。それ以来、以前から興味があった絵の活動に、熱に浮かされたようにのめり込んでいったわ。五十を過ぎてからの新たなチャレンジね。自分なりのスタイルで描くには勉強が必要だったし、とても根気がいったわ。でも、その過程のなかで、よろこびを味わっていたわ」

彼女は青い瞳を輝かしながら、生きいきと語った。自分のよろこびを自覚している顔のように映った。いい生き方をしているなと思いつつ、彼女の話すことに耳を傾け続けた。

その彼女の個展。今回は腎臓の病気が判明して、医者の特可を得ての一か月半のポルトガル滞在中に描いた二十一点であった。古い館を借りての展示場は広々とはいえないが、所々に花がきれいに生けてある。訪問者に対する彼女の心配りだ。

私たち十六名は壁にかかってある一つひとつの絵を眺めながら歩いていた。どの絵も心温かいものを感じさせるものだった。私の足がある一つの絵の前で止まり、それをずっと眺めていた。と、クリスタが寄ってきた。

「ヒデ、気に入った？」

「うん、自分が引き込まれるような絵だ。この絵には、買い手がついたのではない？」

「ええ、でもこの一点は、半年したらウィーンで小さな個展を開くので、それまでとっておくことにしたわ」

尚も眺めていると、彼女はにこやかな顔で、

「ヒデには、山の風景をまた、描くわよ」

と、言った。それを聴いて、ハツとした。彼女は、料理を作る際は食べてくれる人か、思い浮かべ、絵を描く時は眺めてくれる人を想像して描くのではないだろうか。だから、彼女の絵は、また、料理は心の温もりがあるのだと思った。

一時間半が過ぎていった。今度は皆でホテルへ向かった。いつもはクリスタが家で料理を作るのだが、疲れ易くなっている今の身なので、夕食はホテルとなったのである。

会食をしながら、私たちは隣の人と話をしたり、誕生日の祝いの言葉をのべたりしていた。私も何かを言おうとした。ただ、ドイツ語でのスピーチを考えていなかったため、好きな歌を心を込めて唄うことにした。北海道の山を歩いていた時に、よく口ずさんだ知床旅情だった。

日本語歌詞なので皆には意味がわからなかったが、静かで穏やかなメロディーでもあったのだろう、シーンとした中に響いた。唄い終わると、皆から拍手をもらった。クリスタは直ぐにこちらに寄って来て、微笑みを浮かべながら肩を抱いてくれた。私も抱き返した。

それから一週間が過ぎていった。これから職場へ向かおうとしている妻に、声をかけた。

「今日は、クリスタの手術の日だね」

「ええ、うまくいくといいわね。手術自体は難しくないと、兄は話していたわ」

そう言うてから、妻は家を出た。

翌日義兄から、手術は成功したとの知らせが入った。それを聴いて、私たちはよろこんだ。

それから三日して、私と妻はクリスタの病室を訪れた。と、クリスタがちょうどドアを開けて、一人の女性と一緒に出て来るところだった。その人と、私はクリスタの家で二回ほど話したことがあった。

クリスタと彼女は、教会が主催しているボランティアのある会で、長年に亘ってある活動をしていた。その活動とは、去り逝くお年寄りやガン、又は重い病気の人たちの自宅で、最期までお世話をするものだった。

その活動でのクリスタの姿を見て、私もチュービンゲンでそれと同じような会に参加して活動したことがあった。しかし、夜中も介護の手伝いをすることもあって、長く続けていくことができなかった。この会で実践することは、生半可な態度では決してできるものではないことを知った。

クリスタはその女性をリフトまで送ってから、私たちのいる訪問室に入って来て、ソファに腰かけた。

「よく、来てくれたわね」

目元が腫れ、血の気がない蒼白した顔で言った。その顔を見ながら、私が、

「あらかじめ来ることを伝えておけばよかったけど、突然の訪問で驚いたのではない？」

と、言った。妻も、

「ヒデジが、クリスタはどうしている？ 連絡はないのと毎日訊くので、電話も入れずに来てしまったわ」

と、声を出した。



「見舞いに来てくれて、うれしいわ」

そう言って、クリスタは微笑んだ。その目はいつもの彼女の澄んだ瞳だった。それを見て、人間の瞳はどんな状態になろうとも、疲れを表さないのでないだろうかと思った。そのクリスタが私に言った。

「夫、息子たちは毎日来てくれるし、手術後の経過はいいわ。気分もまあまあだし」それを聴き、積極的に話しかけた。

高台に建つここからは、暮れいく街に灯が点き出したのがよく見える。その夕景を眺めながら、クリスタが、「なかなかの景色でしょう」と呟くように言った。私は彼女の艶のない横顔を見ながら、

「この光景を描きたいのではない？」と、訊いた。

「ええ、よくわかるわね。あと一週間で退院できるし、そしたら、また、描くわ」

絵のことに話題を向けると、彼女の瞳は輝いてくるのだった。それにつれて、彼女の頬がわずかだが、赤みを帯びてきた。

「家に戻って五週間は、外出しないようにと医者に言われたわ。でも、それが過ぎたら、再び絵を描き、授業を開始するわ。二か月後の二コースには、前コースに参加した大人の生徒三十人が申し込んでいるし。皆、とても愉快な人たちよ。いつも笑いが絶えないわ」彼女は私と妻を交互に見ながら、ゆっくりと語った。そのクリスタに、妻が言った。

「若い頃、あなたは学校の先生になりたいと希望していたわよね。それが五年前から、叶ったわけね」

「そうね。それが今、できてうれしいわ」

それを聴き、私も言った。

「その大人の生徒たちは、クリスタが早く教室に現われるのを待っているだろうね」

「ええ、今日も、数人から手紙をもらったわ」

「絵を描かない生活なんて、今のクリスタには考えられないだろうね」

「そうね。これが、わたしのよろこびかしら。子育てを終えてからの生き甲斐ともいえるわね。絵を描くことにチャレンジし、チャレンジするには目標もあり、それにともない希望も湧いてくるわ。そして、何よりも今の自分を大切にしたい、という気持ちが強くなるのよ」

薄黄色のガウン姿で、ソファアに背をもたげながらクリスタは語った。その彼女の横顔を見ながら、思った。三歳で片足を失い、それ以来、何かにつけ、自分のハンディを感じたことだろう。その彼女がこれから人工透析療法を続けなければならないのだ。その身になっても、二か月後には、再び絵の先生として、活動することによるこびを見出しているのだ。何と積極的に生きている人なのだろう。

私たちは次第に熱を帯びた会話となっていた。それにつれて、クリスタはいつものエネルギッシュな声を上げるようになった。

訪れてから、もう一時間半が過ぎている。これ以上話を続けていると、体に悪いと思い、帰ることにした。

「来てくれて、ありがとう」

クリスタはそう言うてから、頬を重ねてきた。いつもの淡いクリーム色の匂いでなく、葉

の香りが漂う別れとなった。  
テュービンゲンの帰路の途中、子育てしたあとも素晴らしい生き方をしている人だと思  
いながら、車のハンドルを握り続けた。

## ベラおばさん

「ベラおばさんと長い間、会っていないわね。母の誕生日に、彼女を招待しようかしら？」  
妻が、私のほうに顔を向けながら言った。

「ベラおばさん、もう何歳になったのだろう？」

「母と同じ年に生まれ、母が亡くなったのが八七歳でしょ、それから六年が過ぎているか  
ら、九三歳になるかしら」

義母の誕生日の五月二二日になった。ベラおばさんが住んでいる街へ車を走らせた。妻  
は昼食を用意するため家に残った。

三十分ほど走ってから門を潜ると、庭に咲いている花の手入れをしているベラおばさん  
の姿があった。挨拶を交わしてから、彼女を車に乗せ、テュービンゲンへ向かった。

ベラおばさんは、義母の女学校時代からの友人だった。義母の誕生日には、必ず訪れて、  
自分の庭に咲く花をいつも持ってきていた。

助手席に座っている彼女の膝の上には、今日も彼女の庭から採った野生の黄色いチュ  
リップと、紫色の小さな花が顔をのぞかせている。

「さあ、着きましたよ」

「ありがとう」

ベラおばさんはドアを開けて外に出ようとしたが、なかなか座席から立ち上がれないで  
いた。それを見て、私が手をさし出すと、

「ひとりのできるので、いいわ」

と声を出して、体をゆっくりと動かしながら車から降りた。そして、杖を突きながら、  
玄関先まで歩いて行った。背が低くなって、覚束無い足取りである。でも、三十分ほどの  
車中での会話では、頭の衰えをまったく感じないほどに生きいきと語り続けたベラおばさ  
んだった。以前のままで。

妻が玄関の戸を開けて、にっこりした顔で彼女を迎えた。ベラおばさんは妻に支えられ、  
木の階段を一段一段と上り、三階の私たちの住まいに入った。居間のソファアに腰かけた。  
と、ベラおばさんが、

「ヒデジにはこれを持ってきたわよ」

と声を出して、手提げ袋から厚みのある古い一つの冊子を取り出した。表紙には、「い  
ろは引紋帳」と書かれ、裏には明治十四年一月六日御届と記されている。

「わたしの父が骨董屋で見つけたものよ。もしヒデジが関心をもたないなら、ほかのだれ  
かに渡してもいいわよ」

「ありがとうございます」

私は、いろいろな模様がぎっしりと描かれてある冊子をパラパラとめくった。和紙の感  
触がとてもいい。

昼食の時間となった。テーブルには、ベラおばさんの庭で咲いていたチューリップの花が置いてある。食べ出すと、妻がベラおばさんに、

「肉をやわらかく煮過ぎてしまいました。もう少し固めにしたかったのですが」と言うど、

「やわらかくて、食べ易いですよ」

と、声を出してから、

「何ごとも、利点を探すことですよ。それが一番ですよ」

と、語った。長生きしている人の言葉だと思った。

九三歳のベラおばさんは、食べながらもユーモアをよく言う。それに彼女の声には艶があつて、その声だけを聞いていると、若い女性のようにも思えてしまう。椅子の上にクッションを三つ重ね、その上に座っているベラおばさん。ふと義母のことが浮かんでくるのだった。

昼食を終え、私たちはソファで寛いでから、義母の墓へ向かった。

墓の前に立つと、ベラおばさんが、

「まあ、リンドウの花がきれい。エルフリーデが好きな花だったわね」

と、声を上げて見つめた。

ベラおばさんと妻は幾つかの枯れた花や草を抜き取り、ベラおばさんが持ってきた紫色の小さな花を植えた。腰を屈めているベラおばさんの姿は、まるで義母の晩年とよく似ている。花に水をかけてから、私たちはお祈りをして墓を出た。

車が駐車してあるところへ向かう途中、ベラおばさんが一年前に大腿骨折をしたことを語り出した。

庭の手入れをしていた最中に、土の塊に足をとられて転んでしまい、起き上がる事ができずに這うようにして家に戻り、電話をして救急車を呼び、病院に七週間入院していたと語った。退院した翌日から庭に出いたとも付け加えた。

それを聴き、気丈なベラおばさんだからこそ、今も一人住まいが可能なのだろうと思つた。

家に戻ると、もう四時が過ぎていた。ミヒヤエルがそろそろ作業所から戻って来る時間である。マイクロバスで帰宅した彼は、ベラおばさんと握手を交わし、テーブルに置かれたケーキに目を向けながら椅子に腰かけた。

ミヒヤエルの前には、ベラおばさんが座っている。そのベラおばさんを見ながら、

「おばあさん、おばあさん」

と、彼は声を上げた。義母がよく着ていた紺色の服と姿形が義母とよく似ていたので、そう呼んだのだろう。

「ミヒヤエル、あなたのことは、エルフリーデからよく聞いていましたよ」

ベラおばさんがつこりした顔をミヒヤエルに向けて言った。彼はさかんに、「おばあさん、おばあさん」と繰り返した。

私は義母がよく観ていた写真集を持ち出して、義母の結婚式が当時どのように行われたのかをベラおばさんに訊ねた。

彼女は妻が作ったリングパイを食べながら、語り出した。時々ユーモアも言うので、私たちは笑いながら聴いていた。ベラおばさんはもつと話をしたい様子だったが、家に帰ら

なければならぬ時刻である。私たちは腰を上げた。

ベラおばさんを助手席に乗せて走り出すと、彼女が後席の妻に聞こえるような大きな声を上げた。

「今日は楽しかったわ。次はわたしがあなたたちを招くわ」

それを聴いた妻が、

「ベラおばさんは一人で暮らしているし、私たちを呼ぶのは大変でしょう。次も、私たちの家に来てください」

と、返事をした。私も、言った。

「是非、また、来てください。家までの道もわかりました。車で一時間もかからないので、また、迎えにきますから」

「ありがとう。そう言ってくれるとうれしいわ」

ミヒヤエルが、再び「おばあさん、おばあさん」と声を出すと、子供のいない彼女ははにかみこりした。

ベラおばさんの家の門を潜ると、大きな庭にいくつもの花が色鮮やかに咲いているのが目に入った。家の壁には、藤の花が房ふさと垂れ下がっている。ベラおばさんは、それを杖で指しながら、私に「香りもいいわよ」

と声を出して、鼻でかぐ仕草をした。

色とりどりに咲く花の一つひとつの名前を、ベラおばさんは言い、その声と姿は生き生きとしたものである。花をこころから愛し、花から愛され、花の変化、成長を楽しんでいる顔だと思った。

そこには、何かをつくり出すという心の働きがあるからのようにも映った。自分の内面の変化が伴ってこそ、外のものがより新しく生きいきとして捉えられ、そこによるこびを見出しているに違いない。

一世紀近くを生きてきたベラおばさんは、様々なことに遭遇しただろう。うれしい時、苦しく悲しい時も多くあっただろう。そのような中で、高齢になっても真のよろこびを見出すには、愛し愛される心を持っているかどうかではないだろうかと思った。

別れの握手をすると、毎日庭の世話をしているせい、ベラおばさんの掌は硬い。

「また、迎えに来ます」

そう言うてから、私たちはベラおばさんの家を出た。次に会うのが、待ち遠しくなった。

## まじら

妻には七歳年上の姉がいた。その姉（アンネ）は、私たちが結婚する一年前に三十七歳の生涯を閉じてしまった。

彼女を写真で初めて見た時、こんなにも痩せている女性がドイツにもいるのかと思ったほどだった。そのアンネは十歳まで普通通りの成長をしていたが、急に体の発育が止まり、それ以来、肢体不自由の身となってしまったのである。

当時、義父は黒い森地方で牧師をしていたが、給料は低く、義母は教会の手伝いで忙しく、子供たちに栄養のある食物を十分に与えることができなかつた、と妻が語ったことが

あった。現代の医学だったら、姉の病は治っていたかもしれないともつけ加えた。

アンネは、体の発達には支障があったが、頭の働きは正常だった。本を読むことが好きだった彼女は、学校を卒業してから出版社で働くようになった。しかし、体の痛みと車椅子に乗っての仕事だったので、長く続けることができなかったようだ。

妻が話すには、姉はユーモアに長じていて、スピネット（チェンバロのような楽器）を弾き、きょうだいの仲はとても良かったと。義母は時間のあるかぎり、アンネをよく見ていたようだ。

そのアンネの友人に、ヘルガという女友だちがいて、しばしばアンネのところに来て、家族同様のつき合いをしていた。アンネが亡くなったあとも、そのつき合いは変わらなかった。独身のヘルガは今も妻たちのきょうだいの誕生日には必ず招かれ、私たちの家にも一か月に一回は来ては、食事を共にする。

先日も彼女が訪れてきた。挨拶の握手を交わしてから、夕食作りのためにキッチンに立った。ヘルガと妻の笑い声が、居間から聞こえてくる。三十分ほどすると、ヘルガがキッチンに入って来た。

「いい匂いがしてきたわ。ヒデジの作ったものは、何でもおいしいわ」

そう言いながら、彼女は私の手の動きを見ていた。

醤油と酒に浸けた豚肉を、フライパンで炒めたピーマン、にんじん、椎茸、たまねぎ、竹の子などに加えると、ヘルガは何の料理かわかっているようで、

「このお肉の味がいいのよ」

と声を出し、最近過ごした日々のことを話し出した。同様に私も家族と一緒に過ごしたことを語った。酔の香りのする中での歓談である。

キッチンでの会話は、より一段と楽しいものがある。特に、ヘルガは何でも思っていることを素直に口に出し、相手を思いやる人でもあった。そのようなこともあってか、体型が妻と似ている彼女は、自分の靴や衣類をよく妻に渡していた。また、ミヒヤエルの誕生日には、必ずケーキを作って持ってくるのだった。

夕餉となった。私と妻とヘルガは目の前に置かれてある酢豚を食べながら、途切れることがない会話に興じていた。

その夕食も終わり、また、いつものようにゲームとなった。マージャンに似たゲームが好きな三人は、時間を忘れての遊びとなった。気がつくとき十時過ぎである。バスに乗り遅れないように、ヘルガは帰り支度をして、妻と一緒にバス停へ向かった。

私は居間で一人、ソファアに腰かけていた。と、二日前に日本から届いた手紙に書かれてあった言葉が、ふと浮かんで来た。

そこには、「本立而道生」（論語学而第一より）と書かれてあった。この本（もと）という語、私は「まごころ」ということを見出したのだった。

それは、あらゆる人が日常生活の中で具現しているこうとするものだろう。先ほどまで話をしてきたヘルガから「まごころ」を感じたし、それが私たち家族との溶け合う交流の基ともいえるのだ。

「本立ちて道生ず」

胸に深く沁みる言葉だ。尚、この本（もと）は私の勝手な解釈。

## 百歳の秘訣

背中が弓状に曲がり、背丈一メートルとなったベラおばさんの掌を握りながら、濡れた歩道を歩き出した。路面がとても滑りやすい。慎重に足を運び、玄関先から百メートル先の駐車場まで行き、彼女を車に乗せてチュービンゲンへ走った。

助手席に座っているベラおばさんの横顔を見ながら、訊ねた。  
「半年ぶりですね。ごきげんはいかがですか」

「これ以上は、望めないほいいわよ」

ベラおばさんは、愛らしい笑顔を浮かべながら答えた。そのあと、ベラおばさんは二週間前に百歳になった知人の誕生日パーティーの様子について、生きいきとした声で語り出した。それを聴き、ベラおばさんに、

「あと二か月で、ベラおばさんも百歳になりますね。どこかで誕生日会を祝うのですか」と訊ねると、彼女は、

「わたしには子供も孫もいないので、皆を招くようなことはしないわ」と、手を横に振りながら答えた。

四十分ほど走って家に着くと、妻が門戸から出てきて、ベラおばさんを抱いた。二人は並ぶようにして、二階の居間へ向かった。

ベラおばさんは、かなり急な木の階段を妻の手をかりずにひとりで上って行く。この歳で凄いなと思うながら、その姿を見ていた。

居間に入ると、ちょうど十一時である。早速昼食を作るために、私はキッチンに立ち、食事の仕度に取りかかった。

妻とベラおばさんが会話している声が、居間から聞こえてくる。酒と醤油の中に浸けた肉に片栗粉をまんべんなくつけたあと、それを揚げ、炒めた野菜に入れた。一時間ほどで料理ができ上がった。

テーブルについたベラおばさんが、お皿に盛った料理を好奇心のある目で見た。

「これは、義母が最も好んでいた料理なのです。どうぞ食べてください」

「そうなの」

ベラおばさんはお祈りをしてから食べはじめた。

「肉がとてもいい味よ。何の肉？」

「ブタです。日本ではこの料理を酢豚と呼んでいます」

食べながらの歓談となった。ベラおばさんは、「おいしい、おいしい」と声を出しながら、ご飯と酢豚をお代わりする。

その食事も一時間でおわり、妻とベラおばさんは居間のソファアに腰かけて話をはじめた。私は隣の部屋で本を読み出した。時々ベラおばさんの「ホホホ」と笑う高い声が聞こえてくる。楽しそうな二人の会話だ。三十分ほどすると、妻がやって来た。

「ゲームをしましょうよ。ベラおばさんの好きなクロスワードを」

私たち三人はテーブルを囲んでゲームをすることになった。義母もそうだったが、ベラおばさんもゲームが好きだ。

三十分かけての一回戦がすむと、ベラおばさんが、「また、しまししょうよ」と誘ってく

る。

彼女は毎日、スドクをしているせいか、頭の働きに衰えはない。驚くほどに、ゲームが上手だ。

それが終わると、妻が午前中につったりんごパイとコーヒーのおやつ時間となった。

コーヒーは三杯、パイは四切れを食べるベラおばさん。半年前にベラおばさんと一緒に中国料理店で食事をした際も、私と妻よりも多くの量を口に入れていたベラおばさんだった。とにかく、よく食べる。長生きの秘訣は食べることにあるのだろう、と思ってしまう。それによく話をする。自分のことばかりでなく、こちらが話すことに耳を立てるのである。好奇心の強いベラおばさんだ。

間もなく百歳になるベラおばさんは、今でも近くのスーパーに、自分の好きなものを食べたいために、一人で買い物に出かける。補聴器をしていない。メガネなしで新聞の活字を読む。私たちに、「最高の気分よ」と言うベラおばさんである。

夕方の六時過ぎ、ベラおばさんを車に乗せ、彼女の家へ向かった。助手席のベラおばさんは、まったく疲れを知らないかのようによく話をする。今を生きている人だ。

## 何が大切か

ドイツに住むようになって、二十四年が過ぎようとしている。その間に、様々な体験をしてきた。その中でも誕生日会に出るたびに、この地で暮らしている人たちの生きる姿勢を感じとったりする。先日も、それを味わった。

テュービンゲンから車で三十分走って、義兄宅にちょうど十二時に到着する。私たち家族は、玄関先まで出てきたクリスタと、頬と頬を合わせたの挨拶してから家の中に入った。

居間のソファーには、すでももう一人の義兄夫妻とクリスタの友人が座って話をしていて。その輪に、私たちも加わった。三十分近く雑談をしてから、長方形のテーブルに全員八人が座っての昼食となった。

六九歳になったばかりのクリスタが、

「今日はわたしの誕生日、まず歌から始まってほしいわ」

と言ったのを聞き、私たちは四グループにわかれて感謝の祈りの歌を唄い出した。

皆音楽好きな人たちなので、美しいコーラスとなっていた。一回では物足りなく、三回ほど続けることになった。クリスタの血色ない頬が赤みを帯び、よろこびに満ちた顔となった。

彼女は三年前に腎臓移植手術をうけ、今でも毎食後に六種類の薬を服さないといけない。彼女が作った料理を前にして、私たちは食べはじめた。毎回そうなのだが、**クリスタ**の作ったものは実に優しい味がする。私のために、ライスが必ずつき、それにミヒヤエルも私と同様にミルクアレルギーなのを知っているので、バターやミルクを決してつかわない料理である。

お皿に盛ったものを口に入れながら、それぞれが身近に起こった出来事などをしゃべりながらの昼食となっていた。会話は途切れることなく、一時間半が過ぎ、食後はコーヒ

ー、紅茶を飲んでの歓談となった。

それが終わると、皆でゲームをすることになった。もちろん、ミヒヤエルも参加してニコニコ顔である。熱が入る私たち。ミヒヤエルを除いて、六十代から七十代前半の人たちが真剣に遊ぶのである。ゲームをしながら、冗談を言いあいながらの会話も楽しいものだ。

そのゲームが終ると、もう五時過ぎ。今度は、クリスタが作ったりんごパイを食べることになった。私たちは再びテーブルを囲んでの時間となった。ふと、クリスタが市民大学の絵コースで教えていた高齢者二人が、立て続けに亡くなったことを話し出した。それを、私たちは静かに聴いていた。

話の最後にクリスタが、「じゅんばんね」と言ったことが私の心に響いた。それは皆も同じようで、少しの間、静まり返った。でも、それは明日へ続く明るい声のように、私には思えた。というのも、このように病気の身でも耐えながら私たちを接待し、年に一回しかないかけがえのない自分の誕生日を祝い、そこに未来を感じたからだった。

今を主体的に生きるクリスタはすばらしい。自分の存在をかけている姿だ。どんな時でも、自分をすべて出して生きていけば、明日は明るいのだ。その彼女が数か月前に電話で私に、「何が大切かを、よく考えることよ」と言ったことがあった。

彼女の誕生日会に出て、再び学んだようになった。常に自分のすべてを出して、今を生きていかなければ。そこには、希望があるからだ。

## 駅ミツシヨンの人たち

夜の十一時になっても、チュービンゲン駅の職場から妻が戻ってこない。遅番の際<sup>際</sup>は、九時までに帰宅しているのに、どうしたのだろう。心配になったので、彼女の職場へ行くとした。と、その時、玄関で音がした。帰ってきたらしい。

出迎えに行くと、妻の側に、黒いストッキングに超ミニスカートを身につけ、甘酸っぱい香水を漂わせている一人の女性が立っていた。妻にもこのような友人がいたのかと一瞬、戸惑いながらその女性を見た。

居間に入り、三人で暖かいスープを飲みながら話しているうちに、次のようなことがわかった。

妻が仕事を終える八時頃、その女性が駅舎内にある駅ミツシヨン室に来て、今夜泊まるどころを見つけてほしいと頼んだようだ。そこで、妻は社会福祉的な宿泊所にくつも電話して探したのだが、警察の刑務室以外に泊まる場所がなかったようだ。勿論、市内のホテルに空き室はあったが、そこに泊るだけのお金を、その女性は持っていなかったのである。

三十半ばらしきこの女性、旧東ドイツの地から夫と二人でこちら西側へ来て、夫は職を得て働くようになったが、一年後には失業となってしまい、毎日アルコールを飲み、借金を抱えるようになってしまい、妻に暴力を奮うようになってしまった。そこで、夫と別れて、今は一人で暮らしていると語った。

小さな子供が二人いて、その子供たちは祖父母と一緒に暮らしているらしい。子供の写真を大きなプラスチック袋から取り出して、私たちに見せる際の表情は穏やかになるが、



それ以外は神経が高ぶっているのか、落ち着きがない。

薄い栗色のモジャモジャした髪に、汚れがあるのかないのかわからない黒いセーターを着たこの女性、香水がきついせいか、話をしていると、こちらが咳つぽくなってくる。えらい人が来たものだと思いつながら、話を聴いていた。

今日はとりあえず、私たちの家に泊ることになった。予備のベッドがなかったので、居間のソファアーの上で寝てもらうことになった。

翌朝、シートと蒲団を異常なほどきれいにたたんで、ソファアーの上に座っていた。朝食を摂ったあと、彼女は妻の勧めで町の社会事務所へ行くことになった。

それから三か月して、その女性から、「職場も見つかり、今は大衆レストランで働いています」と書かれた葉書が家に届いた。それを読み、妻はよろこんだ顔を浮かべた。

以上は、妻の仕事から生じた一つの出来事であった。その仕事とは、駅構内で助けを必要としている高齢者やハンディのある人たちに手を貸したり、カバンを持ってあげたりすることが勤務である。その他にも、ホームレスの人やお腹を空かしている人に、駅ミッシヨン室でスープやコーヒーなども出したりする。とにかく、駅構内にいる困った人たちを援助、世話するのが妻の務めである。

この駅ミッシヨンはドイツ国内の駅七十五箇所にあつて、約千五百名の人たちが働いている。大きな駅には、宿泊所も設備されてあつて、最終電車に乗り遅れた人や、事情があつて駅で一夜を過ごさなければならぬ人も泊まれるようになっていて。なかなか変化に富んだ仕事内容だ。

日本の駅には、このような活動をしている職場はないように思う。運営はキリスト教組織団体である。テュービンゲン駅ミッシヨンには、職員二名、ボランティア五名の人たちがいて、年間延べ約二十万人以上の人たちを援助している。

職場から家に戻ると、妻は今日の一日の出来事などをよく話す。その時の目は、いつも輝いている。その様子から、生きいきと働いていることがわかるのである。

この仕事、事務所に座つて困つた人が来るのを待つというのでなく、自分たちから困つた人を探し出し、あたたかい手を差し伸べるのである。「あなたを助けることができますか」と。

## ベルニングさん

図書館のカウンターで、本の貸し出しの手続きをしていると、八十六歳になるベルニングさんが手を挙げて、ニコニコしながらゆっくりとこちらに近づいて来た。

「暫く会っていなかったもので、どうしているかと思つていたぞ」

「ここ三週間ほど、お会いしていませんでしたね」

そう言つて、私はベルニングさんの柔らかい手を握つた。片方の手にはベートーベンのカセットテープ二本とカルメンのビデオフィルムがあつた。

「それを観るのですか」

「わたしはオペラも好きだ。特に、カルメンの曲は気に入っている」

青い瞳を輝かし、微笑みながら踊る真似をした八十六歳のベルニングさん。私たちは暫

く立ち話をしてから別れた。

そのベルニングさんと初めて会ったのは、私が週に一回通っている街の室内プール場だった。毎火曜日は温水の日なこともあって、多くの高齢者が泳ぎに来る。八割以上が七十代以上の人。九十二歳の人もいる。ベルニングさんも必ず来ていた。

一人住まいのベルニングさんは音楽好きで、左手は絶えずケイレンしているが、ピアノは上手に弾くことができる。それに現役時代はジャーナリストだったせいか、今でも時事問題に強い関心を持ち続け、ユーモアを交えてよく話をする。日本にも興味を示し、私と会うたびに日本語の新たな単語を言う。

そのようなベルニングさんの姿を目にしていると、この人は年をとっても、精神というか、知性は後退していないと思ったりする。ただ、最近耳は遠くなってきたようで、補聴器を使用するようになってきた。でも、そのようになって、

「この補聴器のおかげで外を歩いても、車のうるさい音を調節できるので、よいものだ。ありがたい」

と先日私たちの家に来て、コーヒーを飲みながら語った。マイナスのことを、プラスに転じてしまう人でもある。

話す時は、いつも力強い口調で語り、ゲータやシラーやニーチェなどの名が口からスラスラと出て、哲学と文学にも強い関心をもっている。若い頃に、いや若い時分に限らず、今も自分で自分自身を発見しようとしている人は、年を重ねても退屈しないのだろうかと思ってしまう。

毎日小さなナップサックを背負って、杖をつかずに買い物や散歩に出かけているベルニングさん。近くに一人娘が住んでいる。その家族と毎土曜日は必ず会っている。

八年前に奥さんを亡くしてから、一人で暮らしているベルニングさんが言うには「自分が動けなくなったら、介護保険があるし、娘はその情報を詳しく話してくれたので、心配はしていない」と。とにかく、この人と話をしていると、常に前向きに生きている姿勢を感じる。キリスト教の神のことは語らず、自分は無神論者だと言い、よく宇宙の偉大さの話私に語ってくれる。

山歩きが好きで、昔は妻と一緒にチロルの山によく登ったと話をしてくれたこともあった。二年前には、一人で南チロルに行き、ペンションの階段から足を滑らし、一週間現地の病院で入院していたとも語った。それを聴き、

「いつか、一緒に山へ行きたいですね」

と誘いの言葉をかけると、うれしそうな顔をして肯いてくれた。

ベルニングさんは知人以上の人だ。妻が言うには、「あなたの友人でしょ」と。このとき、ふと思った。友人とは？ 確かに、お互い家に招待したりしての交際を、七年間続けている。そのようなことをしながら、新たなベルニングさんを会うたびに発見する。と、そのことは、新たな自分を発見することにもなるのだった。

私たちは会うのが、楽しみになっている。そこには、お互いが相手を思いやる気持ちがあるように思う。しかし、友人となるには信頼関係がどうしても必要だろう。相手の苦しみを知らないで、また、自分の苦悩を告げないでそれは可能だろうか。ただ、今はベルニングさんとの関係を大切に行こう。

## 再会

予期もしない人から電話がかかってきた。その声に驚くと同時に、よろこびが走った。あのペーターからだ。彼と奥さんが二週間したら、訪れて来るとの知らせであった。その日がくるのを、私は首を長くして待った。

ペーターがそろそろ現われる時間だと思い、通りに面した三階窓から何度も下をのぞくが、二人の姿はまだない。三十分が過ぎても、呼び鈴は鳴らない。待った。

十一時四十五分、インターホンを通して、ペーターの声が聞こえてくる。直ぐに玄関先に出て、ペーターと彼の奥さんと握手を交わし、二人を家に招き入れた。

居間に入ると、妻が台所から出て来て、よろこびの声を上げながらペーターの肩を抱いた。ペーターは、私と妻がチュービンゲン市庁舎の戸籍係り前で結婚式を挙げた際の立会人の一人でもあった。彼と会うのは、三十数年ぶりである。

ソファアに腰かけたペーター夫妻を前にしながら話をしていると、当時のことが鮮明に浮かんでくる。

日本の大学を休学して、欧米に一年間滞在したことがあった。ドイツでは、十歳年上だったペーターの両親宅で半年近く住んでいて、ギターを上手に弾くペーターに連れられて、若者のパーティにしばしば行ったり、彼の家の庭仕事をしたりしたこともあった。それに、彼の口利きで、近くの木工所で働くこともできるようにもなった。その時に貯めたお金で登山用品を揃え、チロルやスイスの山々にも登ったのだ。

一時間ほどの歓談をしてから、昼食の時間となった。ここでも、「ヒデジ」「ペーター」と呼び合いながらの時間となっていた。お皿に残った最後の一滴をスプーンで上手にすくうペーターの動作は、昔のままだ。後片付けの時も、私がお皿を両手に持って台所へ行くこうとすると、ドアを開けてくれるペーター。優しさも、昔のままだ。

昼食後、皆で旧市街を散策することになった。髪の毛は薄くなり、六十八歳になったペーターの後ろ姿は、やはり年月が経ったのを知る。が、今も自分が経営する建築事務所で働いている彼でもあった。

若い頃、アジアと北米・南米をリュック一つで二年半かけて歩き廻った大冒険家のペーター。その姿をみて、私もヨーロッパと米国、それにメキシコの地まで歩いたが、南米には足を踏み入れることができずに終ってしまった。

私たちは、当時のことを話しながら家に戻った。そのあと、コーヒーを前にして、ペーターの奥さんが作ったケーキを食べながらの楽しいひと時となった。

別れの時刻となった。私が、

「次は、ペーターの家へ遊びに行くから」

と言うと、二人ともよろこんだ顔を浮かべてくれる。春になったら、ペーターの住むところへ訪れよう。彼との物語がまだまだ続くのがうれしい。ここにも、私の辿った歴史があるのだ。それを大切にしよう。

## ロマの子供たち

街一番大きなスーパーマーケットから出ようとすると、すれ違いに黒髪の茶色の肌をした十四歳ぐらいの少年二人が入って来た。と、どこからか、「チゴイナー」の声が飛んだ。その方に視線を向けると、明るい髪をした同年齢ぐらいの少年三人と少女一人が立っていた。

チゴイナーと呼ばれた二人が、ツカツカとその四人の前に歩み寄り、一人の少年の胸元を掴んで何かを言い放った。

六、七メートル離れたところにいた私だったので、その言葉を聞き取ることはできなかった。が、怒っていることは、その素振りで見ることができた。これはと思い、殴り合いの喧嘩になるかと一瞬、息を飲んだ。

現在ドイツには、チゴイナーと呼ばれているシンチ・ロマ民族の人たち約十万人が住んでいる。彼らはチゴイナー（ジプシー）と呼ばれることを極端に嫌がっている。なぜなら、その語はドイツ語で詐欺師、盗っ人を意味しているからだ。

彼らロマ民族（ロマはサンスクリット語で人間の意味）の悲しい歴史を知ればしるほど、胸が詰まってくる。インド北西地域に住んでいた彼らは、九、十世紀の頃、イスラム教の征服者によって、ルーマニアや旧ユーゴスラビア、それにトルコなどのバルカン地域へ大量に連れさられ、奴隷として売られるようになった。彼らは、贈与品として扱われ、国王や教会や地主などに分配されていたのである。

奴隷の身となった彼らは、職業も住居も自由に選ぶことはできなかった。また、結婚も主人の許可が必要だった。加え、些細な理由でムチに打たれ、殺害されたりもした。そのようなことが、一八六四年まで続いていたのである。

彼らが奴隷制度から解放される唯一の道は、逃亡だった。森の中に隠れ、最低の暮らしをしながらの流浪生活だった。その彼らにとって、真に意味のある逃亡は、奴隷制度がなくなっていたドイツやフランスやスペインなどの西ヨーロッパへ行くことだった。だが、そこでも彼らは抑圧と迫害に遭っていた。

その例として、ドイツでは、一四一六年ロマに関する特別法が制定され、また、一五〇〇年には、マクシミリアン皇帝の命令で、ドイツに住んでいるロマの人たちは、国外退去となってしまうたのである。

法の前でも、彼らはドイツ市民と対等ではなく、差別された法を適用されていたのだ。さらに一八九九年には、彼らを把握、監視するための特別警察部門が設けられ、それが撤廃されたのは一九八二年のことだった。

ナチの時代も、彼らは酷い迫害に遭った。ロウマの親たちは子を教育する能力がないものとされ、子供は施設に預けられ、家族はバラバラになってしまった。また、子孫を残さないように、数千人が強制不妊手術を強いられ、多くの人たちが家畜小屋に押し込まれ、アウシュビッツなどで殺害された数は五〇万にも及んだ。

戦後もその歴史は続き、彼らと一緒に暮らすのを嫌うドイツ人は多い。理由は、社会の片隅で暮らす彼らには、いつも犯罪がついてまわるからというものだった。とにかく、ロマ民族はヨーロッパでは少数者として見られ、一つの国から他の国へと追放されていたのだ。

しかし、一九八一年ヨーロッパ会議の中で、国も故郷もないロウマ千二百万人が今住んでいる国々（主に東欧に多く、スペインには五十万人）で、保障されながら暮らしているようにとの声明を出した。

その翌年、ドイツ政府はナチ時代にロウマ人を大量殺戮したと公式に言明し、一九九七年からは、彼らを少数民族として正式に認めるようになった。が、それでも多くのドイツ人は、今でも彼らと同じ屋根の下に住みたくないと言語。

これは今までの偏見と先入観が、そのような数字をもたらしたともいえるだろう。その偏見をなくそうと、最近では市民大学などでロマの歴史を知らせたりする活動が始まるようになった。また、子供たちには、学校以外でも、お互いが出会う場を設けられるようにと推進されるようになった。が、それでも、先のような光景が生じるのだった。

さいわい、「チゴイナー」と発した四人の少年少女たちは、すぐに謝ったから暴力沙汰に至らないで済んだが。もしその四人が、ロマの子供たちがドイツ人に請願した、次の内容を知っていたら、「チゴイナー」などとは呼ばなかっただろう。

- ・ぼくたちもほかの子供のように、読み書きができる権利を持ちたい。
- ・すきま風が入らない、寒さもない、雨漏りもしない家に住みたい。
- ・ぬかるみやゴミ捨て場ではない、自由に遊べる場がほしい。
- ・人がぼくたちを見て、「あれがロマだ！」と後ろ指を指されたくない。
- ・ほかの子供たちと、友達になりたい。
- ・警察官や政治家などによって、今の地から他のところへ追い立てられたくない。
- ・ドイツ人の子どものように、一度でいいから、「消防士になるのだ」「女医や警察官や看護師やエンジニアになるのだ」と言いたい。
- ・ドイツで生まれているので、ここを故郷としたい。

（一九九一年プロテスト教会の大会から）

このロマの人たちの問題は他人事ではなく、差別とは、区別とは何かを考えさせられる。長くこの地に住んでいる私だが、ドイツ人とは違う自分を見出すことが多い。それを誇りにしているところもある。その私に、誰かが、もし軽蔑を含んだ差別した目で、「へい、日本人！」と呼んだら、悲しくなる。

社会の中で暮らしている私たちなので、区別はどうしても残るだろう。でも、相手の身になって考える必要性はある。そのためにも、相手の歴史を知ることの大切さを痛感した。

## 地域の連帯性

### 分離しないように

二年前のことだった。ある本屋のショーウィンドーに、女性史に関する本が幾冊か並べ

られてあった。その中に興味を誘うようなものもあったので、店内に入ろうとした。と、女性店員に、

「ここは、男性禁止です」

と、断れられてしまった。

「エッ」

と、驚いた私は、

「ドイツの女性運動と、その歴史に関心があるのです。窓に並べられてある本を読みたいのですが、だめでしょうか」

と訊ねると、彼女は入口のドアに「ここは女性だけの本屋」と記された張り紙を指差した。仕方なく諦め、店内に入ることはできずに終わってしまった。その時、何か性差別をされたような嫌な気持ちを味わった。

このことにしろ、ハンディのある人や外国人や難民や浮浪者などへの差別にしろ、私たちの中で、なぜ差別意識なるものが生じるのだろうか。

自分とは違う異質なるものへの拒否。それが分離へと進み、差別する方向へと導くのではないだろうか。分離が差別を生むのだ。

この分離については、異国の地で主夫をしている私にとっては、切実なる問題でもあった。この地に住みはじめた頃、何とかここで根を下ろしていこうとして、地域の人たちと分離しないようにと心がけていた。通りで彼らと逢えば、話をしたり、家に招待したりして、知り合おうとした。

そのようなこともあってか、彼らとの会話の中で、私が「ガイジン（外人）」と言われたことはない。

妻が日本で八年間暮らしていた時、「外国人」ではなく、この「ガイジン」という言葉を、しばしば耳にしたようで、そのたびに彼女は、「響きがよくない語ね」と言っていたことを思い出す。確かにそうで、私もし面と向かって「日本人」と言われるのではなくて、「ガイジン」と言われたら、切ない気持ちになる。差別されているようで。

異国に長く住む人は、分離ではなく、その反対語の「共に」を自覚しながら暮らしている人も多くいるのではないだろうか。なぜなら、差別されたくないし、差別したくないからだ。

ネッカー川に沿って建つこの本屋、数週間前に一人の男性の姿を店内で見かけた。今は、私も入ることができるかも知れない。

## クレープの香り

日本から訪れて来た五名の人たちが、「テュービンゲンの高齢者ホームを見学したい」と希望したので、私の家から五分歩いたところに建つ市立の高齢者ホームを訪れることにした。

街の中でもひと際目立つ三階建てのホームで、屋根の上にはオレンジ色の時を告げる鐘がついていて、周囲には、レストラン、スーパーマーケット、パン屋、飲み屋、銀行、花屋などが並び、百メートル以内で、毎日の生活に必要なものはすべて揃う立地条件のよい

ところである。

約束した午前十時、門を潜り、ホームの玄関まで来ると、甘い匂いがしてくる。建物内に足を踏み入れると、車椅子に乗った何人かのお年寄りや職員らしき人がクレープを焼いていた。その彼らが、「いらしゃい」と声を出しながら、湯気の立っている美味しそうなクレープを私たち六名に手渡してくれる。頂くことになった。

それを口にしてしていると、園長らしき小柄な女性が私たちの前に現われた。私たちは彼女に連れられて、二階に住む一人のお年寄りの部屋に入った。

十二畳の広さに、子供が好みそうな家具と寝具などが置いてあった。五十代ぐらいの園長が、このことについて説明をはじめた。

「この部屋に住んでいる人は認知症で、子供時代の思い出が強く、行為も少女らしくなるのですよ。そのようなこともあって、彼女の幼年時代と同じような室内装飾にしています。このことは、非常に大切なことなのです。見慣れたものに囲まれていると、安心感が生じてきますからね。もちろん、このホームでは、自分が今まで使用してきた家具を持ってきていいのです」

園長に案内されて、私たちは幾つかの部屋を見て廻った。どこも広く、ほとんどが一人部屋であった。そのあと、廊下の少し窪んだところに置かれてあるソファアに腰かけて、園長の話の話を伺うことになった。

「このホームの住人四十八名は、ほとんどがこの地域に住んでいた人たちで、わたしもこの地で生まれ育ったのです。だから、顔なじみの人も多くいますよ。認知症の人も多くいますし、もちろん、このすべての住人は、死ぬまでここで介護されます。ここに勤めて十六年になりますが、今までに病院などへ移った例は数件だけでしたね」

彼女の言うことに、私たちは耳を傾け続けた。

「ここで暮らしている認知症の人は、家で過ごすよりも、ここにいたほうが長く生きていられるでしょうね。二十年も住んでいる人もいますよ。家ではベッドから出ず、薬で精神を抑えるため、どうしても体も精神も退化しますからね。でも、ここでは、朝は必ずベッドから出しています。精神を鎮める薬を飲んでいる人は、ほとんどいません」

彼女はさらに続けた。

「住人の平均年齢は八十三歳で、認知症の人を含め、皆、毎日自分で活動的に過ごすようにいろいろなことに取りこんでいますよ。例えば、掃除や料理の手伝いや散歩や編み物など。それに、頭を働かせるように、子供時代の記憶を取り戻させる会話や記憶トレーニング、また、小グループによる話し合いなどもしていますよ。私たちの仕事は、住人一人ひとりの持つ能力を活動的にさせ、一人ひとりの欲求に適応することなのです。ここでは、自分のことはできるだけ自分でするようにして、おしめをしている人は三人だけです」

エネルギーシユに、語っていった。

「住人はよく買い物へ出かけ、お店の人とも話をして、ホーム外とのコンタクトもありますよ。また、裏庭は小学校の校庭ともなっているのです。一緒にボール蹴りする人もいますね。ただし、そのあとが大変で、ホームに戻ると、足が疲れ、マッサージをしなければなりません。でも、世代間の接触はいいものです。学校の倫理時間に先生と生徒たちが、このホームを訪れてきて、住民と話をしたり、また、そのことを学校に戻り、皆で討論したりしているようです。孤立して外とのコンタクトがないと、心理的高齢症にな

つてしまいますからね。とにかくここは、地域に密着したホームなのです」

彼女は、最後の言葉に力を込めて言った。

「私たち職員は、この住人とパートナーシップを築くことが大切なのです。そのためには、住人の生活満足度と職員の仕事満足度が前提条件ですね。とにかく、職員は動機づけと責任を意識しながら、住人とチームを組むようにして働くべきでしょうね。お互いがパートナーとなるように。私たちの目的は今までのように綺麗で清潔に世話をすることではなく、ホームの住人ができるだけ多くのことを、自分でできるように援助することにあるのですから」

顔を紅潮して語っている彼女の目は、輝いていた。

「現場で直接介護する職員は十二名、それ以外に十二名の人が料理や掃除や事務などをしていますよ。それに兵役の替わりに勤めている青年が三人いて、地域の青年たちもボランティア活動の一つとしてよく来ますよ。若い人のなかで、ここで暫く活動してから福祉関係の仕事に就いた人もいましたね」

彼女が話をしている間、数人のお年寄りたちが私たちの横を通ったり、何をしているかと窺うように寄ってくる。そうすると、彼女は必ずその人たちに声をかけていた。そのことを、「あなた方がここへ来て、彼らの目に見えるところで、話しをするのが大切なですよ」と言った。

私たちが座っている横には、ピアノが置いてあった。近くに住む音楽学生がピアノの練習のためにここへ来て、弾くとのこと。とにかく、自由で開放的なホームのように見えた。自由といえば、朝食時間は決まっておらず、それぞれが自由に七〜九時の間に摂るのである。

園長の話を聴いているばかりでなく、今度は私たちが質問をした。

「このホームに住んでいるお年寄りは、どの程度、家族とコンタクトをとっていますか」  
「それは様々ですね。月に一回は家族の人たちが集まる日があって、多くの人が出席しますよ。それもほとんどの人がこの地域に住んでいるから来られるでしょうが。家族の人には、このホームの鍵を渡してありますし」

「朝七〜九時の間に、それぞれが自由に朝食を摂るとのことですが、職員の数が多くもないのに、よくそれができますね」

「ここは住人の住まいなのであって、彼らの個を大切にしなければなりません。例えば、犬にそこに座っていなさいと言うと、犬は座っているでしょうが、その関係は強い人間と弱い人間との関係です。このホームでは、住人と職員との関係がそのようであってはなりません。朝食を摂りたくない人は抜かしてもよいし、その代わり、あとで簡単な飲み物や食べ物をすすめています。難しいけれども、そうしています」

「職員は精神的にも肉体的にも、大変だと想像しますが、あなたが特に職員に期待するのは何ですか」

「そうですね。幾つもありますが、親は子供を愛しますよね。私たち職員も親のようになって、住人を愛することかしら」

「このホームでは、認知症の人たちに、独自の介護方法をしているように見えるのですが、それは以前からもそうなのですか」

「ここでは、一九八六年に認知症の高齢者を正しく扱おうとする新しい考えが導入されました。それは、わたしと職員とが独自に作り上げたものなのです。このホームに住むだけ



もが気品のある晩年を、過ごすことができるようにしたいのです。ここが彼らのふるさとなるように」

園長は熱気をこめて語った。その彼女に、私が訊いた。

「このホームは出入りが自由なので、住民が勝手に外に出て、道に迷ったりして、帰って来ないときがあるのではないですか」

「そのようなこともごく稀にありますよ。ただ、ここでは、ホームと今まで住んでいた家とを、職員と一緒に百回以上も歩いて往復しますね。そうすると、それ以外の道は行かなくなるのです。それに買い物に行つて、帰りにビールなどを飲んで戻つて来る人もいますね。そのほかに、毎日繰り返し同じ店へ行つたりする人もいますよ。その人は若いときからそのお店へ買い物に行つていたこともあつて、店員はその人が認知症と知っているので、理解を持つて対応してくれているのです」

「認知症の人たちに、精神を鎮める薬を飲ませないとのことですが、お医者さんとの関係はどうなっているのですか」

「ドイツの高齢者ホームに住む人は、それぞれ若いときから自分のホームドクターがいて、私たちはそのドクター一人ひとりと話し合い、受動的にさせるような薬を与えないことにしているのです。ドクターたちは協力的で、以前よりもコンタクトが多くなつたとも言えるでしょうね」

「このホームは、だれでも入れるのですか」

「ええ、この地域に住んでいる人ならどなたでも入居可能ですよ。ホームレスだった人も三人いますし、あなたの知り合いのトーマスもいますよ。このホームはどちらかというと、下町の中流以下の人が多く、以前農業や手仕事をしてきた人が多いのです。一般的な老人ホームは八十パーセントが女性なのですが、ここは三分の一が男性です。少し例外でしょうね。それと、ここではデイケアの枠が十名あつて、家族の人が朝お年寄りをここに連れてきて、夕方に迎えに来たりしますよ。また、二か月間の短期滞在、それに近くに住む高齢者五人までは、ここで食事を摂ることができます」

園長の説明が終わつてから、彼女に連れられて、私たちは再びホーム内を見て廻つた。十六世紀に造られた建物だけに天井は高く、広い空間だが、どこもあたたかい雰囲気を感じさせるような飾り付けがなされ、職員の工夫が窺えた。

ちようど、十二時の鐘が鳴り響いた。食堂で、園長とここに住む人たちと一緒に昼食を摂ることになった。食堂内は明るく、大きな窓からは通りを歩いている人の姿がよく見え、それに料理の味がとてもよいのである。

私たちは見学を終え、園長にお礼をのべてから外に出ようとすると、玄関口で、再び甘いクレープの匂いが漂ってくる。また、頂くことになった。と、その時、ホームの屋根上の鐘が一時を打った。

その鐘の音は、この地域に住むあなた方がどのような状態になろうとも、お世話しますよと告げているように思えた。

## 弱くなつていく

毎日の新聞の中で、暴力による記事が載っていない日はない。例えば、学校や家庭や職場、それに路上や政治などで起こっている。特に、日常目立つのは、女性、子供、外国人、ハンディのある人、高齢者への暴力だ。

ここテュービンゲンでも、それは例外ではない。そのようなこともあって、ここ数年来、多くの場で暴力行為についての話し合いがよくされるようになった。先日は『高齢者と暴力』というテーマの講演が街の高齢者センターで開かれたので、私と妻は聴きに行った。まず、家で世話をしている介護士が話し出した。

「年間に十四万人以上の女性と子供、それに高齢者と障がいのある人が、家のなかで肉体的暴力（虐待）を受けているとされています。そのなかでも最も起こりやすいのは、お年寄りへの虐待です。ただ、高齢者への虐待といっても様々で、会話もせずに栄養も考えないでほったらかしにする介護放棄的なものから、高齢者ホームに入れるぞと脅かしたりする心理的虐待、それに叩いたり、つねったりしてベッドに縛りつけたりする肉体的虐待などがあります。家庭にいるお年寄りの三人のうち、一人は何らかの形で虐待を受けているとされています」

一般的なことをのべてから、彼女は介護をしていると、なぜ攻撃的行為（暴力）が生じてくるのかについても語った。

「介護を続けることによる疲労と過大な精神的負担、それに加え、これから先どうなるかの展望がたたたず、介護している人はフラストレーションが溜まり、それが怒りと腹立たしい気持ちを生じさせ、攻撃的行為となって出てくるのです。その行為によって、その人は欲求不満が一時おさまりませんが、また、次の行為まで蓄積されていくのです。そのようなことを平均して六年間繰り返していると、介護している人は、うつ状態になる可能性があります。まして、家が狭く、お客を招き入れるような場もないならば、家族は孤立してしまいます。そのうえ、子供やパートナーとの日常生活での衝突も多くなり、家族のなかでの人間関係が不和になりがちです。それと、子供が若い頃、親から受けた虐待の報復として、弱ってきた親に、幾つかの条件が重なって攻撃的になる場合もあります」

今度は反対に、高齢者からの虐待についても触れた。

「お年寄りの攻撃的行為は、彼らの持つ欲求不満や侮辱や屈辱や不安などが統合した形で起こります。また、自分の感情を思いどおりに伝えることができない結果、暴力行為を自然と身につけてしまうケースもあるのです。叫んだり、叱ったり、辱めるなどの（暴力）行為を相手にだけでなく、自分自身にとる人もいます。もし高齢者が急に著しく攻撃的になってきたら、脳の器質的影響も多いので、まず薬による副作用のことも十分に考える必要があります。また、嫉妬や侮辱や孤独や死の不安、それと高齢者ホームに入れられてしまうような心理的不安から攻撃的になってしまうこともあるのです」

彼女は、さらに続けた。

「お年寄りを在宅で介護しているのは家族ばかりでなく、私たちのようなホームヘルパーもいます。私たちは専門知識を身につけていますが、とかくどのような問題も解決できると、学校で教えられている傾向にあります。そのことが過大負担となって、ストレスがたまり、自分自身がその問題に十分に対応できないことに責任を感じて、お年寄りに過大な要求をする場合もあるのです。私たちヘルパーも、弱くなっているのです」

介護専門の立場を省みながら、彼女は語った。

次は、高齢者ホームで働いている介護士の話となった。

「暴力行為自体、力の関係を示す場合も多いでしょう。公の場であるホームだからといって、虐待行為がないわけではないわけではありません。とりわけ、言葉による虐待が多く、職員とお年寄りとの対等な対話が少ないのです」

これから何を言うのか、耳を傾けた。

「例えば、あるお年寄りがいつもの座っていた椅子から立ち上がって、歩き出したとします。すると、職員が、『どこへ行くこうとするの?』と問いかけます。そのお年寄りは、とっさに答えを出さなければならず、それもその職員が肯けるような答えを。しかし、そのように迅速に的を射た答えは、その人の口からはなかなか出てきません。すると、職員が、『どこかへ行くときは、目的を持ちつつ行くものですよ。そこに座っていないさい。そこがあなたの場所なのですよ』と言います。この職員は、そのお年寄りが転んではいけないとの配慮から、そう言ったのかも知れません。しかし、お年寄りに見れば、椅子から少し離れて、自分の静けさを求めて歩きたかったのかもしれない」

彼女は続けた。

「ここで言えることは、職員がそのお年寄りのところに行って、なぜ、その人が歩きたかったかを察し、一緒に歩いたり、又は数分間その人の側にいたりして、話をしなかったかです。話をしなくても、そばにいて共に静かに沈黙することによって、その人の気持ちを理解できたのではないのでしょうか。職員に、『なぜ、どうして?』と訊かれて、即座に、はつきりとのめを射た答えを出すお年寄りはそういないでしょう。この会話のなかに、力の差をうかがうことができます。この場合、顔と顔を合わせての対話が欠けていたのです」

これを聴き、顔と顔を合わせて話すということは、相手を重んじることなのだと思います。最後に、二人の介護士とも口を揃えて、

「介護は自分と相手との関係のなかでの行為です。もし暴力的行為が生じたなら、それを単に我慢しているだけではなく、その暴力行為を周りの人たちや仕事仲間と語り合うことです。もちろん、相手とも話し合い、自分の限界を知らせることも重要なことです。とにかく、介護が長く続き、休みなくケアをすればするほど、虐待行為が増してくる可能性もありますので気をつけてください」

と、私たち聴衆四十名を前にして語り、最後に、

「緊張やストレスなどを少しでもやわらげるためには、スポーツやダンスなどの運動がよいでしょう」

と言い、緊張をとる身近な動作を私たちに示した。それは、手に力を入れて強いこぶしをつくり、それをゆっくりと力を抜くようにしながら開いていく動作だった。

## 学び続ける性

先日、市民大学の講座に参加した際に、高齢者ホームで十八年以上働いているある女性介護士が語った内容が、私の耳に残り続けた。

「私たち介護士は毎日の介護のなかで、下着をおろし、お尻を拭き、局部にもクリームを塗るなどの、体に触れる任務をしています。おそらく、看護師もそうだと想像しますが、

その際に、性のいやらしい言動に程度の差はあれ不安（懸念）を持っていない人はいないでしょう。私が働きはじめた頃は、この性的なことについては独自の問題となることを避けるために、無意識のうちに巧みにかわして触れないようにしてきました。しかし、介護をしていると、性的なことを十分に知る必要性を感じ出したのです。この性に関しては一歩ひとり過去の経験が異なり、まして私自身も今までの自分の性を分析したこともないので、どこから手をつけてよいのかわかりません。しかし、これをタブーとしてはいけな  
いでしよう」

彼女は話し続けた。

「人は高齢になっても、性的要求はあると私は思います。よく言われることは、若い夫婦や恋人同士は十分に満たされた性生活があつて、ずっと一緒に暮らしてきた夫婦は習慣となり、よるこびも落ち、生理的にも後退して、セックス要求を失い、最後には性生活が消えると。しかし、それは偏見であつて、高齢者も若い人と同様に性への欲求はあると思うのです。ただ、若いときのような行動的なりビビドの自然欲求ではなく、その人の過去を含めた全体の性欲求があるとわたしは見ています」

さらに続けた。

「若者志向の現代社会では、老いてからの性（セックス）は不作法で、少なくとも異常だとする見方がありますが、性（セックス）単に身体と生殖だけを意味しているのではないですし、そこにはその人が育ってきた文化と社会の規範のもとで一人ひとりが影響を受けてきたと思うのです。この問題は私たち一人ひとりの過去と、その人の国民性・歴史・文化とが複雑に交錯して、覆い隠されています。しかし、私たち介護士は人の体に触れているので、性的なことの問題は常時体験しています。これをタブーとしないで、皆で話し合うことが必要だと思っています」

この話を聴いて思ったことは、性（セックス）を語ることは自分自身の過去の経験をもとにして言うことにもなるし、性行動はプライベートな行動でもあるので、それを破るところに難しさがあるということ。しかし、彼女のように介護をしている人たちが、それで悩みや不安を持つようなら、語り合わなければならぬだろう。

彼女が言うように、性は年とともに質の変化が生じ、高齢になればなるほど、優しく柔らかくなっていくのだろうか。

それには毎日の生活の中で、パートナーと語り合い、心を尽くして一緒に歩いていくことが大切なのだろう。どうも一生涯、高齢になっても性を含めた愛は、学び続けなければならぬようだ。

## 女性を守るシエルター

男性から暴力をうけた女性たちが保護されるシエルターが、テュービンゲン市内には二か所ある。勿論、その場所は秘密で一般には公開されていない。また、電話帳にも載っていない。暴力を奮った男性が、追いかけてくるのを避けるためである。

先日、日本から来た二人のジャーナリストが、そのシエルターの家を見学したいと望んだのだが、それは無理なので、そこを仲介している相談所に訪れることにした。

約束した時間に行くと、二人の女性ソーシャルワーカーが待っていてくれた。まず、一般的な説明を聴くことになった。

世界で初めてシェルターが作られたのは、イギリスで一九七一年のこと。それ以後、アメリカやオランダに伝わり、ドイツでは一九七八年に第一号が誕生した。なぜ、シェルターが必要になったかという点、家庭内で身体的及び心理的に虐待された女性が、今まで住んでいた家を出て、直ぐに子供と一緒に住むところが必要だったからだ。

以上のようなことを、ソーシャルワーカーが話してくれた。そのあと、テュービンゲンのシェルターについて語り出した。

「一九八二年に二つのシェルターが設けられました。現在五十あるベッドは、いつも満床となっているために、さらに増やす予定でいます。運営は民間団体がして、市民から年に約七十五万円の募金の一つのシェルターに贈られてきます。しかし、これは全収入の二十分の一に過ぎません。スタート時点では、公的補助金はゼロだったのですが、今は公的機関からほぼ全額を得て、営われています」

彼女は、さらに続けた。

「一九九七年に、オーストリアとイギリスでは、家庭内暴力を奮った男性は、今まで住んでいた家を出て行かねばならぬ法律が制定されました。それによって、暴力を受けた女性は、自分の住んでいた家を出る必要はなくなりました。その結果、ウイーンでは八か月間だけでも、その法に適用した例は一三六五件ともなったのです」

私たちは、肯きながら聴いていた。

「シェルターでは、暴力を受けた女性とその子供を保護するだけではなく、離婚の手続きや就職先などのアフターケアもします。女性が一人で、子供と共に生きていけるよう働きかけているのです。しかし、それが十分にできない場合が多いです」

そう言うてから、彼女は小さなため息をついた。

「また、最近目立つことは、ドイツ人女性よりも外国人女性が多くなったことです。彼女たちは滞在許可の問題があります。それにドイツ語を十分に話すことができず、この社会制度も知りません。また、親戚や友人もいないので、より厳しいものがあるので」

今度はもう一人のソーシャルワーカーが、暴力を加える男性について語り出した。

「男たちはセラピーなどを受けても、短い期間は変化が見られるのですが、再び暴力を奮う確率が高いのです。それゆえ、暴力を受けた女性は、自分で独立して、自分の尊厳を身につけることがより大切となってくるのです」

彼女は、最後のところを力説した。

「私たちとコンタクトをもつには、直接本人が電話してくるか、又は病院か警察、それに牧師を通して、話がすすめられていきます」

二人のソーシャルワーカーは、さらに次のようなことも語った。

それはテュービンゲン市が二千部発行している赤い表紙の本のことだった。その本には、市内の女性に関する民間活動団体約百グループの住所、電話番号、それに活動目的が書かれてあって、キオスクでもどこでも一冊三百円で手に入れることができる。

それを聴いて、女性活動団体のネットワークの力強さを感じた。

このシェルター相談所を訪問した翌日、今度はテュービンゲン駅から百メートル離れた

女性専門の喫茶店に行った。ここも、シエルターと同様に一九八二年に設けられ、同性の悩みを語り合い、女性に関する情報交換や集会の場としても利用されているところである。女性だけしか入ることはできないのだが、今回は私ともう一人の男性は例外として許され、建物内に入った。

幾つもの部屋には、女性文学の本、ビリヤード、卓球台、ビデオ付きのテレビなどが置いてあって、週日の夜八時から深夜の0時まで女性たちに開放されている。ここも民間で活動しているが、建物の家賃と光熱費は市側が払っている。

シエルター事務所と女性専門の喫茶店を訪れて、それらの活動が、ドイツでは社会的事象として扱われ、公的なお金で運営されているのにハッとさせられた。

## 一枚の写真

エイズに感染した人たちが二十二人が描いた、絵の展示会が開かれているとの記事が新聞に載った。それを読み、隣の町ロッテンブルクの市庁舎へ向かった。

相当混雑しているだろうと想像しながら、支庁舎内の小ホールに入ったのだが、係りの人も見学者も誰一人としていない。会場は静まり返っているだけだった。

一枚一枚ゆっくりと見て廻っていると、どの絵も孤独、不安、絶望、隔離、差別などが表現されていて、胸に迫ってくるものばかりである。それら三十七点は三か月前から場所を移動して展示され、買うこともできるようになっていて、半分近くの絵はすでに売却済み印がついていた。

自然風景を描写した一枚の絵に、私の足がピタッと止まった。それをじっと眺め続けた。次の日、その絵を再び観たくなったので、また展示場に行った。と、昨日と同様に誰もいない。私の足はまた昨日と同様に、ある一枚の絵の前で止まった。暫く考えた末、まだ買い手のついてないその絵に印をつけた。一か月したら、家に届くだろう。

翌日もまた展示場へ出かけた。と、ネクタイ姿の身なりの整った人がソファア一人で腰かけていた。もしかして、この催し物の関係者かと思つて声をかけた。少し話をしていくうちにわかったのは、この人はこの町の市長だったのである。彼に訊ねた。

「この展示会の係りの人に会いたいのですが、可能でしょうか」

「少し待っていて下さい」

市長は小ホールから出ていき、一分もしないうちに戻ってきた。

「この展示会を催した牧師に電話をしましたので、少ししたら彼が来るでしょう」

にっこりとした顔で言った。十分ほどすると、黒いズボンに白いワイシャツ姿の人が現われた。その方から絵についての説明を聴くことになった。

牧師はテュービンゲンのエイズ患者についても触れた。人口八万人のテュービンゲンには、現在エイズ患者とその感染者は十五名いて、彼らは市内の家二軒を借りて共同で暮らしていたり、病院で過ごしたりしていると語った。また、市内には、エイズ関係者のカフェ店もあると話してくれた。

別れ際、牧師から小冊子をいただく。そこには、次のようなインタビュー記事が載っていた。

（男性のカステインは、二年前にエイズ感染者と判明されて、現在は学生の恋人レギーナと一緒に市内で暮らしている）

カステイン

毎日新鮮な空気を吸って、散歩や体力トレーニングもしているし、一般の人とまったく同じような生活をしているよ。

レギーナ

彼がエイズ感染者だと、最初から知っていたわ。もしそうでなかったら、私たちの関係は続いていたでしょう。もちろん、最初からかなりの不安はあったわ。彼はそれを理解していたし、そのことについて語り合ったりもしたわ。

彼と初めて寝るまでには、コンドームをしたにもかかわらず、かなりの時間が必要だったわ。彼はセックスを決して強制しなかったし、わたしに感染させないようにとの配慮は、わたしよりもはるかに持っていたわ。

カステイン

友人や親しい知人や親戚の人たちには、ボクがエイズ感染者であることを知らせているよ。今、住んでいるところの隣人たちにも、ボクがエイズ感染者であることを知らせているね。そのことによって、近所の人が心構えを持って、ボクに近づいてくれることを望んでいるからなのだ。

最近では、隣の子供ともしばしば遊ぶし、その子を抱いても親たちは反対はしない。とにかく、ボクに最初に近づく人には、自分がエイズ感染者であると知らせているね。そうすると、ほとんどの人は驚き、不安を抱くが、ボクは直接、伝えるようにしているよ。

レギーナ

わたしの母は、彼がエイズ感染者と知ったときは愕いたわ。彼の涙から、エイズウイルスが体内に入って感染すると思っていたみたい。とにかく彼との関係を止めるように、長い間試みていたわ。母は、わたしの生命を心配していたのね。もちろん、その危険はあったわ。たとえコンドームをしていても、それが一度でも漏れたりすれば…。

でも、私たちは明日、車の事故に遭って死ぬかも知れないし、それもまた生命の危険でしょ。わたしは、自分が車を安全運転するように、エイズについても十分な責任を持ちながら関わり合っているわ。

カステイン

ボクたちは真実を語り合うことによって、平易に暮らしているよ。病気を隠したり、秘密にしたりしている人は、そのことによって、より困難な生活を引き込んでしまうからね。

絶えず自分の前にある死との生活で、もうそれだけで十分だよ。知人が先週亡くなってしまうた。彼は、自分がエイズ患者であることを人に知らせて、差別されることを恐れていたね。確かに、すべての人に寛容があるわけではない。しかし、ボクは人には事実を事実として、言うことにしているのだ。

もし自分に子供がいて、その子がある年齢に達したら、父親の病気について知るだろう。その子は毎日の生活のなかで、何か変だと感じているものだよ。仮にその子が偶然に他の人から、父親の病気を聞き知ったら、私への信頼は消えてしまうだろう。なぜ、嘘や偽りを言わなければならないのだ。死に至るまで、秘密によって自分自身を苦しめたくはないのだ」

二人のインタビュー文はさらに続き、その中でカステインは語っていた。

「唇を切ったので医者のところに行くと、『ここでは、その唇の傷の治療はしない』と言われ、追い返された。エイズが死に至る隔離的な病気ではなく、一般的な治療ができる病気になる日を、一日でも早く来てほしいと切に願うのだ」と。

この絵画展から三週間過ぎたある日、絵を描いた人の妹さんからの手紙が、家に届いた。そこには、

「姉は逝ってしまいました。姉の描いた絵を自分の部屋にかけておきたいのです。よろしいでしょうか」

と、綴られてあった。

「勿論、そうしてください」

と、返事を書いた。それから二週間して、その絵を撮った一枚の写真が私の手元に届いた。

## 命をかけて

「だれかが、最後にそれを言わなければならなかったのよ。私たちが訴えたことは、多くの人がそう思っているわ。ただ、それを口に出すことができなかったわ」

これは、ソフィー・シヨル（二十二歳）が一九四三年二月二日、裁判官の前で語った言葉である。どのような判決が下るかを知ったうえでこの供述だった。

それからわずか数時間後、ソフィーは兄ハンスと友人のプロプストと共に、ギロチンにかけられてしまったのである。

シヨル兄妹の名前を初めて知ったのは、テュービンゲンの街の中を散歩している時だった。ある学校の前を通ると、その学校名がシヨル兄妹となっていたので、隣にいた妻に訊いた。

「シヨル兄妹は、何をした人なの？」

「第二次大戦中、ナチに反対してビラなどを配った学生グループがいて、シヨル兄妹はそのグループに所属し、最後は、死刑となってしまったのよ。当時、そのような活動をするには勇気が要ったわ。わたしが若いころ、その人たちについて書かれた本を何冊か読み、感動したわ。多くのドイツ人はそのグループ白バラを知っているでしょう。通りの名前それに学校名に、その兄妹の名前はよく付けられているわ」

それを聴き、その白バラについて詳しく知りたくなり、街の図書館に行き、彼らについて書かれた本を幾冊か借りて家に戻った。

読み終え、ソフィーたちの勇気と行動力に心が打たれ、数日間彼らの精神と哲学と宗教について考え続けた。

兄ハンスと妹ソフィーは南部ドイツで生まれ、五人の兄弟と一緒に育った。父は平和主義者で、第一時大戦中は衛生隊員として国に仕え、そのあとはある町の市長になった。母は教会活動に熱心なキリスト教徒で、子供たちには自分で何事も判断させるように育て、自由な教育を重んじていた。

温かい家庭の中で育ったハンスとソフィーは、自分の意思でよろこんでナチの青少年団



に入って、毎日を送るようになった。しかし、父は最初からヒットラーを嫌っていたので、二人の活動に不満を抱いていた。

ハンスは十八歳の時、ニュールンベルクでのナチ青少年団の全国大会で、自分の出身地の旗を持つ榮譽が与えられて行進することになった。しかし、その大会で意味のない行進訓練を受け、くだらない話などを耳にしているうちに、ナチ青少年団に幻滅を感じ、ナチの政治体制に反発するようになり、当時禁止されていた一つの青少年団に所属するようになった。そのため、彼は五週間監禁されることになった。

そのあと、ハンスはミュンヘン大学の医学部で学ぶようになり、半年は大学で、半年は戦争へ行くという日々を繰り返していた。

妹のソフィーは幼稚園教員の勉強を終え、兄と同じミュンヘン大学で生物学と哲学を学ぶことになり、兄と同じ下宿で暮らすようになった。その兄が、他の学生仲間とナチに反対する活動をしていることを知り、自分も、そのグループ白バラに入り、一緒に行動するようにもなった。

この頃から、二人はキリスト教に惹かれるようになって、ハンスは平和主義の司祭が書いた、当時読むことが禁止されていた本を読み、その司祭とも直接会ったりもした。また、司祭宛に、次のようなことを書き送ったりもした。

「わたしは今までの生活のなかで、初めてクリスマスをキリスト者として、確信に溢れて祝うよろこびを見出しました。確かな背景を感じ、揺らぎのない目的を持てるようになりました。今年は、イエス・キリストが新しく自分のなかに生まれたのです」

一方、ソフィーはアウグスチヌスの《告白》を読み、妥協のない、かつ自分を省みることへの確信に触れていた。

白バラが発足したのは、ハンスが大学に入学した一九四一年だった。彼を中心に、学生たちが一つのサークルを結成した。結成したといっても、最初から政治運動を目的としたものではなく、スポーツや音楽や文学、それに芸術などを自分の生活の中に、よろこびとして取り入れる活動だった。

その活動をしているうちに、メンバーたちは、ヒットラーの率いるナチ政府がドイツ国民に大きな不安と憂いをもたらしてきているという考えを持ちはじめようになり、ナチへのはっきりした反対思想を広めようとした。

そこで、ナチの政治体制の犯罪的行為を市民に直接知らせる目的で、自分たちの手作りピラを発行して、市民に武力でない抵抗をするようにと呼びかけた。これは当時のヒットラー体制化の中で、勇気がいったことだった。

そのピラは八か月間に亘って六回も発行された。もちろん、ソフィーも大学に入るや、その活動に参加していった。一回目のピラには、次のようなことを載せた。

「……。武力でない抵抗をせよ。この無神論的な戦争機械がさらに進んで行くのを、阻止しなければならぬ。最後の町がケルンのように、瓦礫の山々となってしまいう前に。ドイツ市民の最後の若者が、死んでしまいう前に。ドイツ人が傲慢にユダヤ人しているようなことを、こんどはユダヤ人がドイツ人にする前に！」

ピラは回を重ねるたびに、強い調子となっていた。とりわけ、ハンスと仲間の友人たちはロシアとの戦争に投入され、数か月間、そこで体験してきた恐ろしい戦争犯罪を目にして帰ってからというもの、いっそう鋭い調子となっていた。

それに並行して、白バラに賛同する人たちが増えていった。勿論、そのことが国家秘密警察に発覚したら、重い刑は免れないことを知ったうえでのことだった。その同胞の中には哲学の大学教授フーバーもいて、ビラの文章作りに参加していた。

六回目のビラは、シヨル兄妹が逮捕された二月十八日に、ミュンヘン大学の講堂で配られた。そこには、独裁者ナポレオンがヨーロッパ全体を戦争に導き、挫折したことを引き合いに出して、ドイツも同じ状態になっていると書き記した。

ナチ政府にとつて、この若い学生たちの抵抗運動は非常に痛手であった。というのも、これらの若者たちは少年の頃、ナチの青少年団に入ってナチの教育を受けたにもかかわらず、反対運動を起こしたからだだった。まして、国全体が戦争状態で、スターリングラードで約十五万の兵士たちが死亡するという悲惨な出来事の直後でもあった。

ハンスと彼の友人プロプスト、それにソフィーは逮捕され、四日後、裁判官の前で、ソフィーは先の言葉を言い、その日にギロチンにかけられてしまった。他の二人も自分たちの行為を曲げなかったため、同様に処刑されてしまった。

それから数か月後、白バラのメンバーはほとんど逮捕されてしまったのである。その年に処刑となったのは、シヨル兄妹やフーバー教授など六名であった。逮捕者は八十名。彼らは自分の死までも覚悟して、ナチに抵抗したのだった。

ソフィーは死刑執行の前日、夢を見た。それは次のようなものだった。「太陽が明るく輝くある日、わたしは白い服を着た一人の子供を抱えて、雪の積もった道を登ったわ。山頂に建つ教会で、その子に洗礼を受けさせるために、険しい雪道を一歩一歩踏んで行くと、突然目の前に大きな雪の裂け目があらわれたわ。でも、その子を安全な場所に置く時間が十分にあつたので、その子を横たえてから、わたしは裂け目のなかへ深く落ちてしまったわ」

彼女はこの夢について、同室の付き添い人に語った。

「その子というのは、私たちの思想なのよ。どんな困難があっても、それは根を張っていくわ。私たちは先駆者よ。しかし、そのためには、前もって死ななければならぬのよ」  
彼女は刑務所内で、一枚の紙に大きく、

自由

と書いて、旅立った。

死という行為で貫いた彼らの思想「自由」は、今も多くの人たちに語り継がれている。

## 語り継ぐため

新聞の地域版に、ナチ時代にテュービンゲンで暮らしていたユダヤ人がどのような生活をしていたかを知らせるドキュメンタリーフィルムが、市内の映画館で観ることができるとの記事が載った。午前は学校の歴史授業のために、午後は一般の人を対象にと書かれてもあつた、しかも、午前の上映後はフィルムに登場するユダヤ人八名と、その場で討論するとも書き加えられてあつた。

それを読んだ私は、当時のユダヤ人がどのように虐げられ、それを観て現代の若者が何を思うかに興味を覚え、映画館に行くことにした。

映画館の前で立っていた先生にお願いしたら、「いいですよ」との返事もらい、私も生徒たちと一緒に観ることになった。

スクリーンに、八十二歳の男性の姿がクローズアップで映し出された。その人が話し出した。

「ヒットラーが一九三三年に政権を取ってから、私たちはプールや川で泳ぐことができなくなっていました。それよりも、もっと身に応えたのはクラスメートの一人が、私の髪の毛をハサミで切り、平手打ちをしてから、『お前がきたないユダヤ人だからだ』と見下した顔で罵ったことだった。それを傍で見ていた先生は、何も言わずに立ったままでいた」

少年の頃に通っていたテュービンゲンの学校前で、彼はさらに語り続けた。

「私の両親は食料品店を営んでいたが、ユダヤ人の店で物を買うなというポイコット運動が起こり、店は倒産してしまった。父は、ナチ政府がドイツ国内のユダヤ教の会堂やユダヤ人商店、それに墓地や事務所などを燃やす指令を出した一九三八年一月九日の夜、逮捕されてしまい、どこかへ連れ去られてしまった。暫くしてから、父が肺炎で死んだとの通知が家に届いた。しかし、それはウソで、強制収容所で殺されてしまったのだ。さいわい、私は残った家族とポルトガルへ逃れることができたが、知り合いの多くは収容所へ送られてしまった」

ここで、彼の顔が画面に大きくアップされて、一つひとつの語を区切りながら、「ドイツの地に、再び、足を踏み入れないと決心したのだが」と言った。

今度は、七十九歳の女性がフィルムの中で語り出した。

「わたしが小学校の頃、プールの入口前に、ユダヤ人は入ることを禁ずると書かれた立札がたっていたわ。でも、ドイツ人の友だちが、『何も起こらないわよ』と言って、わたしの手を引いてなかに入ったわ。また、雪が降ったある日、近所の子供たちから、雪のボールを投げられ、家に帰って、母に『いったいユダヤ人て、何を意味しているの?』と訊いたこともあったわ。わたしの家族は早くからイスラエルへ行ったので、強制収容所へ送られずに済んだけれど……」

館内にいた約百五十名の観客は、物音を立てずにスクリーンを覗いていた。そのほとんどが中学校の生徒たち。数名の大人たちがいたが、彼らは学校の先生たちである。

フィルムに出てきた八名は、現在ドイツに住んではおらず、アメリカやイスラエルやポルトガルで暮らしているユダヤ人たちである。テュービンゲン市が、彼らを招待したのだった。

市では一九八一年以来、ユダヤ人を招くことを四回ほどしている。特に、今回は当時のことを語るユダヤ人が少なくなりつつあるので、次の世代を担う若者たちに、なるべく正確に当時の出来事を知らせようとしたのだった。テュービンゲン市内に住んでいる千名以上の中学校と高校の生徒たちが、このフィルムを観ることになるだろう。

インタビュー形式でフィルムは進行し、当時の写真も映し出されていった。本や講演での内容よりもきわめて生々しく、リアリティーがあるものだった。その中で、テュービンゲンに住んだユダヤ人の歴史にも触れた。

ヒットラーが政権を握った年は、市内にユダヤ人が約百名住んでいたが、それ以後、年々外国へ移り住むようになって、二十二名が強制収容所へ。そのうちの三名がアウシュビッツに送られたとの数字も出た。

約七十分のフィルムが上映されたあと、登場したユダヤ人たちが舞台の上に立って、生徒たちとの討論となった。百四十名の生徒から、質問が幾つか飛び出した。それに、八歳前後のユダヤ人たちが真剣に答えていた。

二十分が過ぎた頃、今度はユダヤ人の一人が、

「このフィルムを観て、あなたがたはどう思ったか」と、生徒たちに訊いた。

ドイツの若者なので、いろいろな感想を聴けると想像したのだが、一分過ぎても生徒たちは何も言わないでいた。二分が過ぎた。と、ある一人の女子生徒が立ち上がった。

「このようなことが、本当にあったなんて信じられません。今は、それしか言えません」自分の意見を言うことに慣れているこちらの若者たちだが、このあとも皆黙っていた。五分経ってから、一人の先生が八名のユダヤ人たちにお礼をのべ、そして言った。

「この過去の暗い出来事を、皆さんと今後も共有し続けていこうと思っています。学校に戻り、このフィルムについて討論する予定です」と。

映画館を出て家に戻る途中、思った。ナチ時代のことは、学校授業の中で徹底的に話し合われているのだ。今回の企画で、八名の人を招き、また、インタビュのフィルム撮影にアメリカとイスラエル、それにポルトガルに行つての労苦は大変だったに違いない。

これはテュービンゲン市だけのことでなく、ドイツの至るところの街で、当時のことを様々な企画をたてて市民に伝えているのである。

ドイツに、再び足を踏み入れたくないと語ったユダヤ人もいた。まして、高齢の身でここまで来て、ドイツの若者と対話をしたのだ。どうしても伝えなかったのだろう。未来を見つめるその姿に、頭が深く下がった。と同時に、当時のようなことを、二度と起こさないようにしているドイツの学校教育にも敬意を表した。

## 広島からのメッセージ

テュービンゲンの平和運動グループで活動している人から、私のところに電話がかかってきた。

「昨年八月六日は、日本の人たちが鶴を折ってくれて、道行く人にそれらを手渡ししてくれましたね。今年は何をしようかと考えているところなのです。いい案がありますか」

それを聴き、ある一つの考えが浮かんだ。それを実行するために、広島へ行って、あることをお願いしてみようと思った。

広島駅から市電に乗って、原爆ドーム前で降り、少し歩いて行くと、無残な姿になったドームが見え出した。その前で立ち止まってから、平和記念資料館に行き、地下一階の啓発担当室に入り、その職員に私の望みを伝えた。

「ええ、それはできますよ。ドイツ語に訳した大きなポスター三十枚がありますので、それを持っていつてみてはどうですか。ドイツ語でのDVDもありますし」

「本当ですか。それは、ありがたいです」

「毎年、それらを使用してもいいですよ。返還する必要はありません。それらのポスターがドイツの人たちの目に留まってくれば、私たちはうれしいのですから」

対応してくれた女性は、にっこりした顔で言った。

「ポスターを包装するまでには一時間半はかかるので、もう一度ここに来てください」  
「そうですか。それでは資料館内を歩いてきます」

今までに二回ほど広島を訪れているので、何がどこに展示されているのかを知っている。関心が強くあつたところを再び見て廻ってから外に出て、原爆死没者慰霊碑の前に立った。ハニワ型の屋根の下に置いてある石棺には「安らかに眠ってください。過ちは繰返しませぬから」と刻まれてある。その文字をじっと見つめ続けた。と、これは一体、誰が主語となっているかとの考えとなった。主語がない文でも通用する巧みな日本語。先ほど、対応してくれた女性に訊ねてみようと思った。

一時間半が過ぎたので、資料館の啓発室に戻ると、ポスターは包装されてあつた。先ほどの女性に訊ねた。

「『過ちは繰返しませぬから』との文の主格についてなのですが」

「あれは、全世界の人たちを指します。米国ではアメリカ人が、日本では日本人が、他の国ではその国の人が、未来を含めての声を出しているのです。英語で言うと、Weとなります」

「では、米国では、このような資料館みたいな建物がどこかに在るのでしょうか」

「アメリカに在住の日本人が、そのようなものを造る計画を企てようとしたましたが、建てるまでには至っていません」

「そうですか」

そう言うてから、また、訊ねた。

「それでは日本人によって実行された真珠湾攻撃に関する詳しい資料館みたいなものが、米国には在るのでしょうか」

「ハワイに建っていると聞いています」

「日本にはないのですか？」

「さあ」

彼女は首を横に振った。

「そうですか」

そう言うてから彼女にお礼をのべて、三キログラム以上はあるポスターを両手で抱えて外に出た。

平和記念公園を歩きながら思った。やった方の加害者は、その行為を忘れがちになりがちだが、やられた方の被害者は、その行為を何かと憶えているものだ。その点、ドイツではどの考えとなった。

ドイツのように強制収容所を今も残して、ナチ政府が犯した残忍な行為を次の世代にしつかりと伝えている国もあるのだ。

日本も本当に国が、一人ひとりが謙虚になれば、中国大陸で日本軍がした行為を知らせる資料館、また、真珠湾攻撃をなげしたかの深い反省をうながす展示館を日本に建て、次の世代に真実をしつかりと伝えることは大切だろう。戦争のない世界を創り出すためにも必要だ。

ドーム付近の近くから、妻に電話をかけた。

「ポスター三十枚とDVDを、手にすることができた」

「ほんと、よかったわね」

妻の弾んだ声である。ここまで足を運んだ甲斐があったと思った。八月六日教会前の広場で、これらのポスターをパネルに貼って、道行く人に見てもらおう。戦争のない、核爆弾のない世界を願うがゆえに。

一九六七年に日本政府が公表した非核三原則である、「核兵器をもたず、つくらず、もちこませず」を今も国是としている私たち日本人だ。戦争を避けるためにも、広島と長崎に落ちた原爆のことを、世界に伝えていかなければならない。と同時に、加害者体験をも伝えていかねばならない。

## 届け、この願い

「外では雨が降っているけれど、明日はぜひ晴れてほしいな」

「そうね。天気予報では、一日中曇りだと言っていたけれど」

夕食を済ませたあと、妻と明日の天気を心配しながら、長さ三メートル幅一メートルの日本の白い布地に、65 Jahre Hiroshima の文字を切り抜いて、縫い合わせることをはじめた。

それが終わったのが、真夜中の十二時過ぎだった。雨の音を耳にしながら眠りについた。

翌朝ベッドから起き出してカーテンを引くと、雨は止んでいたが、灰色の空である。今にも雨が降りそうだ。

八時半、私と妻はガスボンベ、風船、折り紙、それに印刷物などを手押しワゴンに積んで、教会前の広場へ向かった。

二〇一〇年八月六日の今日は、広島に原爆が投下されて、ちょうど六十五年目にあたる日である。毎年この日は、平和運動のためにドイツ人と日本人とが一緒になって、広場で鶴を折ることをしている。

今年はそれに加えて、妻の案で色とりどりの百の風船に、「広島・長崎を再び繰り返してはならない」・「戦争が終わって市民の苦しみがはじまる」・「核の無い世界を求めて」などの平和の願いを書いた小片を鶴につけて、空に飛ばそうとした。

手伝いに来てくれた二組の日本人家族と、ドイツ人の元牧師と学校の先生、それと妻とで、机や椅子それにパネルなどを広場の中央に運ぶ作業に取りかかった。

ちょうど十時、警察官二人が近寄ってきて、催し物の許可書を見せてほしいと言われ、私と妻が一週間前に市役所に提出した集会の証明書を提示した。さあ、これから十二時半まで、道行く人に平和を訴えるのだ。

パネルには、昨年広島を訪れた際に手にした大きなポスター八枚が貼ってある。それに、昨晩妻と私とで作った横断幕が机から垂れ下がっている。その前で、私たちは椅子に座りながら、おり紙で鶴を折り出した。

前日の新聞に、私たちに関する記事が載ったのを読んで、話しかけてくる人もいる。また、マルクト広場では朝市が立っていたので、前を横切る人も多い。それに、夏休みなので子供を連れた家族が、カラフルな風船を見て寄ってくる。

私たちはドイツ人に鶴の折り方を教えたりして、周囲は賑やかなものである。

十一時、十二時には、ゴングを鳴らしての平和を願うの黙禱となった。日本人とドイツ人、それにアメリカ人も一緒である。ちょうど教会の鐘が数分間鳴り響き続けたので、それに合わせての祈りである。

最後に、今日参加した人たち十名が手に風船を持って、一斉に風船を空へ向けて放した。響け、私たちの願い！

後片付けをしてから、私の家で、先ほど催しの活動をしてきた八名と一緒にテーブルを囲んでの昼食となった。その中には、日本の中学生もいる。彼は机や椅子を運んだり、片づけをしたり、風船にガスを注入してもらった。これが、私にはとてもうれしかった。若い世代に、このような活動をしながら、世界への平和への願いを伝えることができたからである。

次の世代に、この広島・長崎の原爆をどうしても語り継いでいきたいのだ。世界に核戦争を起こせないためにも。

さいわい雨に降られずに済んだ。皆と共に、平和を願うの時間だった。

翌日、私たちの平和を願う活動が、カラー写真入りで地元の新聞に大きく載った。多くのテュービンゲン市民が読んでくれたことだろう。

## 共生

### 一日がはじまる

ドイツで暮らしはじめた頃、よく考えさせられた問題に、キリスト教のことがあった。

それというのも祭日は、ほとんどがそれに困んだもの。それと、何よりも妻と義母と一緒に生活していると、キリスト教との関係をしっかりと捉えなければならぬと思っただけだった。周りの環境から、否応無しにキリスト教という宗教に触れざるを得なくなったのである。

では、ドイツに来る前はどうかと言くと、クリスチヤンの妻と暮らし、私が勤めた浜松にある知的ハンデイを持つ子供たちが住む施設もキリスト教を基にした職場だったので、間接的にはキリスト教に触れていた。しかし、当時それを自分の身に当てて考えたことはなかった。

それがドイツに住むようになると、ここの文化との出遭いの中で、どうしてもキリスト教と対話していく必要性を感じ出した。

対話するには、自分の立っている宗教的な立場がある程度、知ってなければならぬ。さいわい、私は学生時代に一時、禅寺へ通ったことがあったし、良寛や親鸞などの書いた本を読み、宗教哲学に強い関心を抱いていた。そのようなことで、自分の宗教的な立場を、ある程度は知っていた。そのような中で対話となっていた。

あれは、ここに暮らしてちょうど二年が経った頃だった。テュービンゲンに住む私の知

人夫妻がシュトウツトガルト市にある日本語教会のクリスマス会へ行くというので、私たち家族も同行し、そこで多くの日本人と会って楽しい時間を過ごした。

それ以来、私はその日本語教会で行う月一回の礼拝と聖書研究会、それにいろいろな事に参加するようになった。また、日曜日には、家族と共に家の近くの教会礼拝へ通うようにもなった。そのようなある日の朝、次のような会話を妻と交わしたことがあった。

「きみの生活にとって、宗教は何を意味しているの？」

「朝からそんな話、できないでしょうに」

「そうだなあ」

そう言ったあと、私は少しの間黙っていた。と、彼女が私の顔を見た。

「それでは、あなたにとって宗教とは、何なの？」

「自分にとって、宗教とはどのように生きるかの指針を与えてくれるものだ。特に、周りの人との関係をプラス的思考にしてくれて、前向きに生きようとするエネルギーをもたらしてくれるのだ。これは答えになっていないな」

「そんなことないわ。わたしもそう思うわ」

妻はそう言うてから、間をおかずに、

「さあ、きょうも一日が始まったわ」

と、声を上げた。

この会話で思ったことは、十の人がいれば、十の異なる生活がある。が、どのように生きるかには、共通したものがあろう。それは、彼女が「一日が始まったわ」と言ったように、周りの人と共に生きていくことが大切で、その過程に普遍的な真理が内蔵しているに違いないと。

そのような考えでいる私が、キリスト教の聖典といわれる聖書を読めばよむほど、その内容に魅せられ、自分を省みることがしばしばとなった。特に、日常生活の中で自己中心的な己を見出すことが多く、その際は大抵「共に」という意識が欠け、エゴが強く出ているのだった。

私がこの社会で暮らしていく中では、キリスト教との関係は避けられるものではなかった。いや、寧ろキリスト教との関係を次第によるこぶようになって、毎日の生活の中で、「共に」との姿勢で暮らしていこうと心がけるようになった。そこに、自分の生が問われていると思ったからである。

## 正門の木

あれは、ちょうど十年前のことだった。いつものように家で朝食を摂っていると、外でモーターが回っているような音が聞こえてきた。道路工事をしているのだろうと思い、私たちは気にもせずにパンを食べ続けていた。が、その音が次第に大きくなったので、椅子から立ち上がり、窓辺に寄って下をのぞいた。

と、黄色い作業服を着た二人が、二メートル先に立っていたニセアカシアの木を切っているではないか。楞き、窓を開け、

「何をしているのだ！」



と、下へ向かって大声で叫んだ。しかし、防音用ヘルメットを被っている二人の作業員には聞こえないようで、さらに幹を切り取っていった。

私と妻は直ぐに外に出たが、木はすでになくなっていた。

「なぜ、切ったのだ？」

そう詰問すると、一人の作業員が、

「この木の根が建物の壁に張り付いて、壁を崩す可能性もあるので、市の委託で切り取ったのだ」

と、答えた。それを聴き、声を荒げて、

「何ということだ。この一本の木によって、多くの人が恵みを得ていたのに。小鳥も蜜蜂もそうだ。それを切り倒すなんて、酷いではないか。それも予告もなしに、私たち住民の声も聞かずに」

と、言った。妻も、作業員と言いつ争ったが、暖簾に腕押しだった。

街路樹として立っていたそのニセアカシアの木、私たちがテュービンゲンに住みはじめた頃は、二階の窓に背丈の先端がやっと届くかどうかの痩せた若木だった。それが年々大きくくなって、私たちが住む三階の窓にまで、枝が伸びてくるようになった。

朝、目を覚まして窓を開けると、前に広がる複葉から発散された芳気が部屋中に漂い、それを胸いっぱい吸うと、「さあ、きょうも一日がはじまるぞ」という清々しい気持ちになるのだった。そのニセアカシアの木、私には想い出がいくつもあった。

春になって、白い花の甘い香りが漂い出すと、小鳥たちが新緑の葉で生い茂った梢に止まり、すばらしい声で歌うのだった。ある時など、窓から一メートルも離れてない枝の上で、尾を上げながら澄んだ声で鳴いている小鳥の姿を、息を凝らしながら眺め続けたこともあった。

花が咲いている時期もよかったが、夏になって、雨が降ったあとも素晴らしいものがあった。一枚一枚の葉の上には、小さな丸い水滴が惜しむかのように付き、そこに太陽の光が射すと、眩いばかりに輝くのだった。

夏から秋になって、緑の葉が今度は黄色く色づき、少しずつ散っていく様も趣があった。

それから、寒さが厳しくなって凍てつくような冬は、細い枝に氷柱が垂れ下がり、その重みで枝先は弓なりになってしまうこともあった。それが何日も続き、太陽が顔を見せはじめると、氷が溶け出して薄緑の芽が吹き、それを目にすると、春の近いことを知ったのだった。

四季折々、見飽きることはなかったその木が、切り倒されてしまったのだ。残念でならない。それと同様に、ある一本の木に想い出がある。

東京に住んでいた時、家の前に大きな桜の木が堂々と立っていた。四月になると、うす淡い桃色の花が木全体を覆い、わずかな風でも花びらが部屋にヒラヒラと舞い落ちてきて、それを手のひらでつかんだことがあった。

その木が切り倒されたとき聞いた時は、悲しかった。それ以来、桜の花を見るたびに、その立派な木を想い出し、当時一緒に暮らしていた父母ときょうだいのことが浮かんでくるのだった。

今は、その桜の木もニセアカシアの木もない。しかし、それらを想い出すことはできる。心の中に存在しているからだ。一本の木、語り合えば、それは心のふるさとだ。

## 裏門の木

作業所から帰宅すると、家の裏門前に立つ菩提樹をよく眺めていたミヒヤエル。しかし、最近そのような姿を見かけなくなってしまうた。どうしたのかと思ひ、彼に訊くと、

「鳥、トリ、いない」

と答え、窓から十メートル先に立っている菩提樹を指差した。

「アッ！」

と私は思わず、声を上げた。六月に入っているのに、白い小さな花はおろか、緑の葉さえ枝に付いていないではないか。太い樹幹だけが、寂しそうに立っているだけなのである。夕食を摂っている時に、そのことを妻に話すと、

「わたしもそれには気がつかなかったわ。そういえば、こここのところ家の裏から小鳥たちの声が、聞こえないわね」

と云ひ、ミヒヤエルのほうに顔を向けた。彼は肩をすくめながら、再び、

「鳥、いない。トリ、いない」

と、声を出した。妻が話し出した。

「リンデン（ぼだい樹）は千年も前から村々の広場に立ち、その広い樹冠の下で村人たちは憩い、語らっていたわ。大きな由緒ある建物の側には、大体リンデンが立っているわ。この地方の人たちにとって、リンデンは最も親しい木よ。あなたも街のなかでよく見かけるでしょ」

「散歩していると、よく目にするね」

「リンデンは神の宿る木とも言われているわ。無数の小さな花からは甘い匂いが漂い、それを乾燥させてお茶にして飲むと、風邪の熱冷ましにもなるわ。血を洗ってくれるし。特に、夕暮れときは芳香ね」

「そうだったのか。だからミヒヤエルは夕方近く窓を開け、その匂いと鳥の声を聞いていたのか。その木が一体、どうしたのだろう？」

彼女が再び語り出した。

「リンデンは排気ガスと高乾燥には弱いよ。裏に建っているホテルが、確か半年前から改築されていたわね。そのとき、職人たちが休憩する移動用簡易コンテナがリンデンの横に置かれたわね。そこから毎日煙が出ていたわ。多分、そのせいよ。環境汚染にとっても敏感な木なのだから」

「そうだったのか」

ミヒヤエルは、私たちの会話を耳にしながら、さかんに「ピー、ピー」と小鳥の鳴き声を出していた。

広々した枝にハート形の葉をいっぱいにつけ、甘く漂う香りを発散する菩提樹。その姿は、今はない。数百年も生き続けてきた木が枯れてしまったのだ。一本の木に注意を払わなかった人の行為で、菩提樹が消えてしまったのだ。残念でならない。

それから二年が経った時だった。同じ場所に初々しい菩提樹が植樹された。五月になれば、再び甘い香りが漂うに違いない。

## 周りの人と協力しながら

居間の電話が鳴り響いたのは、夏の早朝、それも食事前のことだった。知り合いの日本人女性が下宿先で倒れ、大病院に運ばれて、これから頭の手術を受けなければならないとの緊急連絡だった。愕き、即車を走らせた。

病院に着くと、彼女の恋人であるパキスタン人が廊下の長椅子に座って、私に来るのを待っていた。その彼から事情を聴くうちに、事情が次第に飲み込めてきて、これから開頭手術、それも五時間以上の難しい手術とのがわかった。

ドクターからは、

「生死にもかかわる事態なので、両親を呼んだほうがよいでしょう」

と告げられ、日本にいる彼女の両親に電話をすることになった。そのあと、手術の結果を待った。

その女性というのは、チュービンゲン大学で勉強していた学生で、生活費を捻出するために、私の家の裏に建つホテルで週に三日ほど働いていた。そのようなことで、彼女はしばしば私の家に来て、食事を共にするようになった。また、一年前の夏には私たちの家族と一緒に、チロルの山で一週間過ごしたこともあった。

予期もしなかった脳動脈瘤による手術。彼女を知る私たちは、日本食を持って病院へ見舞いに行き、傍で彼女と一緒に時を過ごしていた。私たちは、お互い常に連絡を取り合いながら、彼女の回復を待った。

この周りの人たちと連絡しあいながらの会話が、とても心強く感じられ、その時は自分の存在を忘れ、無意識のうちに「ウンウン、そうだね、そうだね」という言葉が、自然とお互いの口から出てくるのだった。

さいわいなことに、手術後に麻痺していた右手、それに右足もリハビリをしていくうちに、少しずつ動くようになり、言語の不便さも徐々に取れていった。三か月間の病院とリハビリセンターでの治療を終えて、彼女は日本へ帰った。

この出来事から、私たちは周りの人たちとの協力がいかに大切かを学んだ。

## 世界は一家族

あずき色とオレンジ色の布をまとったダライ・ラマ一四世を、チュービンゲンの通りで見かけたのは、彼がノーベル平和章を受賞した翌年（一九八九年）のことだった。

二人のお供を連れて、教会前の広場を柔和な顔をしながら、ゆっくりとした足取りで大股に歩いていった。

その姿は一種独特で、目に入ってくる光景をいかにも楽しんでいるかのようでもあった。その時、ドイツのプロテスタント教会から何かの賞を受け、その授与式がチュービンゲン大学講堂で実施されたのだ。

キリスト教組織団体が仏教者のダライ・ラマに賞を授与するとは、想像さえもしなかつ

ただけに驚きもした。キリスト教と仏教との宗教間で、対話と尊重が少しずつ生じてきたのかと思っただけだった。

それを、果たしているダライ・ラマは大きな人のように映った。

チベットの元首でもあり、宗教的指導者でもあるダライ・ラマ十四世に関しては、ドイツのテレビで平和賞を受賞した前後、しばしば放映されるようになった。また、多くの街で展示や講演会もよく催されるようになった。

テュービンゲンの街の中にある市民大学でも、彼に関する写真展が三週間開かれたことがあった。多くの市民がそれを見学にいった。私も出かけた。その時、あるひとりのチベツト人が書いた文章があった。

「一九五〇年に中国軍隊がチベツトに侵入して、私たちの地は占領されてしまい、中国の所属（自治区）になってしまい、チベツト人は自分の国にいながら、今は二流の市民になってしまった。現在、チベツトに定住した中国人の数は七五〇万人。それに対して、チベツト人は六〇〇万人。中国はチベツト文化を絶滅しようと目論んでいる。

中国政府は、チベツトの地にある豊富な資源から大きな益を得ようとして、約一三〇の鉱物資源の他に、おそらく世界中で最も多量なウランが埋蔵されているといわれる私たちの地に、強い関心をもっているのだ。それに加え、容赦なき工業化と環境問題を考えない盗伐によって、森林の四〇パーセント以上は、ここ数十年間で伐採されてしまった。

そのあとに植林もされずに、そのままで放置されている。また、エコロジー的被害はチベツトだけでなく、他のアジア諸国にも及んでいる。というのも、チベツト高原から発する水は幾つもの大きな河に流れ、その河と共に生きている多くの人々に、害をもたらしているからだ」

これを読んだ翌日、私は或るテレビ番組で、チベツト人の中年男性が次のようなことを語ったのを聴いた。彼はダライ・ラマがインドへ亡命をした一九五九年に、同じインドに亡命した人である。

「ある日、両親と一緒にダライ・ラマの話をお聴くために会場に行くと、多くのチベツト人たちがいた。私たち家族は彼らと話をしたあと、自分たちの地であるチベツトへ帰ろうと決心をして、チベツトの地に戻った。

しかし、労働許可も居住権利も持たない生活は厳しいものがあつた。おまけに私は、チベツト自治区の公用語である中国語を話すことができなかつた。でも、さいわいなことに、英語を話すことができたので、チベツトを訪れて来る外国人のために、ガイドをするようになった。

そのようなことをしながら暮らすうちに、警察官などが国家の権力によって、デモ行進している人たちを好き勝手に逮捕して、監禁している状況を知った。そこで、それらを外国に伝えるような活動をするようになったのだ」

さらに、彼は熱い口調で語り続けた。

「いつものように仕事が終わりに家に戻ると、数名の警察官たちが私の持ち物を捜査していた。警察官は、私がヨーロッパ諸国で政治的活動をしているチベツト人に渡そうとしていた、拘禁の報告原稿を探していたのだ。それは発見されてしまい、自分は一九九三年五月、国家の機密を盗んでいたという名目で逮捕され、首都ラサで拘置されてしまった。

その拘置所の部屋はとても汚く、毎日、数時間も尋問を受けた。自分はいいほうで、他

の政治犯は、それは酷い拷問をしばしば受けていた。

私は拷問されないで済んだが、ただ、辛かったのは隔離されて、目にする人は警備兵だけだった。加えて、いつも同じような尋問が延々と続き、それも真夜中のときがしばしばあった」

一息入れてから、彼はさらに続けた。

「中国では反革命者は最も重い刑となるので、自分は死刑になるかも知れないと思った。でも、さいわいなことに、私が旅行ガイド者として働いていた頃、お世話した人のなかに世界的に有名な方が何人かいて、その人たちのおかげで、自分は中国当局から釈放されたのだ。

それは、一九九四年一月一日のことだった。この日を、私は自分が生まれた日と想っている。自分は楽観論者かもしれないが、中国はチベットをいつか解放するだろう」

これを聴いた私は次の日、街の図書館に行き、ダライ・ラマが著した本を借りて、数日間読み耽った。その中で、ダライ・ラマは次のようなことを書いていた。

「人や生き物にとつて、最も大切なものはいのちです。そのいのちを、傷つけるようなことをしてはいけません。暴力によつての問題解決は一時的なもので、決定的で長期的な解決には決してなりません。むしろ、次から次へと新しい問題が生じてきます。中国が一九五〇年にチベットに侵入し、それに対し、チベット人が行った五〇年代の暴力運動は、自殺的行為でもありました」

さらに続いた。

「私にとつての敵対者は、まさに私の真の友人なのです。それは、他者への尊重と寛容とをさらに強く働きかける試金石なのですから。だから、敵対者（友人）でも、憎むべきではないし、その人に尊重と感謝でもつて接するべきなのです。現に、自分は中国の文化を尊いものと思うし、私たちはお互いに隣人として深く学ぶことが大切なのです。私は中国の人を尊敬しているし、敵とは思っていません」

ダライ・ラマは盛んに相互依存のことを説く。

「人間は、お互いにすべて依存しながら生きています。世界は一つの家族なのであって、そのメンバーの中には小さい人や少数民族や小さな国もあれば、大きな人や大民族や大きな国もあります。それらは一つに結ばれ、平和で幸福に暮らすことが必要です。

それには、お互いが寛容とハーモニーの精神とを持って尊重し合うことです。世界を全体としてみるべきです。なぜなら、すべての部分は、お互いに影響しあっているからです」  
これを読み、ダライ・ラマは過酷な運命を背負いながらも、常に明るい笑みを浮かべて、六百万人以上のチベット人に希望を与えているように思えた。一体、その力はどこからくるのだろうか。

ダライ・ラマの発言を聴いたり、書いてある本を読んだりしていると、宗教的信仰と現実主義とによる世界への責任を、彼に見出すことができる。力できるものに対しては、絶え間なく自己をコントロールして、忍耐と寛容、それに希望を持ちつつ、長期的な見方をしながら、その中でバランスをとっているように映るのだった。

チベットは、今後どのようなようになって行くのだろうか。亡命者のダライ・ラマがあの特徴的な姿で自国を自由に歩く日が、いつか来るのだろうか。そう望むが…。

## Tさんからの手紙

横井様

旅の余韻にとつぷりと浸かっていたと思うのに、目の前の活動に追われ、あつと言う間に一週間が過ぎ去りました。

過日は、並々ならぬご配慮、ご親切をいただきまして、本当にありがとうございます。Kさんとドイツへの旅の計画が出てすぐさま実行という状況でしたので、十分な事前学習も積まずに行ってしまったものですが、私にとって、予想をはるかに越えたスバラシイ旅でした。

長い歴史を経た心落ちつくチュービンゲンの街並み、スイスの雄大な自然、古都ルツェルンや湖の美しい町ローザンヌ、その他一つひとつどれを取り上げても、今でも心が震えるほど感動を味わったことは事実です。

でも……そのどちらにも増して、私の心に今尚、大きな位置を占めるのは、横井さんのご案内で訪れた、コロニーや老人ホームやホスピスでの視察でした。

それら一つひとつが常々私の社会活動の一環でしたので、さらに関心と感動とが深いものとなったのです。具体的なものが私の日ごろの活動と対比して考えることができ、今後に役立てて行こうと実感しております。

とりわけ、ホスピスについては、私自身が、この四年間余り自分のこととして、深い関心を寄せていたテーマでありましたので、今、私の手のなかに、ズッシリと重いほどの物を与えられたような手ごたえを感じます。

ホスピスについては後ほど、ワープロ打ちのレポートを送らせて頂きたいと思います。自己の生き方の中で、あのドイツでのホスピスについて学んだことが、どのように捉えられてゆくのか、ただ今、繰り返し、繰り返し、考えているところです。

私は、どちらかと言えば、安穩と暮らして来たような気もするのですが、今までの人生の中で、二度、死の淵に立たされたことがあります。

今から六年前、我が人生に降って湧いたようなある出来事が生じました。私にとっては、あまりに耐え難い出来事でした。どうか、すべてが夢であつて欲しいと考えれば考えるほど、現実から逃れることができず、苦悩したものです。

車を見ると吸い込まれるように、自分から寄って行こうとしました。薬も飲みました。湖の淵に幾度となく立っては、心だけが一足先にスーッと水の中に入って行くような錯覚を幾度味わったことか。水辺に立つと、頭の中いっぱい「太宰治」が浮かんで来て、他のもの一切を払いのけてしまうのです。

まるで死に神に取り付かれたような中から、どうにか抜け出ることができたのは、家族の存在でした。ただ黙って、じっと待ってくれた家族でした。

丁度その一年後、再び死の淵に立たされたのは「がんの宣告」でした。早期ではないこと、手術の状況によってはそのまま閉腹すること、たとえ手術がうまく済んでも、その後再発の危険をごく短期間の内に抱えていることなどを医師の口から告知されました。

私自身が真実を求めて告知を望んだものでした。医師の一言一言を、その時は想像以上

に平穏に受容しました。不思議なくらい乱れませんでした。

結局、八時間に及ぶ手術を終えて、数時間後麻酔から目覚めた頃から、奈落へ引きずり込まれるような恐怖との闘いが始まったのです。一年前、あんなにも苦悩に負けて、死を選ぼうとした自分が、死への恐怖におののく日々がスタートしたのです。

それから一年間、人には会えず、電話には出られず、自閉するだけの時を送りました。あんなにも理論的に生きていた自分が、全く理論が通らず、唯々自分のカラの中に閉じこもって行きました。とても辛い時間でした。宗教に誘ってくれる友人もいました。聖書や仏教に関する本を読みあさりました。でも、一歩も前へは進めませんでした。死に関する本を専ら読みあさりました。

一年が過ぎた頃から、徐々に、徐々に心が軽くなって、すべてをあるがままに受け入れられるようになっていく自分を感じたのです。

その辺りから、「ああ、生かされているんだ」と思え、周囲のものすべてに「ありがとう」と感謝したい気持ちになったのです。

病院へいく度、ドクターは「今、医師が手伝うことがありますか」と声をかけてくれたのですが、私はきまつて「今は必要がありません」と答えられるようになっていました。

ドイツへ行く前、定期診察に病院を訪ねました。医師は「これまでつないできた紐を外しましょう。向こう一年間、病院を離れてもいいです」と言ってくれました。そして付け加えたのは「病気は医師さえ判断できないほど個人個人の生き方によって異なる」ということでした。

私も、今後どんな方向へ向かうのか、どんな結果が生じるのかは神さまだけがご存知なのか、神さまさえご存知ないのかわかりません。でも、確かに「今生きている私」があることだけは事実です。しかもそれは神さまに与えられて、生かされている命、と私は思っているのです。「無駄にはできない。大切に生きたい。精一杯、今を生きたい」と思っています。

そんな私が横井さんにお会いして、強烈なインパクトを受けました。私が耐えず手探りし続けていたものが、横井さんの中にお持ちでいらつしやるような、そんな感動を受けたのです。そんな思いで「チュービンゲン便り」をくりかえし、くりかえし読んでは、共感の涙を流している次第です。

もう一度チュービンゲンを訪れたい。そして、その時「横井さん、人はそれぞれ、どこへ帰るのでしょうか」と尋ねてみたいと思っております。

奥さま、ミヒヤエル君によるしくお伝えください。

長々書きましたが、お礼をのべ、今後のご親交をお願いしたく存じます。

Ｔ様

日本に戻られて忙しい中、手紙を書いてくださりありがとうございます。皆さん三人が帰国して二週間が過ぎたのですね。Ｔさんからの手紙を読んでいますと、一緒に過ごした日々のことが、まるで昨日のようにも思えてくるのです。

皆さんとの出会いはとても有意義なものでした。幾らか年の若い私に、このような言いかたは失礼なのですが、プライベートな生活なども正直に語ってください、そのことが皆

さんをより親しく感じさせてくれました。ありがとうございます。とても勉強になりました。特に、Tさんの病気の中での体験談は、今の自分の生活を見直させてくれました。

Tさんが日本へ戻る前に、「日本へ帰ったら、どうぞホスピスについて、何か書いてください。その文をテュービンゲン便りに載せたいのですが」と頼みましたが、私生活と仕事に忙しいなか、どうぞ無理をしませんように。今回の手紙を拝読しただけで、もうどのように生きるかを教わったような気がしました。感謝します。

手紙の最後に、「人はそれぞれどこへ帰るのでしょうか」と書かれてありました。私もそのことを以前から考えています。特に、生まれ育った故郷の日本を離れ、文化と言語の異なるドイツに住み、年を少しずつ取る中で、同年代の人よりも、そのことを多く考えているように思うのです。そのようなある日、空を飛んでいる燕を見て、次のようなことを考えたことがありました。

春を感じはじめたある日のことでした。高台に建っている私の家の窓から、下に建ち並ぶ赤い屋根瓦の大きな学生寮がよく見えます。その建物の向こうにはネッカー川が流れています。その建物とネッカー川の上空を、燕が弧を描くようにスイスイと飛び交っていました。

彼らは春になると、アフリカからヨーロッパ大陸へ来て、ここで卵を産み、ひなが孵ります。そのひなたちは、この地で飛ぶ訓練をして、夏になる前にアフリカへ飛び発ちます。彼らが大空を自由に舞っている姿を目にしながら、ふと思ったのです。彼らの帰るところは、どこなのだろうか。その答えは次のように返ってきました。

それは、翼なのではないだろうか。大空を自由に飛んでいる燕に、今、今ですよ、もし翼がなかったら、自由に飛ぶことができません。翼があつてこそ、彼らは燕（鳥）であるといえるのではないのでしょうか。

それでは、そのことを自分の身に引き当てると、「翼に相当するところは、自分のどこなのだろうか」と考えました。そうすると、自分の存在を奥で支えているようなもの。それは在るというのではなく、意識した関係を持つ心だと思つたのです。それを心がけている限り、今の自分を保つことができるのだろうか。

その関係の中に、最も身近な家族や友人や知人、それに数知れぬ人と自然とが入っているとと思うのです。今まで過去に経験したことが、今も続いている関係の道ともいえるものです。そこに、帰るのではないのでしょうか。どうも私には、命の誕生以前の、時空を越えたところに帰っていくとは思えないのです。

とにかく、今の私は、目には見えないその関係の心を意識しながら、真剣に生きようと心がけています。

お手紙をありがとうございます。どうぞお体を大切に、ご自愛ください。

## 人はどこへ帰るのでしょうか

横井様

ふと気がついて周りを見まわすと、庭の花は、すっかり秋色に変わり、木々の葉は少しずつ黄色味を帯びているこの頃です。



テュービンゲンの秋は、どんな風情を醸し出しているのでしょうか。夏の盛りに、草の匂いを感じさせてくれたネッカー川は、どんな表情で流れているのでしょうか。豊かな緑と花で溢れたあのテュービンゲンの街並みが恋しくて、懐かしくて胸が詰まってきました。

ご家族の皆さま、お元気でいらっしやいますか。

オーストリアからの自然三昧のお便りを頂いて、羨ましく思いました。絵のような自然の風景のなかに溶けこんでいると、目先の小さな出来事のあれこれが、さらになんと小さく見えてくることでしょう。

早速お便りを出そうと、今、再び精神の行方について考えているところです。

病気の宣告を受けて、手術を受けて、そんなつらい思いをしているのに、さらにその後の生命が保証されないというショックで、手術のあと精神が回復できずに葛藤した事は、前の手紙の中でも述べましたよね。

それから立ちあがりの一年間を経て、気がついたら、あるがままを受け入れるゆとりを持つことができるようになり、生かされている生命を、ありがたく受け止められるようになったのですが、思い出すと、あの自閉した一年間はただ専ら、本を読みあさったように思うのです。それも死と生に関するもの（最近では、死生学などという語が語られています）を読みまくったのです。

死が怖い、忌まわしいという思いが、誰の中にも大きく存在するから、がんの告知は容易に行なわれず、偽りの中で人生を終えてしまうことだってあるのですよね。

「死」とは何？との思いがスタートだったように思います。

「死」はこの世に存在する者の宿命であることを忘れ、「生」だけが勝ち誇ったように大きな顔をしていたという事に気づきました。人生のターミナルは誰もが「死」という駅で迎える訳です。終着駅へ着くまで、ぼんやり居眠りなんてしてられない、という考えにとらわれ始めました。

そんなことを考えられるようになった一つに「チベット密教」についての本を幾冊か読んだのも契機となったのも事実です。

ダライ・ラマは輪廻転生を説いていますね。私の行きついたところもそこだったかも知れません。ただし、チベット密教による輪廻転生は、いつか、どこかへ、全く同じ生命が出現するというこの様ですが、私にはこの点はまだ解りません。私は私たち一人ひとりの靈魂は不滅だろう、と考えています。

肉体は死んでしまえば脱けながら、火葬にされても、着古した服を処分する位の感覚です。でも、その人なりの尊厳を有した精神（魂）は決して消滅する筈がない、と考えると、とても気持ちが楽になりました。そしてその時から「心をこめて生きる」ということに変意欲的になったのです。

自分の中にある精神（魂）が、他の人と触れ合って、互いに影響し合うとしたら、私の有する魂が、肉体が減じた後にも、誰かの中で息づいてくれると考えることが、私にとっての転生の考えでした。私の死後も、私の魂は誰かの中に生きる。私の魂が転生すると考えた時から、とても真摯に生きることを絶えず思い続けています。

現在の私が、今、在るのも、その流れの中なのだろうと思っています。

この四年間、あまり苦しくて、辛くてどうしたらいいのか、と悩んだことはありません。時に耐え難いような事が起きても、「ああ、私が授けていただいたもの」と考えられるよ

うになりました。私にも背負えるものを与えてくださったのだから、と思うと、少しも苦痛を感じなくなりました。

あるがままの生き方って、以前はあんなにもストレスの連続だった我が人生を、何を背負っても重いと感じなくさせてくれるようです。

時々、家族ですら「あなたは不思議な人だね」と驚く位です。

「人はどこから来て、どこへ帰るのでしよう」は永遠のテーマであるようにも見え、一方で既に知っているようでもあり、という感じがします。

ミヒヤエル君の笑顔に会いたいです。

ご家族の皆さまによりしく。お元気で過ごして下さい。

T様

緑に包まれたテュービンゲンの街も、次第に葉が色とりどりに赤や黄色に変わってきました。まさに、「黄金の十月」とこちらでは呼んでいる季節です。美しさと同時に物寂しさも感じさせてくれます。

私の家の前に立っている贗アカシアの葉も、黄色く色づいてきました。窓から望めるネッカー川の中洲に立ち並んでいるプラタナスの大樹の葉も、日を追うごとに黄色くなっていくのがよく見えます。間もなく、その葉も落ち、プラタナスの並木道は枯れた葉で埋もれることでしょう。その上を歩くと、サクサクという音がしてきます。寒い冬の到来です。

Tさんから頂くお手紙、毎回いろいろなことを考えさせてくれます。特に、輪廻転生、魂については興味深く読みました。

私自身、この輪廻、魂については深く考えたりしたことはありません。だからといって、病氣・老い・死について私が考えていないと言うわけではありません。寧ろ、私自身それに周りとの関わりから、そのことに触れる機会が多くありますので、間接的、又は直接的に思うことはあります。

ただ、輪廻転生があるかないか、魂があるかないかは、私たち人間の知識や考えをもっては明らかになることは無いと思っています。これは輪廻、魂についてだけに言えることではありませんが…。

でも、私も、恐らくTさんも、他の人も同じだろうと想像するのですが、病氣や死への不安に直面した時、安心した気持ちでいたいと願うと思います。そのような中で、Tさんのように靈魂の不滅、輪廻転生を考えることによって、気持ちも楽になって、今を「生きる」大切さを感じとられることは、とても素晴らしいと思えました。苦しさ、辛さを踏まえてこそ、それがより深く感じられるのを、Tさんの手紙を読み終えて思いました。

私自身、最期の時がどのような心理状態になっているかわかりませんが、傍に今まで関係した人がいてくれたらと願うのです。感謝の心は、死への恐怖を追いやり、永遠への希望と安らぎとをもたらしてくれるように思うからです。そのためにも、周りの人たちと、今のこの時の関係を大切に、生きて行こうと心がけています。

手紙の最後に、ミヒヤエルの笑顔に会いたいと書いてありました。

先日、ミヒヤエルと電車に乗って買い物へ出かけました。彼は窓から外の流れる景色を眺めるのが好きです。その横顔を見ていたら、ふとこちらを向き、意味もなく笑いました。

それを見て、私もにつこりしました。笑いはいいですね。笑顔はいいですね。笑顔の似合わない人なんて、誰一人としていませんね。

日本でも、これから寒さが厳しくなっていくことと想像します。どうぞお体を大切に、ご自愛下さい。

## 共感する社会へ

日本から知友たちが訪れてくると、次のような会話をよくする。

「こちらの生活はどう？ 暮らし易い？」

「ここに住んでいると、自分の時間というものが、所有できるような気持ちになるよ。そのようになると、毎日の生活のなかで、生きているよろこびがふと生じる場合があるね。日本にいたときは時間に追われ、気がつくとも、時間が過ぎ去っていたからね。その点からすると、こちらにいるといいね。それに生活し易いよ」

「どのように？」

「ここでは、いくつもの選択肢があるね。例えば、高齢者やハンデイのある人たちが、施設か自宅かの選択をすることのできるような介護保険制度があるからね。それに、女性が職業あるいは家事、又はその両方を選択できる社会となりつつあるね。もちろん、自分のように、主夫を選ぶコースもあるからね」

「一人ひとりの個の実現を目指している社会ということか」

「民主主義のよいところは、この個の選択と決定にあるのだろうな。そのなかで、よろこびを見つけることができるからね。それを支えている社会制度、その制度をつくり出している政治に市民は関心をもち、何よりも政治を監視している人が日本よりも多いだろうね」

「そうか」

「こちらに長く住んでいると、少しずつわかるのだが、市民は地域問題に強い関心を向けているね。自分もそうなってきたよ。特に、この国には州及び地方自治体の整った法があるので、それが日常生活のなかで果たしている役割は大きいものがあるね」

「そのようなことで、市民は地域行政に強い関心を向けているわけか」

「それに影響を与えている一つに、新聞があると思うね。ドイツには小さな新聞を含めると約千三百種あるが、そのなかの地方新聞を自分は読んでいます。この新聞の読み方が日本にいたときと違ってきたよ」

「どのように？」

「ドイツに住むようになってからは、まずテュービンゲンおよび周辺地域の記事十数ページを最初に読むようになったね。身近に起きている出来事に強い関心を抱くようになったのだ。特に、読者の声欄一頁は、なるべく目を通すようにしているよ」

「そうか。でも、日本は中央に集中しているので、地域に関する新聞記事が半分となると、読者が満足するかどうか」

「でも、民主主義を推進するには、地方分権と地方自治体の自立がどうしても必要なのではないか。そうでないと、日本では依然として、官僚・政界・財界の人的癒着と、談合構造はなくならないだろう」

「そう言われているが」

「中央の官僚制に集中している様々な権限を、地方に分権することが、どうしても必要だよ。地方分権、地方自治体の自立が徹底してくれば、身近に起こる行政や財政に市民は関心を持ち、政治を監視するようになっていくし」

「そうかな」

「自分の場合だと、新聞を読み、何かともの考える時間があるから、地域問題にも自然と関心が高まってきたね。これももし時間に追われているような毎日の生活だったら、生活上の必要性があるとはいえ、地域問題から遠ざかってしまうだろうな」

「地域の問題を考え、行動するだけの生活のゆとりと、特に、時間のゆとりだな」

「こちらでは、年間三十日間休暇を取らないと、バカだともいわれているよ」

「そうか」

「最近、地域政治に関して、驚いたことがあったよ」

「どんなこと？」

「ある女性の市会議員と知り合って、彼女から話を伺ったのだが。チュービンゲンの市会議員は六四名で女性は三分の一。それに、ほとんどの議員は何らかの職業を持っているんだよ。彼らには、議員としての給料が無いのだ」

「給料がない？」

「そうなのだ。でも、週に一回開かれる市議会と、各種専門委員会に出ると、わずかに手当を得るようだが。それでも一回の議会に、四千円もいかないようだけど」

「それは驚きだな。まさに市民による政治だな」

「市財政も助かるだろう」

「そういうのを聞くと、健全な社会のように見えるが」

「とにかく、この社会のなかで暮らしていて感謝するのは、社会保障が充実していることだね。例えば、医療費は無料、学校教育も無料、ただ最近は大学に一年間十二万円ほど払わなければならなくなったが。もちろん、市民たちは高い税と保険料を納めているから、それが可能なのだが」

「日本では、それが心配で、懸命に働き、貯蓄をしなければならずだ」

「この地に暮らしていると、お金は常に動いて循環しているなということがわかるね。そのように思うのも、社会保障が充実しているので生活そのものに不安がともなわないのだよ。貯金などをする必要がないともいえるだろう。その社会保障の歴史は、ビスマルクの時代から百二十年以上も続き、市民たちは様々な困難を経て、それを勝ち得たのだろう」

「そうか。消費税も高いのだろうか？」

「少子化なこともあって、その財源の獲得として、来年から二パーセントアップして十九パーセントになるね。それに反対の声をあまり聞かないね。社会が、地域が子供を育てていくとの考えがあるからだろうね。だから、二十七歳まで支払われる子供手当でも、所得制限がないのだろう。ハンデイのある人の場合、一生もらえるよ。とにかく、これから男性も容易に育児休暇が取れるようになるとのことだ」

「市民が政治を信頼しているから、そのようなことができるのかな」

「今は二大政党が協力して政府をつくっている。失業率が高くなったから、そうせざるを得なくなったのだろう。でも、いずれまた、意見を戦わせるよ。民主主義の国だから」

「廃村とか格差の問題は、どうなっている？」

「廃村については、ほとんど耳にしないね。家族と一緒に暮らしているからわかるのだが、この国は家族、特に、パートナースhipを大切にしているね。市民の生活の基は、これだろうな」

「でも、三組に一組は離婚すると聞くぞ」

「そうだね。確かに、自分の周囲にも何人か離婚した人がいるよ。でも、彼らを見ていると、徹底的に話し合って別れ、休みになると、子供を片方の親のところまで過ごさせたりしているよ」

「離婚は、子供がかわいそうだよ」

「でも、子は親の姿を見ながら育つところもあるよね。その親同士が口もきかなくなると、いつも嫌な雰囲気在家中に漂っていたら、子供への心理的影響はマイナスになってしまうのではないか」

「日本でも離婚の数が増えてきていることは確かだ。女性が働いてやっていけるようになったし、経済的基盤が整えば、もっと離婚は多くなるだろうな」

「とにかくこの国では、何か問題が生じたら、とことんまで話し合えといわれている。コミュニケーションの大切さを身にもって知るよ。自分自身、特に、毎日の暮らしのなかでパートナースhipを大切にしようになったね。廃村がないのも、家族の、パートナースhipのおもしろみがあれば、どんな片田舎でもいいのではないだろうか。小さなよろこびが、大きな幸せを運んでくれるからね」

「若者が働く場がなかったり、病院がなかったりしたら、どうする？」

「最も身近である家族とパートナースhipを軸に動いているこの国では、そのためにも市民一人ひとりを守る社会保障が整っているね」

「そうなのか」

「格差の問題でも、正規社員とパートタイマーとの社会保障の違いはない。現に、妻は八十パーセントの仕事をしているが、百パーセント働いている人と変わりはない。いや、むしろ社会保障の恩恵を多く受けているくらいだ」

「それはいいな」

「ドイツにはドイツの、日本には日本の長い歴史があって、今があるよね。最近、その歴史をよく考えることがあるね」

「歴史？」

「うん、こちらは近代の歴史のなかで、何が起こったのかを徹底的に市民に知らせているね」

「ヒットラー政府のことか。あれだけの惨いことをしたのだからな」

「今のドイツがあるのは、それが基になっているように思えるね。市民は、歴史から学んでいるよ。ここで暮らしていると、それを肌で感じるね」

「そうか」

「それと、宗教が何かと社会のなかで影響を与えているように見えるね」

「どのように？」

「学校では宗教の授業もあるし、祭日の多くはキリスト教に関するものだし。それを背景にしたものかどうかかわからないが、こちらの人は思っていることは、正直に口に出して言

うね」

「日本では、宗教や哲学の存在感が薄くなってきたことは確かだが」

「日本での仏教も神道も、こちらのキリスト教も、もと（本）となるところは同じだと思うのだ」

「もと？」

「その本が何かを言葉で十分に言い表せないが、まごころというか、より純粋な正直な心とでもいえるのではないか。それを意識して毎日暮らしていけば、生活に潤いができるよ。それは、日本でも同じだろうが」

「そうだな」

「あとと言えることは、こちらは自分から何かをつくり出そうと仕向けられている社会だね」

「それは、どういうことだ？」

「例えば、週日は夕方の六時半で店は閉まり、日曜・祭日はレストラン以外開いていない。そうすると、自分から何かをつくり出さないと退屈になるね。長い年休もそうだ。また、パートナーや家族や人との関係も、自分から絆をつくりあげていかないと、つまらなくなるし……」

「きみが言いたいのは、ものやお金を生活の質の基準としていない社会ということか」

「そうだね。日本は高度成長期にもものやお金を求め、消費する社会をつくったからな。むかしの日本人は、一人ひとり自分から何かをつくることに意味を見つけていたと思うのだ」

「それは言えるかもしれないな」

「自分が消費者となるよりも、生産者となったほうがおもしろいよ」

「そうだな。自分から何かをつくり出そうとする社会か」

「しかも、他の人と共感する意識が強ければ強いほど、その社会は住み易いといえるだろうね」

## 共に、そして感謝

日本から一通の手紙が届いた。そこには、次のようなことが書かれてあった。

謹啓

こちら日本では木々の緑も濃くなり、初夏の陽差しが感じられる季節となりました。

先日は横井さんの書かれたものを送っていただき、ありがとうございます。

読ませていただき、横井さんの、息子さんのミヒヤエル君によせる愛情と思いが伝わってきました。また、息子さんの自立に向けてのとりくみのなかで感じられた、人と社会とのあり方についても興味深く読ませていただきました。

結局は、横井さんの言う「共に、そして感謝」に集約されるものだと思います。

人との関係や社会システムの問題については、それぞれのレベルで解決に向けてのとりくみには必要ではあるけれど、不十分な社会や、心ない他者や、そして自らの運命を恨んだり、憎んだりするところからは、幸せは生み出せないのだと最近、強く感じています。恨みや憎しみに生きる生き方は、一つの逃げでしかないからです。

私が勤務している福祉工場には、知的ハンディを持っていて働いております。

社員の中には、さまざまな困難や問題を抱えている者が少なくありませんが、自ら直面している問題を直視し、家族や仲間の力を借りながらも、自らそれを乗り越えようとしている社員こそが、幸せに近いのではないかと感じます。

それは、ハンディを持っていないとかは関係なく、どの人間にもあてはまるのだとも思います。それは、自分自身に気づくことであり、「あるがまま」の自分を受け入れることでもあります。

そうして、自らが自立へのステップを踏みながら生きる時、他者への感謝がさらに深まってくるのだと思います。

私が大切にしている言葉に、「自ら生き、他者も生きる」という語があります。

自分を愛せる人こそが他者をも愛することができる、そして、自らの仕事に精一杯とりくむことが他者との協力を推し進めることができるなど、さまざまな場面でこの言葉の重みを感じております。

「共に、そして感謝」との語、人だけでなく、自然をも視野に入れた、広がりのある言葉で、とても好きになりました。

敬具